

鹿児島県史料集
(41)

薩藩学事二・
薩藩学事三

鹿児島県史料刊行会

薩藩学事二 正誤表

解題 二P 一・二行目

(正) 二通の書簡が初めに収められている。その後に、江戸時代の後期に薩陽士、向井友章(滄浪)が書写した日本の儒学者の系図を、後世の人が明治二十(一八八七)年に書きしたもののが記載されている。さらに、古代に「千字文」を

(誤) 二通の書簡が初めに収められている。その後に、明治二十(一八八七)年に薩陽士、向井友章(滄浪)が書写した日本の儒学者の系図が記載されている。古代に「千字文」を

解題 二P 三行目

(正) 荻生徂徠等の事蹟も記している。

(誤) 荻生徂徠等の事蹟を記している。

鹿児島県史料集
(41)

薩藩学事二・薩藩学事三

刊行のことば

鹿児島県史料集第四十集（平成十二年度刊行）「薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料」の続編として鹿児島県史料集第四十一集「薩藩学事二・薩藩学事三」を刊行いたしました。

本書は、「薩藩学事二」で江戸時代の儒学者の伝記や学制沿革のほか、藩主の布達などに関する史料を収集し、「薩藩学事三」では、薩南学派の祖である桂庵玄樹の史料を中心に掲載しました。鹿児島県史料集は、昭和二十四年の刊行以来、長期に亘り地方史研究家の利用や県民の文化の向上に寄与すると共に、貴重な史料の保存を目的に現在にいたしております。

今回は、鹿児島県立錦江湾高等学校の畠中彬氏によつて、原稿作成・編集・校閲・校訂が進められ刊行の運びとなつたものであります。

公務多忙の中、長期間にわたる同氏の御苦労に対し、心からお礼申し上げます。

平成十四年三月

鹿児島県立図書館長

前城美章

解題

「薩藩学事一」は、江戸時代の儒学者の伝記をはじめ、薩摩藩の学制沿革・藩校造士館・演武館に関する事、及び藩主の布達等を収録したものであり、「薩藩学事二」は、薩南学派の祖、桂庵玄樹の史料を中心としたものである。以下各々の事項について、略述していきたい。

薩藩学事一

道統總圖 堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子・子思・孟子・朱子など、儒教に関して聖人の道を伝えた者と見なされる多数の高僧の系譜を記述している。

西宋學傳統系圖 幕末期に薩摩藩の記録奉行となり、「薩藩旧記雜錄」の編纂者として知られる伊地知季安は、若い頃より朱子学にも関心をもち、桂庵玄樹を祖とする薩南学派について究明し、「漢字起源」四冊を著述した。その準備として、季安が文政十（一八二七）年に編撰したのが「西宋學傳統系圖」である。桂庵をはじめその門下の僧（岐陽・文之・如竹等）の事蹟が記されている。

大龍開山文之和尚行狀 戦国末期から江戸初期の禪僧、南浦文之の行状を雲隱嗣祖比丘慈宣が、元禄三（一六九〇）年に記したものである。文之は日向の出身で、「鉄炮記」の著者としても知られている。禪門儒学を学び島津義弘に儒学を講じ、鹿児島城下の大龍寺開山となっている。薩藩の儒学は文之によって大成され、その門下に伊勢貞昌や屋久島生まれの泊如竹などがいる。

伊勢貞昌復前川為善書 これは、島津家十八代家久の家老、伊勢貞昌より、韓国から帰化して島津義弘等に仕えた儒者、前川為善に宛てた返書の内容である。島津家十一代忠昌が桂庵和尚を、薩摩に招いたことやその門下の文之和尚が大龍寺を建立したこと、また十八代家久・十九代光久の御側に為善が招かれ、作詩・連歌の指導をしていた。為善を推薦したのは重昌であつたことなどが述べられている。

日本儒者之系圖 江戸時代の初期、島津家十八代家久の家老となっていた川上久国が、伊作の地頭職を兼任していた承應一（一六五二）

年に、伊作の西福寺（時宗）へ送った二通の書簡が初めに収められている。その後に、明治二十（一八八七）年に薩陽士、向井友章（滄浪）が書写した日本の儒学者の系図が記載されている。古代に「千字文」を日本へ伝えた百濟の王仁をはじめ、平安・鎌倉・室町時代を経て、江戸時代の藤原惺窓・林羅山・林信篤・新井白石・伊藤仁斎・荻生徂徠等の事蹟を記している。

自堯舜至清支那学派盛衰考 向井友章（源五左衛門・滄浪とも称す）が中国の堯・舜・禹・湯・文・武をはじめ、孔子・孟子・荀子・周易より秦・漢・魏晋・宋・齊・梁・隋・唐・五代・宋・元・明・清に至るまでの儒学の変遷・盛衰に関して叙述したものである。友章（滄浪）は十八歳の時に江戸の昌平舎に遊学している。

旧鹿児島藩学制沿革取調要目 島津家二十五代重豪は安永二（一七七三）年に藩校造士館及び武芸奨励のための演武館を創立している。これらの藩立学校設立に関連して藩内学事上の諸制度や沿革・布達・規則等を収録している。主な内容は、士族・卒の子弟教育方法、平民の子弟教育方法、家塾・寺子屋設置の制度、学校の名称、校舎の所在地、沿革要略、教則、学科学規試験法及び諸則、生徒罰則、職名及び俸禄、職員概数、生徒概数、学校経費、藩主臨校、祭儀、学校の構造、学校出版の書籍及び蔵書、音信贈答の事、衣服の事、軍役の事、勧農の事など多岐にわたって記されている。

造士館・演武館 藩校造士館の学頭・教授の氏名や、元禄十五（一七〇二）年の島津家二十代綱貴公による教訓之條々、宝永三（一七〇六）年の二十一代吉貴公が文武芸を奨励する旨の袖判条々、二十三代宗信公や二十五代重豪公の時代に布達された綱紀肅止に関する法令等が記されている。さらに安永一（一七七二）年に聖堂（のち造士館）及び武芸稽古所（のち演武館）が、二十五代重豪により創建されたので、領国中いつそう文武の奨励に励むべき旨の達しなどが記されている。

良将御書徳川家康公御幼年ノ際 教育書 よき武将となるため、徳川家康が幼年期に学んだ教育書の内容を含めて、種々の書物から抜萃している。例えば学文武芸の推進をはじめ、質素儉約、我儘を戒めて親孝行をすべきこと、奢心をなくして堪忍すべきこと、他人の事を先きにして自分のことは後に廻すべきこと、武士の業に専念し良智を致すこと（花園会規約）などが記述されている。

長善館ノ設立ニ就キテ私見ヲ述フ 明治時代に東京大学に遊学した体験より、鹿児島城下の第一高等中学造士館に共同寄宿所（のち長善館）の設立を要望した時の赤沼金三郎（当校の学生）の文書である。これは、城下の諏訪青年会誌十五号からの抜萃である。赤沼は

当時の第一高等中学造士館が、道義上低迷していることなどを憂え、学生が父母の膝元を離れて合宿し、切磋琢磨することで学校の活性化を計りたいと主張している。その結果、共同寄宿所としての長善館は設立された。

御眞影謹拜今上天皇
皇后 明治天皇・皇后の御眞影を、鹿児島尋常師範学校が拝載するため、明治二十一（一八八八）年の天長節に際して県庁より宮内省にこれを申請し許可された。同年十一月一日に同校生徒一同が参加して渡辺千秋県知事より同校への授式が行われ、その後、同校の講堂に奉置されることになった。

忠重公家庭学校ニ於テ修身問題御答辨 島津家三十代當主、忠重公（二十九代忠義の四男、海軍大学校を卒業、のち海軍少将となる）が十歳の時、先生の修身に関する難しい質問に対し、「命をかけて突進したい」という勇気のある答弁に、敬服した旨が記されている。

薩藩学事三

永樂十三年乙未撰四書五經云云 日本の中世・近世封建社会の精神的支柱となっていたのが宋学（朱子学）であったことは周知のことである。四世紀末に百濟の王仁が日本へ「論語・千字文」を伝えた後、鎌倉時代に律宗の僧、俊芻が中国に渡り初めて宋学（朱子学）をもたらした。室町時代には五山僧侶（臨済宗）を中心とした儒学の隆盛が見られる。しかし、一四六七年の応仁の乱以降、戦国時代になると、京都を中心とする僧侶・文人学者らは戦禍を避けるため地方に下った。その例として、南村梅軒は四国の土佐に赴き海南学派の祖となり、長州出身の桂庵玄樹は、島津家十一代忠昌に招かれて薩摩に下り、薩南学派の祖となつた。彼は文明十三（一四八一）年には国老、伊地知重貞と共に、朱子の新註釈書として初めての「大學章句」を刊行している。薩南学派の略系譜を示すと、岐陽（不二・東福寺）→惟肖→桂庵（島陰・薩南学派の祖）→舜田→月渚→南浦文之一→泊如竹→愛甲喜春→東郷重経→伊集院俊和と続き、彼らは當領内の歴代の太守（藩主）やその家臣・士民らを教導し、領国体制の維持に貢献をしている。「大學」・「中庸」・「論語」・「孟子」の四書の解釈を容易にし、〔和〕傍説をすすめるためには〔和〕倭點（訓點）を施す必要がある。古来、「論語」・「孟子」などには古點はあるが、新註は無點本であり解説が困難であるという。四書新註が最初に伝來した時期や、それに倭點を初めて付した人物についてでは諸説があることを紹介している。四書新註の伝來の初めを、六代將軍義教時代の応永年間（一三九四年～一四二八年）とする説は、桂庵の著述した「家法〔和〕倭點」の元和本に拠っているが、これは誤写による誤りで、六代義教時代の永享八（一四二六年）としている。ま

た、四書に倭點（訓點）を初めて付けた人は東福寺の岐陽和尚であり、建仁寺の雲龍庵に岐陽の講説を書き入れた「論語集註」があつたという説が見えるが、その書物は残存していない。岐陽は明の府州郡縣には皆、学校があるのに、日本では足利学校のみであることを探している。四書が日本に伝来して岐陽が倭點を施し、これを惟肖に授け、さらに桂庵に授けた。桂庵は明より帰国してこれに修正を加えて、さらに薩南学派の舜田一月渚——翁一文之一如竹に至り倭讀の改正がいつそう進められていった。

僧桂庵、本貫周防山口人 桂庵玄樹は応永三十四（一四二七）年に周防國、山口に生れた臨濟宗の僧で、別に島陰・海東野釋と号した。九歳の時、上京して南禅寺に入つて参禅し、同寺の惟肖得巖に師事し、また建仁寺の惟正明貞や東福寺の景召瑞葉より新註の四書を学んだ。十六歳で出家したが、師の惟肖が双桂和尚といわれていたので桂庵はそれにちなむものという。応仁元（一四六七）年、遣明使の一人として明に渡り、杭州・蘇州に滞在して尚書（書經）を学び文明五（一四七三）年に帰国した。その後、京都の兵乱のため、豊後・筑後・肥後（菊池氏の招聘）などを遊歴して儒書を講じている。文明十（一四七八）年に、島津忠昌の招きで鹿児島を訪れ、多くの功績を残した。初め磯の田之浦の桂樹院島陰寺に居住し島津氏や家臣に講書し、のち長田町に移り七十六歳の時、東帰庵（伊敷村）に移り、永正五（一五〇八）年に八十二歳で没した。かつて岐陽和尚の施した四書・六經の倭點を改削し、明応十（一五〇一）年には「家法倭點」^{（著）}を著述し、これより先、文明十三（一四八二）年、国老伊地知重貞と相談して、朱子新註の「大學章句（文明版大學）」を刊行した。これは現存していないが明応元（一四九二）年に再刊された「延徳版大學」が現存している。これらは、原漢文に返り点や送り仮名をして漢文を日本文に読み始めた書である。その他、彼の著作として「島陰集」（島陰漁唱）・「島陰雜著」・「南游集」（佚亡）などがある。その後桂庵を祖とする薩南学派の流れをくむ月渚・一翁・文之・如竹・愛甲喜春など多くの学者を輩出した。江戸初期に朱子学派の中心をなす京学を創始した藤原惺窓に与えた影響も大きい。惺窓は慶長元（一五九六）年、新註の四書に倭訓のないことを憂えて、筑前より渡明しようとしたが、難破して薩摩山川の正龍寺に寓居し、文之和尚の倭點を施した四書を見て驚き、この倭點本、及び、桂庵和尚の「家法倭點」を書き写し、渡明の必要なしと判断して京都に帰った。

戦國英雄集録抄 この書物の中で桂庵和尚は、東福寺に参禅して儒書を学んだ。四書の古註に疑問をもち、新註にも接したが、納得できずに渡明して、その後、帝都の将軍足利義晴、三管領の細川晴元など無道のため気が進まず、島津家十五代貢久に招聘され、薩摩に

儒寺を建立したと記述されている。これらの史実について、幕末の史学者、伊地知季安は、將軍名・管領名・薩摩の当時の領主名などに史実の誤認が多々あることを指摘している。

鳩巣不亡鈔第一抄 この書物は、江戸時代の朱子学派の内、藤原惺窓に始まる京学の流れをくむ木下順庵の弟子（木門十哲）として新井白石と並ぶ墨鳩巣の著作で、桂庵の功績を説いている。鳩巣は朱子学の立場を守り、享保の改革を行つた八代将軍吉宗の侍講にもなっている。薩藩に於いても児玉圖南・愛甲喜春・郡山良雄・志賀登龍（親草）などが、江戸に遊学して彼に学んでいる。この書物によれば、学問の源泉は伏羲の河圖にありて、それより文・武・周公に伝わり、孔子・孟子に達し、程子・朱子に受け継がれていたとしている。また、桂庵の渡明のいきさつや、帰国後、薩藩に下つて朱子の新註を弘めたことなどが述べられている。

論語集註卷之三云云 薩摩の儒学は、桂庵玄樹が基礎を築き、その流れをくむ南浦文之によつて大成されたと言える。ここでは、まず城下士、本田親草藏本の「論語集註」の一部分が紹介されている。

次に、新註の四書に関して、岐陽をはじめ、桂庵・文之の倭點本の実績があることや、京学の藤原惺窓が、渡明の際、難破したために山川の正龍寺に寄留して、倭點本や新註の四書等を書きして江戸に帰つていつたことが記されている。さらに、正龍寺藏本に拠る當時の儒僧（桂庵・文之・如竹・惺窓・羅山）の動向や倭點法のこと、「西藩野史」に基づく惺窓の入明のいきさつや、桂庵和尚の東帰庵（薩摩国、伊敷村）のことなどが記されている。

京五岳諸老詩 桂庵をはじめ、その門人らは儒学を講ずると共によく詩文を作つて唱和し、また京都の五山十刹の諸長老へそれを贈答していたので、桂庵は西海に高臥していても、名声が上方に聞こえていた。桂庵の詩集として、「島陰集」（「群書類從」文筆の部に残存）とは別に「南游集」（遊明中の詩文を集めたもの）があつたが、これは門人、雲夢崇澤が上京した際に紛失して現存しないという。「島陰集」は、応仁二（一四六八）年に桂庵が明の天子に朝賀して以来、毎年元旦に記齡の詩を作り、編年体でまとめられたものである。その後、桂門の東林居士（佐々木永春）が明応四（一四五九）年に入明する際、この「島陰集」を持参して明儒に示し、序および贈詩を願つて成立したものであると言われている。「島陰集」の中で特に知られているのは、陳祖田と竹田昭慶の二大医師を送る詩である。二人は島津家十一代忠昌の病気を治すため、京都から来薩している。陳祖田の兄は周防（山口）の禅僧であり、桂庵と親しかつ

たので祖田と交情が厚かった。祖田は帰京して、桂庵の詩を五山の諸老へ報知している。後に桂庵はこの原稿をなくしたので、祖田から再度求めている。また、文明十七（一四八五）年に將軍足利義尚の命で忠昌の病気を診断するために洛医、竹田昭慶（定盛）が来薩した。彼は長享元（一四八七）年に帰京するが、その際に桂庵が託した詩句が昭慶によつて京師の諸老に喧伝されている。その他、京都の巣松以安は南禅寺で学んだ後、高麗へ使者として渡り、王へ詩を献じ、帰朝して吟詠し、桂庵を慕つて文亀元（一五〇一）年に来薩している。その詩集として「巣松集」がある。また桂庵は五山の禪僧、蘭坡（景臣）をはじめ、周麟（景徐）・雲夢などと親交があり、贈答の詩和が見られる。

目 次

薩藩學事二

一 道統總圖	1
二 西 藩宗學傳統系圖	9
三 大龍開山文之和尚行狀	31
四 伊勢貞昌復前川為善書	32
五 日本儒者之系圖	34
六 自堯舜至清支那學派盛衰考	39
七 旧鹿児島藩學制沿革取調要目	43
八 造士館・演武館	52
九 良將御書	60
○ 長善館ノ設立ニ就キテ私見ヲ述ブ	69
一 御眞影謹拜 <small>今上天皇 皇后</small>	73
二 忠重公家庭学校ニ於テ脩身問題御答辨	73
76	75

薩藩學事三

一 永樂十三年乙未撰四書五經云云	1
二 僧桂庵、本貫周防山口人	1

三	戰國英雄集錄抄
四	鳩巢不 ^亡 鈔第一抄
五	論語集註卷之三云
六	京五岳諸老詩
		101 96 93 93

例　　言

一、本史料集は、鹿児島県立図書館所蔵の「薩藩学事」、全三冊の内、江戸時代の学者伝や藩主の布達などを収録した「薩藩学事二」及び薩南学派の祖、桂庵玄樹の史料を中心とした「薩藩学事三」を底本とした。全三冊の内「薩藩学事一」については、「薩藩学事一・鹿児島県師範学校史料」（鹿児島県史料集第40集）として、平成十三年三月に刊行され、本史料はこれに統くものである。編著者名の記載はないが、卷末に「大正三年四月二七日購求」の鹿児島県立図書館受付印がある。同書は正本と閲覧室用の複写本の二揃いがあり、両者の内容は同一であるが、卷の表題について違いが見られる。即ち、正本において明治時代の学校関係史料を集めた「薩藩学事一」と「薩藩學事二」が、複写本では入れかわっている。

一、原稿作成と印刷に際しては、できるだけ原本の体裁に従つたが、頭書は注記して行末に移した。

一、印刷に際して、原則として常用漢字に改めたが、人名・地名などは旧字体を残した。また変体仮名はすべて通用体の半がなに改めた。但し、江・者・茂・而・与・らについては、活字を小さくしてそのまま使用した。

一、文書類に原題があるものはそれを使用した。

一、原文を読みやすくするために適宜、読点・並列点などを付け、二行文はポイントをおとした。

一、文字の不明なか所は字数によつて□□で示した。

一、明らかな誤字については訂正して記入した。

一、本史料集の原稿作成と校訂は畠中彬が担当した。

薩藩學事二

二 學事

共二冊

伏羲 神農 黃帝 堯 舜 禹

伊尹 太公望

曾子

湯 文王 武王 周公 孔子 子思 孟子

萊朱 散宜生

顏子

呂原明

呂好門

呂祖謙

徐橋

胡憲

魏掞之

邵子 謙定

劉勉之

朱子發

謝顯道

帳敬夫

周子 程子 楊中立 胡仁仲 李愿中 朱子

羅仲素

帳子 陸子

周子

陸子

楊簡

趙復 許衡 姚燧

輔廣 魏了翁

杜暉 杜範 車若水 黃超然

黃幹 阿基 王柏 金履祥

蔡基定 蔡沉 蔡沈

真德秀

右、自伏羲以至周公、皆以繫籍聖賢開斯文之統、自孔子・曾子・

一、道統總圖

道統總圖

皇陶

一、道統總圖

一、
西
藩宋學傳統系圖

一大龍開山文之和尚行狀

伊勢貞昌復前川為善書

日本儒者之系圖

一白堊舜至清支那學派盛衰考

一旧鹿兒島藩學制治革取調要目

一造士館・演武館

良將御書

徳川家康幼年
ノ際、教育書

一長善館ノ設立ニ就キテ私見ヲ述

一御真影謹拝

一忠重公家庭學校ニ於テ脩身問題御答辨

子思至於孟子雖不在其位、然獨以其道繫千古之脉、故繼三王子之後、

孟子沒千四百年惟河南程氏學為得其傳、程氏之後蓋鮮其人問

一有之、依傍揣度區々於訓釋經文見之、未嘗言之未純未敢遽謂能傳道也、然而無有乎、爾則亦無有乎、爾余故俱列之于圖、

孔子

名字仲尼、其先宋人六世祖、孔父嘉之子奔魯、遂為魯人父叔梁

紇、母顏氏禱于尼丘生孔子、因名丘少習禮容適周見老子曰弟子、

益進適齊景公欲以尼谿田封、孔子晏嬰沮之退而脩詩書禮樂、魯定

公以孔子為中都宰一年、四方皆則之進為司空復為大司寇、三日而

誅少正卯齊懼與魯會、干夾谷孔子攝行相事遂歸所侵之由、還陸三

都齊人饋女樂而孔子適衛歷聘、各國復歸魯正樂晚、而喜易因魯史

作、春秋年七十三卒、宋學繹傳圖、

寧山宋國台
州人、
僧師鍊號虎闕
平安人、
北嵒親房

僧一慶字雲
草、
僧正猷字竹菴

僧岐陽名方秀
陽号不二
道人、
僧惟肖名得嚴
字蘭坡

僧惟肖名得嚴
字蘭坡、
僧為璠字器之

僧周信字義堂
空華道人、
僧輝菴名龍惺
泉州人、

僧景祐字雲
竹、
僧景三號橫川、

僧如竹
僧一溪
僧日東

空華道人、

僧都芳名春、
號曉鏡、
僧祐田

○許三官

僧玄章

○郭國安

僧間得

○林百梅

愛甲喜春

○龍雲

慈眼公

○伊勢貞昌

仁禮賴景

寬陽公

河野通顯

河野通古

河野通朗

僧不門

夢窓法嗣

僧景徐名周麟
号宣宜

僧雲澤字宗

号崇

僧天澤

字崇

春

日新公

字玄

號雲興軒

僧月渚字文得

號宿蘆

僧舜有

號三枝

僧舜

號一翁

號一枝

僧文之

號昌

字玄

號雲興軒

僧柱菴字玄樹
號昌陰、

僧都芳名春、

號曉鏡、

僧祐田

僧玄章

○郭國安

僧間得

○林百梅

愛甲喜春

○龍雲

慈眼公

○伊勢貞昌

仁禮賴景

寬陽公

河野通顯

河野通古

河野通朗

僧不門

僧學之

曾山恕心

藤惺窓

林羅山

見レ人道生
人見友元木下順庵

僧泰岳

浦川某

那波活所

那波木菴

僧泰岳

松永昌三

木下順庵

伊勢貞昌
島津久通

藤崎公綱

山口治易

石川丈山

宇都宮遜菴

永田善齊

大迫尚純

相良頼安

林東舟

新井白石

菊池東勾

有馬純廣

寛陽公

松木昌菴

榎原簣洲

林春信

新納久詮

東郷重詮

竹内某

島津久胤

林鳳岡

三原重庸

諭訪兼利

大玄公

堀杏庵

島津久通

相良長英

竹内助市

島津久胤

永田善齊

穎姓久政

伊集院俊知通

川上親武

菊池東勾

僧文岳

白濱重昌

石川丈山

宇都宮遜菴

僧梅屋

竹内仁角

林東舟

新井白石

僧壽丘

愛甲喜春

松木昌菴

榎原簣洲

僧別宗

愛甲季経

林敬吉

林春齊

僧九峯

僧東明

島津久竹

慈德公

島津主殿

正安元年宋國台州、僧寧一山逼于使命來朝、本邦十二月遂召相陽
主建久席居之四載(乾元年十月遷住圓覺寺)、法親濟々萬衲鑽仰、於是鍊亦就寧

亘古亘今雜儒釋書紳繹審詢寧、因問本朝高僧事蹟鍊多不記、寧日公之博辨涉異域事章、然可悅而至本邦事頗涉酬對何哉、鍊懶服其言矣、於是遍老國史及雜記著元亨釋書三十卷、二年上 其文曰仲尼沒而千有餘歲、只周濂溪獨擅興繼之美矣、嘉曆元年出世三聖、正慶元年藤承相聘董東福、曆應元年詔興南禪、四年解印居海藏院
在東康永元年 村上帝賜國師號、貞和二年七月二十四日泊然而遊、
世斷十九

釋周信字義堂、號空華道人、姓平氏土州長岡人、母藤氏橘五臺山

夢白氣入懷而妊、以正中二年生在胎、十三月既生天資豪爽識超群

童、年十四上^寶山登壇受戒、稟密法於道圓闍梨魯誥、竺墳泛覽無遺、年十七人洛拜夢慈國師於臨川師事之遂契、玄旨國師滅後、依龍山^{字口見}於健仁靈利真參聲馳華夷、應安四年上杉氏授報恩寺於有之、鎌倉請信為開山、僧戶居相三十余載、宗趣贍博有照人鑑、四方雲衲凡見舉列刹者得人云、康曆元年源相義滿召董建仁其入寺也、台施入山冠纓紹炳壇衍廊、永德元年九月、有儒學孟子書疑、其義或異者乃二十二日、就信而質信曰、近世儒書有註新舊、而其新義則出程朱等所以名見不同也、二十五日敢之間於其二學孰為優乎、信曰漢唐儒者皆拘章句而、宋儒乃達性理故、其所釋太高矣
出日用工大集、但此年二月改元永德、然猶唐曆三年云々、至德三年陞南禪寺四海龕納爭先聚臻、先是^{水德}三年、岐陽亦自相隸名南禪、旣講空於其寺中見自博、而其倡

宋亦甚基焉、夏源相委朝以南禪、位為五山第一秋謝憩乎慈氏院、嘉慶一年知病不起、乃命作合龍四月一日、自製其四銘レ日端堅示滅年六十四、空于本院信之器識淵偉道儀、古高與衆同甘苦禪坐諷涌、雖疾不闕以辛勤死所素願云、弱善翰墨明僧楚石等、見稱謨焉所著述有語錄及空華外集、日用工夫集若干卷、又選宋元偈頌為十卷、日貞和類聚祖苑聯芳集、皆行于世其餘記鈔等尚多矣、

疎石字夢慈姓源 初名智曜伊勢人

天龍寺開基、祖心二年九月

僧祖應

僧祖應號夢巖雲州人、自幼英發早慕桑門、禮謙潛溪於東福落髮、稟戒司藏經鑰後帰毘舍鄰門欲卻掃殆二十年、各翼遠翔問道者、衆遂承釣帖出世、東福博覽雄辨、而善屬文時與巖月中齊、名又據大方而負時名者、若大岳崇東漸易大遇智、岐陽秀、惟肖巖等皆遊其門、應安七年十一月二日、安庠告滅門人空、於本成塔側敕謚大智、圓應禪師有語錄外集日早霖集

僧周崇

字大學自呼全愚道人、姓一宮氏阿州人、以貞和元年乙酉生棄塵俗、深慕禪那父察其志投州寶陀寺、附默翁誠公資性敏利內外、經書觸手輒識而通、大義翁甚寵器、從翁遷監川圓頂宣具禪餘、好學不登冠歲百家之篇、靡不涉獵又如相州閱金澤庫書謁、諸名直莫不

許可帰洛受翁記勅、源相義滿尊信禮待、應永九年壬午春出世相國
繼遷天龍源相贈以金襴伽梨、親臨聽法如無績功、牧菴忠十七餘員、
門人濟々列班世稱得多士矣、特賜寵命重陞寺位為五山第一菴、南
禪寺時畿內早久法事無臨、源相乞崇及唱于神泉苑曰、

泉苑欲尋空海蹤、靈山佛意敕神龍、方今天下夏枯洞、一雨宜沾
萬國農、

即時西降蓋國抑舞遷鹿苑院職、僧錄司萬年山慧林靈、龜山性智皆
退休之地、晚年復住天龍三十年、癸卯九月十四日、化于寶積閱世
七十九、

僧健易

号東漸姓藤氏遠州人、母源氏、以康永三年甲申生、初母夢龍石娠、
因名龍石子、觀應元年庚寅年甫七歲、投華峰一公稍長剪髮、稟具
素好讀書漁獵、内外偏遊、列剎釋力實於建長首衆于相國、明德中出
黃遠之華藏振之、廣嚴又移備中王瑞先席、而歷遷洛之安國東福南
禪、應永三十年癸卯四月疾于常在光寺、十四年源相義持人寺問疾、
十七日端坐示寂年八十歲、塔在東福寺回輝菴、有諸會語錄龍石藁
等若干卷、

僧性智

号大愚俗氏無傳山城人、童齒脫塵于東福、學業博贍、名于五岳自
其印心、於弘大海潛隱洛汭、以養菴堂鑑彩藏用餘四十年、應永三

年丙子秋、應同門請出世勢之、安養居之四年、六年亡印遷駿之清
見、源相義滿招以名藍住東福、南禪、又徒天龍、健仁普門鹿苑常
在光寺、永享十一年己未六月晦日、取滅於慧日山堆雲菴年八十餘、

○僧岐陽

諱方秀、字岐陽號不二道人、俗姓佐伯氏、父名清泰讚州人、母源
氏夢獲珠劍寤而有妊、以貞治二年癸卯之歲生、及生州亂父清泰奔
北越母携秀入洛、依外祖父業儒見其英敏、日孺子可教授以詩書不
勞誦誦、及祖父卒從泉石竄了東福執童役、應安七年甲寅年十二持濬
靈源於安國親炙、八年大增和解開法於道福、永德二年辭往相州掛
錫龜谷謁禪師、明年回洛隸名南禪遊南北講肆、至德三年周信秉董

南禪、頗知程大小經論靡不探頤、明德三年壬申秀年三十、而歸東
福乃司藏鑰由後版尋遷前堂賞從、及愚中得發藥多後為偈寄曰、
象王行處絕孤蹤、一喝何妨三日聲、卽此用弓離此用、虛空突出

妙高峰、

愚中觀大称之、應永九年明主惠帝、遺僧天倫日舜、一菴日如來朝
本邦秀乃欲面識、而官禁不許屢通書問二僧、稱其博才、幕府義
持常招河法宗敬、尤應由普門遷董、福儀持賜之金襴衣據高位
傳考書、十年、國朝使舶載四書及詩經集註等還自明、八月三日齋致之洛秀乃
講之事見大金繁頭、但時岐陽居東福之不二院云、按高僧傳、其機不二菴為應
水二十七年以後、則不合孰有誤焉耳、

當時新註未行乎世、足利學々校小野所創而中右移之、城
教其生徒

猶以古註而多、未知世有新註也、秀博悼之每講新註輒有諭焉、曰夫志乎、學者其必讀之勿、徒取彼所乘書遂加倭點以授其徒云、二十七年庚子司天龍席、俄娶風痺退靖栗棘菴、又起升南禪未幾謝事構不二菴、於慧日山側以居焉、三十一年甲辰二月三日、舊病頻發庵爾即世年六十二、天性充實好欽聞思識量廣、深文藻特麗多鈔經錄、貽惠後學別所著有琴川錄、不遺藁行于叢社云、書目有岐陽禪師語錄、不遺稿日自曆譜、

僧得嚴

號惟肖備州人、年十六上京師從芳草堂、髮深禫具參詳歲久有所、私淑性氣睿敏絳史子集、無不探抉以文馳名、幕府義持招居於相國盛待顧遇世、以為榮歷住於撰之棲賢洛之、眞如萬壽天龍後陞南禪為人、示日如人上山各自努力上天堂何言哉、四時行焉地何言哉、萬物生焉巖後構雙柱院、於龍山謝事燕居、故世稱雙桂和尚、義學之徒未扣門者衆多、永享六年竹居建石屋塔銘惟肖撰其文也、又好莊子始講虛齊口義作鈔十卷、蓋以其中多用禪語、而世人難曉也、

所著有語錄外文若干卷日東海瓊華集、

僧正猷

正猷字竹居、自號化化禪姓藤薩州伊集院人、邑主長氏男也、以至德元年甲子生、父母婦佛以善人稱、有男二人、父欲僧弟乃投石屋於郡之妙圓寺、及其將削叫而去猷、乃跪日願吾代之屋特嘆異遂剪

歛髮、而親炙久矣、一日觀屋打僧令速道茫然、無對忽有了悟屋日、

汝徹矣時年尚壯、乃自謂曰我宗無闕字訓、然不有學而涉内外、則

於化門有所闕焉、乃負笈京師依雙桂於南禪三年焉、雙桂重待誨獎

界之住日竹居云、遊至相遠龜谷益進慧解帰省、石屋分座化衆、應永元年屋童福昌使猷居妙圓寺、又童直林又遷福昌雲水津瀝、又歷任能之總持、冊之永澤、越之龍泉、大內弘忠招猷居于長之大寧、未滿一紀凡百整理、又開二十年癸巳吉田若州清正立了心松仙賢忠

德住於薩隅、龍文於防皆爲第一祖所在、安衆盛喝祖道大內殺弘、

亦聘復大寧管領土上杉憲實、致職祝髮号長棟、游歷至長謁猷大寧構軒檻留親承道話、寛正二年辛巳十月二十一日、猷告衆日、卻後五日吾當取滅於是縉素省間日、夜相繼殺弘時隔兩日程開其急、乃來而問猷猷對讀如平日、殺弘退問長棟於檻畠軒相共談話侍者、俄報日和尚逝矣、有辭偈曰、混沌破了八十二年、蚊蚋肩上好打猷鞭スル、實本月二十五日也、門人界棺荼毘殺弘長棟俱衆送葬焉、遠近傳訃無不舉哀矣、

僧爲璠

爲璠字器之別称、天遊俗姓藤氏、薩氏、薩州鷗島人本薩作

永十一年生受業於里之小院澈至、長州參竹居禪師觸事、開悟竹居傳之林拂、既而依惟肖於雙桂請益愈深、雙桂字之曰器之云、復適越州從居於龍泉、刺吏陶盛政創龍門寺、聘璿在山璿滅請璠開堂、

改門易文與馬壠門、肥州

天泰居

·對州

伊香賀氏

·泉州

有馬氏

等、太守

就求法益禪道不一振衆議、欲推璠爲中興祖、璠乃奉竹居爲開山祖、

永享六年

甲寅

三月、撰石屋行實大內氏聘董大寧、寃永四年遷丹之

永澤會下靈納七百餘員、明年還龍文寺構視雲亭備禪燕處、應仁二年五月示疾命上足大菴令補、其席二十四日委順、而化塔于視雲亭側年六十五矣、了菴柱性操器之禪師塔銘

見子引書

僧須益

字大菴依璠證悟歷補長之大寧防之龍文能之總持、

桂菴

授引書目 島陰漁唱集

桂菴

桂悟

僧景徐或作景召傳開誤也、於桂菴為故友或為宋友、

名周麟別別號宜竹嗣法萬年、材用堂多識屬文、凡位相國前後四度

董南禪寺常投閑、於萬年之宜竹斬年起古稀、終於斬中外集若干卷、

日翰林葫蘆集

亦出授

目、景三ノ師力、

僧一慶

文龜元年即位、後柏原帝追廢賜謚佛慧圓、應禪師心宗洞達外學、兼全每渚闕丁朝講經夕留詩為王臣所崇重、

巢松親族十八年

桂菴

桂悟

一慶字雲章京人、姓藤氏家世冠彝左丞相經嗣之子、至德三年丙寅夏生于桃華坊弟、自幼逸群不負禁祿、明德二年辛未慶年六歲、投童役於山崎成恩寺、應永八年辛巳年十六、落草裏隸名東福、九年明生遺僧天寧大倫上竺二菴來朝、于京慶乃造謁倫見器重乃賦與之、

十二年前發出家、因緣傳得祖袈裟黃梅、夜半曾分付把住無容失

左車、

桂菴

桂悟

惟肖

蘭坡

雲樵

巢松

月麟

宣竹

惟肖

景藍

雪樵

景藍

宣竹

巢松

而往城北聖壽寺、參岐陽秀公朝昏辛勤綜究内外、迨陽領東福充典

輪藏分位後堂秉拂說法常與、岐陽評論頴嚴至其羅紋結角之處、陽

低掌而賞後小松上皇、賜慶手詔入講元亨訖書、嘉吉元年遷董東福、
寶德元年夏太上皇寫御照容敕慶作贊上皇、亦製和歌御書其尾世以
爲榮、是年冬詔陞南禪居之、三月俟老於慧口之、宝諸律身甚嚴
臍不沾席者、十七年嘗慨正宗日、就隱微而流弊滋盛居恒與衆講百
丈清規、因會諸家說撰清規要綱、又作五燈一覽圖、以備後學之檢
尋也、每喜誦程朱說著理氣性情圖、及一性五性例儒圖、寃正四年
正月二十三日、坐化年七十八敕謚弘宗禪師、

景三号橫川、俗姓不傳京兆人以永享元年生、年甫四歲授英叟執童
役、及年十三依龍淵於安國、性敏好學蚤尋文墨隸名萬年、長謁名
宿皆承許可、文明辛丑義政聘出世洛等、持尋住相國亡何謝事休居
小補在萬山十七年乙巳再住相國、長享元年遷南禪寺、源相贈金襴伽
梨、明應二年十一月十七日、寂年六十五所著有東遊集·潤門集·
京華集十卷見聞書

龍惺号瑞巖一字仲建自号蟬菴、泉州石津人、姓源父因幡寺号南樵
母鞍智氏、以至德甲子生十一從一菴巖、於東山爲弥弥操持凜然肄
業純如深探經史百家之書、文安丙寅住建仁、寶德庚午董南禪、長
祿四年閏九月五日、坐晚年七十七有二會語錄乃外集、

泉涌寺

文德帝壽衡三年、左大臣繕嗣建立、建保六年大和守中原信房延

俊芻爲住持云云、

釋俊芻字不可棄、肥後飽田郡人、生數日棄樹下經三日、無恙始往

抱歸付母故字日不可棄、性以不凡、四歲投外舅池邊寺、七歲能讀佛書、

九歲讀大般若經、十歲讀法華經六日而終焉、十四年顯蜜蜜音十八落
髮、十九受具足戒、建久十年乘商船入宋寧宗皇帝慶元五年、登天台山又受禪

要於徑山寺、翌年依了宏律師習律三年也、到秀州究天台奧旨八年
也、嘉定四年帰朝建歷四年、於肥後筒嶽創寺號正法寺、俊芻所將來書

凡一千百三卷宗律經書三百二十七卷、七百六十卷、儒書二百五十六卷、天台
章疏華嚴經百七十五卷、雜書四百六十二卷、

榮西禪師往博多、招入建仁寺大和寺信房、以仙遊寺與芻居住建保六年

清水涌出故改泉涌當寺稍零落、貞應三年七月勅爲官寺、平泰時
同家連等招入、相州二位尼諱如受戒法、嘉祐元年建泉涌寺講堂、
啓講席台律二宗以之爲中興、後烏羽、順德二帝受戒、嘉祐三年閏
三月八日、逝年六十三、

高僧傳五十八載之

一、按南浦文集跋文之爲桂菴四世孫、又爲東福龍吟庵之門徒、蓋

雲夢和和若一柏上人之學、出於龍吟庵、書俟再考、

僧郁芳山川人正竪
寺有傳、

重禪老

僧文傍安養院、

僧覺阿

僧仲舒

僧祐田村田氏
有傳、

僧文之

名玄昌、号雲興軒又號南浦、日州外浦人、父河内產來寓日

州娶士人女、弘治元年丙辰生、文之於南鄉外浦、永祿四年文之年

六、父投文之於延命寺、天澤身還河內、天澤教育文之、稍奇其顏

異、十一年遂使文之學一翁於童源寺、時年十三、一翁乃桂菴弟子

月渚之高弟也、詳見後系、

僧仲章桂樹二世
有傳、

僧大年筑前
人、

加小童

僧惺肥州人
有傳、

僧以安

松老人有

傳、

僧英龍伊集
院人、

和上人

長尾某越後人
有傳、

益公繙郎

傳、

僧忠眞新納氏
有傳、

智昭小童

桐公繙郎

傳、

充新戒

僧自擇

青蒲子

僧雲夢薩州伊
集院人俗姓伊集院氏、

白源東谷至自擇自有餘人、恭皆及門請益、於桂菴者故載于此、
而其有弟子者特叙上系如在、

僧雲夢名崇藻薩州伊
集院人俗姓伊集院氏、

大隅守熙久第四子、領隅州安國寺、長享二年加京師、道訪桂菴於
日州安國寺、頗請益焉、之文所謂前建長雲夢大和尚此也、

〔頭書〕

〔石屋·正猷·守邦·良信·守琮·良純·宗津·智濟〕

僧天澤名崇春又
改不闕日

州飫肥人、永正六年己巳生師事雲夢、大永七年遊於足利學居之五
六年、又遊越前、請益于一柘上人、勤勵十餘年、弘治二年皈領西
光寺、後構著室於日井延命寺以卜筮爲業、永祿十二年、化年六十

〔頭書〕

「梅巌君自少好儒、常讀論語云、恭桂菴弟子也」。

日新君

僧舜有 号三枝師事耕翁、享祿四年十二月、從師耕翁徙谷山皇德寺、

天文二年巢松軒以安爲三枝頌、其註所謂皇德寺耕翁弟子舜有之記

云是也、三年十月及師耕避亂於伊集院隱谷口村五ヶ年三月、梅岳

君取伊集院見舜田、舜田有於谷口村師之參學、遂嗣法於舜有寵遇

最篤、乃就其居更創一刹、環以一里餘号曰福壽山、取君法号勺

梅岳寺置之肖像、使舜有爲開山而賜田五町、及君所乘馬具等、且

秋月所寫耕翁真、花鳥金屏風等、亦付屬焉、永祿二年正月中山王

尚元使天界寺、登叔名城、良仲

恭命舜有為報贊五年二月、

公子尚久卒葬保泉寺、公子之幼也學於舜有、幼字曼秀大因請、舜

有法諡一枝靈秀、其子忠長創安住寺於鹿籠爲菩提所、舜有爲其開

山、六年十一月、寬庭夫人卒建廟於梅岳寺、十二月十七日、舜有

以其道悉授舜芳、七年甲子二月二十六日化、法號當山開山三枝舜

有大和尚禪師、後寬文十年、寬陽公時、徵秋月所畫・舜田像及金

屏風以藏官庫、更命画師別寫其像還賜之寺、泰清公亦賜宅金屏風

以易之云

○僧俊安領伊作海藏院世住職、明應七年
領田布施常珠寺、天文二年
日新君年四十二、參學俊安、

僧祐田見于後系、
一日授授、日新若化、九年也、

僧代賢 名守仲蘆州人、俗姓中侯
氏、永正十二年乙亥四月八日生、

永祿四年十一月七日補福昌寺喜

冠龍慶和尚法嗣云、天正十二年

大中公

辭世

不來不去 四大不空 本是法界

我身如同

在川邊玉泉寺

儒門君子翁、枳部寂空々、

明達玄通イ、理三教成一同、

梅岳常泊在家菩薩、真贊

奉依辭世之高韻者也、

福昌比丘勅賜溥光、普照禪師書之、

島津尚久見舜有下、

伊集院孤舟 名忠朗、稱大和守事、日新君・大中公為國相學岳
學於舜及祐田等、永祿十二年己巳十一月、祐田創笑岳寺於鹿兒
島時、蓋招為開山、而梅岳寺由緒記、以存撮為開山、按存撮為
寬水中人追考誤也、弧舟卒無年月、法諡笑岳道觀居士、又安華
岳妙春大師主蓋弧舟妻、

僧祐田見于後系、

僧代賢 名守仲蘆州人、俗姓中侯
氏、永正十二年乙亥四月八日生、

甲申二月十五日化于福昌寺、年

七十才、門徒甚盛不可指計、

僧天海

名在隆

僧永德

名在隆

僧舜芳

名在隆

林廓

良銀

香撮

兼良

芳有軒

寓永十一年領笑

肥後人姓相良氏、玖麻侯近江守長每之女嫁薩摩守忠興、而以山野爲陽沐邑、租入一千石後寡居山野創寺號芳宥軒、亦請舜有爲開山云、忠興乃寬庭夫人兄也、據採芳字疑舜芳弟子、

僧月渚 名玄得又名玄乘、号宿芦齋、薩州牛山人、自少出家遊於

肥後桐瀨萬清源寺、師一枝學筆硯一枝既歿、留五六年、明應六年九月、先是桐瀨僧雪溪寓於鹿府、受學桂菴至是菊府、使月渚飯迎雪溪晴月渚介雪溪、始見桂菴遂入其門以高弟稱迨、島津忠朝襲封飼肥福島領、渡唐船事、特尊儒僧乃月渚爲龍源寺、後幕府釣祐補建仁寺、又轉安國寺教受徒弟、大永三年特國仰使於明國、時大內義興使宗設入明、蓋月渚駕宗設船宗設殺寧彼府吏、於是月渚在明僅一句、忽解纜還徒衆益盛居安國者二十年、天文十年辛丑二月九日、示滅於飼肥南鄉西光寺、文之詩云、古籍百卷今猶存、

僧一翁 俗姓鹿屋氏、薩州大迫人、永正四年丁卯生、或號一洲受

學月渚、領日州安國寺中住師國如後居建仁、永錄三年明國福建道連江縣黃友賢爲賊、被捕來薩川內、精於周易一翁一日與之傾、益論談經義和漢異俗互多所益遂爲已交云、十年一翁老於龍源寺、

天正九年二月、又使文之監龍源寺、文錄元年十二月二十八日遷化、年八十六、

僧之文 和仁氏、名玄昌、号雲興軒齋、名時習又別有南浦或瀨

雲或往雲等有號、俗姓無考父河内人、米寓日州娶土人女、弘治元年丙辰生文之有於南鄉外浦、因號南海、永祿四年文之年六、父乃使文之託天澤、於日井延命寺上、而父飯河内無復顧之、十

一年天澤奇其穎異、又使文之學一翁於龍源寺、時年十三、天正九年二月一翁使文之領龍源寺白老焉、時日州既屬於薩藩、貫明公、聞其有材學、召爲隅州正興安國兩主席、恒備顧問寵問寵待日州、十四年及鎌田政廣使于京師、慶長四年從 松齡公上伏見邸、二月先是和點周易大全至是功成、乃爲跋文、文之在洛日講大學於東福寺多聚、聽者九年二月侍讀 慈眼公於府城、十六年創大竈寺使文之爲開山、由是府下翕然受業者多、元和六年庚申九月晦日化年、六十五葬於城安國寺、法号文之和尚禪師、

△五月反隅州、

八年八月先是備前黃門秀家未奔本藩至、是公使桂中 詮護送、

秀家如駿府、時文之亦副之、六日發牛根二十七日至伏見、

◎黃友賢 其先出自、顥頷々々玄孫、陸終之後封於黃州因以爲氏、

永祿三年二十三爲賊捕渡薩川內寓入耒院、精周易興一翁善往
未論遁、松齡公舉之民間、使講道義、故徒居於帖佐、加治木、
嘉慶十七年

年戊戌生

天正十年十二月公成八代時、召使卜筮從軍朝鮮、慶長元年明遊

擊、沈惟敬使於日本時友賢從、公在伏見、惟敬見友賢甚敬重

之、乃太閤命公將舉用友賢辭曰、明人恥事二君以告太閤、亦

聽又神祖臨邸侍鑿板坂朴齋等從、及諸縉紳開勝、

○四年在國 公將誅幸侃乃使帖佐彥佐工門筮其、吉日、

○七年 公築今城命友賢縫營之、

十二年冬、公自帖佐、加治木亦命友賢、經營之身亦從焉、十三

年正月一日獻中紙、束賀新正也、

聖護院主謁精雲精舍、賦侍會各爲詩歌、友賢興之、時京師學

易若詩者多、師友賢名聞於朝、勅賜筆木親王道澄、亦賜號環溪先

生、公賜之櫛三百石列於土、班初家在明江夏郡因以江夏爲氏、

十五年庚戌七月二十三日卒於村城、年七十三、

稱筑前守

江夏二閑

寔永九年、加治木櫛三百二十二石、

愛甲喜春

二男力

小内記給事、公子忠朗食百三十二石、

◎郭國安 名光禹、亦明人其先周王季之後、封汾陽王孫因爲邑人

国安、永祿二年二十三、來薩京泊事、聞貫明公云召爲士、

故遂帰化号汾陽理心、文祿元年 松齡公師于朝鮮、理心及大慈寺童雲從領書牘事、食祿五百石、寔永十六年己卯四月九日歿於

龜島、葬興國寺、法号仁濟義安庵主、時其臣橫山豐前嘗荷思

乃自殺殉焉、

◎門司光空 字安意、号謙柔齋、豐前小倉人、姓藤氏父名淳造橘亦

六、永祿三年戰沒、光空事大内氏於周防山口時、大内氏霸乎、

中國掌明勘合印、文学因異、他州如土佐南村梅軒者、亦防州產、

而其遺老云、光空後塗仕、

松齡公食祿三百石、

公乃爲慈眼

公伴讀恒事左右、文祿三年從

朝鮮其在軍也、勸公多購書

籍、時侍講之伊勢貞昌等、亦學焉、

僧郁芳 名春、薩州山川人、蓋生於寔正元年、夙爲浮屠雲遊諸州

既皈、又師桂菴内外研究、永正元年領山川正竜寺、山川有港曰

本極南、而接西土海船善來、故初

恕翁公創此一刹、世撰有学

識者爲之、住僧以備簡牘、郁芳亦當其任云、由緒記以郁芳爲二

世主追書誤也、

僧文岳 名利貢、号宗鷲薩州人、俗姓兒玉氏、生於天文二十四年、

師事問得富内外學好善詩、又通韻鏡代問得領正竜寺、元和四年

十一月、慈眼公如山川臨正竜寺、偶開勝會從臣各吟詠文岳、亦

為七絕二章應命也、七年四月使於琉球、時年六十七、既而帰寺

以九月四日、化而失其年云、

◎僧九峯 名成領慶雲寺、俗姓大江氏、自儒入佛、

僧東明 名昇、爲龍野長老、

僧月溪 名崇鏡、受學都芳代、領山川正龍寺、大永三年僧鑑岡云、使於明也候風、山川時与月溪宇都芳、死後師友巢松老人常爲唱和、永祿七年六月八日、代賢至正竜寺、明日宗鏡爲詩代賢和之、

僧問得 代月溪領正竜寺、蓋其弟子也、天正二十年、太閤使細川幽斎玄旨來迎三州減省寺社田、十二月至山川其爲港也、逼接西

土而海舶善至焉、幽聞而日、古人置寺赦開儒學亦其宜乎、寺田不可減也、愈勸學以通簡牘、乃十九日与問得書告之、於是寺田五町四段、如故乃 茶室特饗幽拜恩云、

僧梅屋 名宗香、愛學文岳代文岳、領正龍寺、寛永十二年乙亥十月二十八日化、

僧壽岳 名椿代梅屋、領正竜寺、乃其弟子也、承應壬辰十二月十一日化、

僧別宗 名傳受學壽岳、領正竜寺、明暦二年、寛陽公如山川浴溫泉、時臨正竜寺、賜別宗詩別宗乃和尊韻獻之、十月二十四日化、

○藤惺窩 名舜又名肅、字斂夫、

姓藤原、播州細河人、參議侍從冷泉爲純第三子、永祿四年辛酉

吟取銀灣萬丈流、裁成詩句洗窮愁、武門今若論材器、濟世稱

於細河七年廿八歲、乃東明長老誦心經法華等、稅髮爲僧名舜首坐以神童聞、後遊洛陽領妙壽院、既而帰播赤松廣通善遇之、從又遊洛、文祿元年如名護屋、始謁 神祖、七月太閤遣細川幽斎使於薩州、是年惺窩之崇後遊觀西海、二年如江戸秋帆洛讀性理書悼世無善師忽欲入明、親受朱學直到筑陽、浮舟揚帆洋遭暴風到鬼界島、其泊島也、作詞若歌云、

薩摩かた、八重のしほ風告やらん、あはれうき身は、親たにもなし、

三人此地語生涯、二士賜環一士嗟若是、

浮遊天外去波間、鬼界即神楂、

觀此即今硫黃島也、其帰也着船、山川見問得於正竜寺、而聞其授四書新註倭訓、於弟子等絕歎伏曰、我將入明亦惟無他求之而已、乃寓而讀之、請悉写其所藏、新註和點等問得許之、實是桂菴至文之所改正本也、其正竜寺也、亦有詩云、

僧龍蟠處鎖巖窟、吟向東風地亦、靈雲外欲昏鐘色、濕小樓春雨碧溟溟、
杏壇春暮事吟遊、今日閔西有孔丘、傾蓋論交非邂逅、三生石上舊風流、

君傳說舟、

既而惺窩悉寫取、倭默本悅謝帰洛、以教其徒、慶長二年朝鮮姜元末寓、赤松氏乃見惺窩大稱其材、於是惺窩竊勸通使姜元等、淨寫四書五經、白注倭點請姜元、跋以證之而深秘其得諸山川、故世人不知之、咸以爲惺窩一人功矣、由是名声大振三年遂逃积氏、立儒一家廣通、乃使男女侍奉之、四年石田三成召惺窩、惺窩欲往而不果、五年三成敗死廣通亦自殺、是年林羅山始讀四書倭點本甚感、惺窩九年秋遂入其門、自是徒衆愈盛、元和五年己未九月十二日卒、五十九、葬于相國寺、

僧祐田 名泰年、號自耕、薩州人、俗姓村田氏、乃舜田弟也、

類姓山城守兼心建淨法寺於類姓、招祐田爲主僧、天文六年轉證

恩寺、永祿七年領梅岳寺、後開龍泉庵老焉、

僧玄章 代桂菴領桂樹院、永正十七年六月、大翁公之任官也、玄章使於京師、十五日宣旨公任陸奥守、玄章乃受口宣歸以致之云、

僧代賢 見上、
僧俊

僧興焉 受學玄章、天文中一瓢君新宝集菴安興岳公主時、招興焉

爲開山、因改興焉寺、今伊作田尻村興焉寺此也、

僧圓

僧玄松

袈裟

僧以安 名光建、洛陽人、生長祿二年戊寅、少桂菴三十二年、号巢松軒爲人穎敏、自少好學師南禪寺蘭坡、內外精勵性耽詠吟、文明七年幕府、義尚使以安使周防時見桂菴、明應五年使於高麗見王獻詩、六年帰朝復居惠山爲衆康拂、九年以慕桂菴爲人欲往從之、九月發興州、文龜元年十一月來訪、桂菴於島陰親受其學、二年秋福昌寺割地於寺外結之草菴、使以安居焉、府下多學之者、圓室公、蘭窓公、興岳公、大翁公皆加恩遇數陪宴爲詩、公族大臣高僧名士常爲唱和、去留如雲惟詩是樂、天文八年爲

詩頌 大中公之德云、

慈眼公

伊勢貞昌 稱兵部少輔、本姓有川氏出、嗣伊勢貞興後、因易伊勢氏、以元龜元年庚午生、少文之十四年、自少顯武功、天正十八年從一唯公師于相州時、撰十六騎貞昌與焉、文祿元年從軍朝鮮、二年公薨、十月奉喪歸時十一、慈眼公尚以公弟質於京師、貢明公使貞昌如京立、慈眼公爲世子、乃又從赴朝鮮間歲、松齡公厚聘召門司、謙柔使傳世子以授儒學、恭貞昌亦從俱學之、慶長中、世子又學於文之、亦与講究之官、至國相治亂竭忠數獻嘉謀多訴匡弼、寛永元年、公以夫人如江戶、貞昌亦以妻從任諸大夫、幕府數命公將擎貞昌用之朝、貞昌不敢聽命耻事二君也、

自是幕府賜年俸五百苞使以時與朝議、貞昌在江戶也、与林羅山

聞書集傳

善恒爲書問、

公薨

寃陽公立勸以儒學曰、

先君世尊聖教徒

口新公至 先公、莫世不以儒治國也、願 公亦其學之 公從

其諫、恩遇時篤數益俸祿、不悉受之以 良聞、寃永十八年四月

三日卒、年七十二、葬一本棲廣岳院、法名舜翁豪英大居士、

幕府聞訃使阿部尊後守、賜香資吊之、

川上久國 称因幡守、初名文好、天正九年辛巳生、少學於文之從

公師于朝鮮、寃永七年五月拜國老、時年五十、慶安二年告老、

號商山、又師重位受示現流、

赤松貞則 本鄉左太夫義則申也、

寃文三年四月十七日卒、年八十三、其葬之也、家臣藤井四郎兵

衛以身殉焉、

仁禮頼景 称藏人、幼字小吉、本姓別府氏、隼人頼延男生於天正

八年庚辰、少文之二十四年、夙事 慈眼公侍 公勤學、亦受文

之治亂致忠旁好賦詩、官至使役、遷地頭高岡卷五
莊鎮邊疆、正保三

年上邸江戸、正月十三日卒、年六十七、

三原重饒 称左工門尉、後名重庸、自使役至國老建言興富國道、

今所謂御勝手方也、其幼也受學於文之、性敏賦詩嘗見松平信綱
於櫻田邸壁間有字、信綱問之於伊勢貞昌、貞昌召重饒使讀之重
饒、乃讀逐一講之、信綱感焉、寃永十五年島原之役、大家使

信綱往以諸侯師討妖賊時、 慈眼公遣重饒將衆往勞、信綱且助

討之、於是信綱會諸侯師於島原、乃使重饒詢令衆軍、重庸起讀

令書始終如流無過一字、衆皆感之、既又信綱命衆軍曰、陣中告

事者皆其因重庸、由是振名天下、十八年幕府命林道春等徵列候

譜、以脩撰之時、 寥陽公命重庸等、博集古書、新撰系譜、所

謂上り御系圖此云承應一年癸巳、七月十六日卒、葬福昌寺、法名桂山獄宗昌居士

頬娃久政 称左馬助、本姓鎌田乃出雲守政近子、出嗣頬娃久秀、

後天正十二年甲申生、少文之二十八年受學文之官至相國、慶安
二年三月十三日卒、年六十六、

敷根立頼 称中務少輔、本姓島津氏圖書忠長第三子、生於天正十
三年乙酉、慶長四年出嗣敷根頼元、後食邑田上、又徙高隈後封

市成、受學文之、少文之二十九年、爲人重厚胸次和暢未三十、
既如老成恒好鼓瑟、寃永四年四月十日卒、四十三、

仁禮頼充 称主計或名頼安、乃頼景男、生於慶長九年甲辰、少文

之四十九年、爲人穎利自幼師文之學程朱註、夙夜繢空仕至使役、

寃永十八年預參撰譜事、二十年癸未五月晦日、先父卒年四十、
上原尚演

藤崎公綱 慶長十五年或十
六年、人文之之門受業勵學仕爲右筆、寃永

十八年命撰公譜時有日、藤崎六郎左工門者、以右筆與之、十九
年 公使敷根中書使於 兩 公綱爲之副云、

忠俊

僧信 豊前人遊歷諸州飽參宿納、西來薩府就文之、受程朱學業成
皈國文之爲序、

鎮幸

野村眞綱 称右工門佐、父日大學元綱・眞綱受學文之、寛永十八
年與撰公譜、拜奏者番・町奉行等、

伊地知安心 名重商、称喜兵衛、以慶長二年生、少文之四十二年、
受業文之學程朱說、又善書如伊勢貞昌、亦學其法云、仕至右筆

兼業醫、

平田純正 称清右工門、蓋亦學於文之、自納殿役爲高奉行、寛永十
八年、公呈譜謀使純正齋如江戸、而又命編撰公譜成三百冊、
明暦三年正月十五日、公賜祿百石賞其功也、寛文二年壬寅十
月十七日卒、

中江員清 小字與助、称主水周琳嫡子、

大迫尚純 称平左衛門、又改内藏允、後称壱岐守、本姓梶原氏、
中昌大迫終号左近充氏、自少師文之學朱子註、又好賦詩、寛永
十八年撰公譜時尚純與焉、

河野道純 名通宜、稱文左衛門、更純好程朱學、受業於文之事、
慈眼公數倍宴爲詩後伴讀、寛陽公家世傳業、

寛陽公

有馬純廣 称勘左衛門、疑文之弟子、寛永十八年與撰公譜、

僧學之 名玄碩、日州都之城人、俗姓中島氏、生於天正七年己卯、
少文之、受業文之、亦有材學、元和六年代文之、爲大竜寺主席

居之二十八年、寛永六年四月八日、補隅州正興寺住職、二十二
日又補建長寺、皆拜公怙也、十八年大府徵公室譜系、乃 寛陽

公命學之等脩撰之、正保四年丁亥六月二十六日化洛陽、年六十一
九、葬建仁寺、墓在國分正興寺、

僧泰岳 受學文之領都城常徳寺、慶長十四年春、文之贈詩兼問二
嚴寺、疾見南浦文集、

河野通顥 称長右衛、幼承家学仕爲御文書奉行、

河野通古 初名通統、称六兵衛、爲叔父通豐後亦承家学、寛文十
年耀爲大史、及大田小平次久知撰家譜、後又通古著大概記、皆
命也、貞享四年七月四日卒、

河野通朗 称郷左衛門、承父祖学夙爲筆吏出入史館、元禄十四年
十一月二十七日、充史習学、十七年三月從 公如江戸、七月二
十九日卒、所著有源氏歴代歌等、

僧一溪 名守榮、受業學之、代爲大竜寺、慶安三年閏十月五日、
公文以守榮爲正興寺、萬治元年戊戌八月十四日化、一溪善詩門
人多、

僧日東 受學一溪領大竜寺、延宝七年十二月三日化、

浦川某

曾山如心

僧不門 名慈宣、師備前岡山松琴寺、無柳參和尚受其學、而非文

之流然從弟、貞享丙寅秋盛于有下爲大童中興、住大童寺、

元禄三年六月、爲文之行、七年七月十九日化、

新納久詮 称右工門祐、初名久賢、老号遊山、父縫殿助久時、生

於文祿元年壬辰、自少師文之受宋儒學屬詩爲歌、又善射騎、寃

永元年爲京大坂知邸、十年領御支配小割奉行、十四年拜御使役、

十五年五月、寃陽公見 幕府拜襲封恩、時久詮亦以使役從取

謁、十六年 公就國命久詮爲御留守居、二十年夏轉國老、寃文

四年九月致國老、削髮号遊山、其在京也參禪大德寺玉室、遂得

其宗、延寶三年正月六日卒、年八十四、法號一朝道久居士、

兵學相品新納久了 初名久仁、称又左衛門、幼字弥七郎、元和五年己未生、

夙承家學精性理說、又好詩善書、騎馬師川上芳安、悉受馬術或

師小幡景憲學軍法、後師友其高弟杉山公憲、遂得其宗薩藩甲州

兵字于久了始也、寃文三年四月拜國老、元祿八年致仕在職三十

三年、四月三日卒、年七十七、

肝付久兼 称王殿、老号活堂、受軍學於久了至國老、

伊東一空

平田可竹 名宗弘、称民部左衛門、受軍學於久了、

伊東一空 名祐種、称十郎右工門、學兵法於久了、後從活堂悉受

其奧、享保十八年七月七日卒、年六十六、葬不斷光院、法名一

空活眼居士、

新納忠村 称四郎右衛門、

河野通古 見前、

北郷忠昭 称宗次郎、

伊地智重英 称助右工門、

伊地知重記 称權左衛門、

マダ僧達 薩州熊嶽主僧、慶長十二年、師文之學論語、於時習齋秋業

成、而帰寺、爲人質直好學恬澹、寡言見文之詩序、

僧榮信

二人関西人、元和二年二月、雲遊至薩受業文之、

僧信

島津久通 稱圖書頭、初名久慶、幼字又七郎下野守、久元之子、

生於慶長九年甲辰、少文之四十九年、受宋儒學於文之、寃永四

年九月從 慈眼公如江戸、十九年十二月補旅家老、正保二年三

月爲家老、寃文十二年致職其在江戸往来、羅山父子得學益焉、

領金山事、言漉紙裁杉等事、皆自久通始云、且精譜牒學總裁

史館事、奉 泰廟諭編修征韓錄、又著島津世錄記等、自少以夙

成名也、称懿圖書此也、延寶二年十二月晦日卒、年七十一、

法号湛水院 德源通智大居士、林春齋信篤撰之碑云、

島津久竹 初名久胤、称出雲守後改圖書、乃久通嫡子、生寛永十

二年乙亥自少承家學師、又愛甲喜春或出入林長齋春、掌程朱學

始爲詩、寛文十二年九月、補國老總裁史館事如久通、時元祿六年一月十六日卒、年五十九、

寛陽公

諱訪兼利 初名兼清、称李左工門、生於慶長十九年甲寅、寛永

元年爲奧御小姓、仕 慈眼公左右十四年、代父領小林地頭、

十六年轉物奉行、二十年遷吟味役、正保元年陞御使役、慶安

元年正月從寛廟加江戸爲 恭廟御守役、初兼利受學如竹究理、

又爲時自傳 世子勸俱學倭歌、從岡村宗好受其法、又就鈴木

正三參禪究學以轉 世子、明暦四年致御守役、寛文二年十二

月補旅家老、三年以疾致職、六年十月公聞其伏見使復興政事、

七年二月十六日、至國老授谷山地頭、時年五十八、十一年復

疾致職、延寶七年告老号荒田翁、貞享四年六月十日卒、年七

十四、

恭清公

僧之間薩州福昌寺僧、

隆少年

島津忠廉薩州氏二世、

僧胡月俗姓島津氏廣濟寺、

僧示壽甲木野冠岳寺、

鳥取政秀 国老、

以文禪伯

嶋津国久

野邊克盛 日州山東人、

伊知地重貞全、

島津篤久

僧守珍 福昌寺、

學遠典藏

禧藏王

僧玉林

即繩郎

睡公禪老

而寧宗嘉定四年、國子司業劉爚奏刊之太学、由是四書之傳大行于世、

是與其所集註論語・孟子 併稱四書、爲後學取宗尊焉、則是我朝順德帝、建暦元年辛未之歲、先是建久十年宗寧(寧)宗、慶肥後飽

田郡人爲僧日、字我禪後有三十七、而由乘商船入定鑒、

是與其所集註論語・孟子併稱四書、而寧宗嘉定四年、國子司業劉爚奏刊之太学、由是爲後學取宗尊焉、則是我朝順德帝、建暦元年辛未之歲也、先是建久十年宗寧(寧)宗、慶肥後飽

二年、伊勢度會人名八、家行者撰類聚神祇本源、既引通書、乃周

子所著也、又當此時垂水廣信、亦伊勢人始讀朱書、而世不行、

先招叢談二云、二山伯養嗜儒釋業隱于駒籠、時有失明人、佐々木玄信者^{上云}善記諸氏譜、至莫傳可詳奉合附會、以欺世一日過伯養、

伯養荊妻垂水氏傳言、其先仕伊勢國司名字失傳、玄信曰此垂水廣信也、廣信稱河内守、伊勢垂水、

宗四郎、称主右工門、生於元祿元年夙承家学、及長負笈遊學、

東武受業鳩巢、享保二十年七月四日、爲大史肄業、元文三年十月十三日至大史、十二月改称主右工門、寔保元年十月二十三日歿于江戸、年四十四、河口齋爲之傳云、

○郡山員雄 字原與称嘉石工門、生於元祿七年甲戌受學鳩巢、宝曆十三年五月二十七日卒、年七拾歲、門人山田月洲爲之墓誌、

○郡山遂志 初名員中、称次郎左衛門、受業員雄精雄理学、宝曆九年正月擢史館肄業、十二年四月十五日爲副史、明和六年十一月朔日遷大史、安永三年四月三日、拜行人行史館事如故、八年出爲島宰、天明元年六月復太史事、八月二十一日卒、其居職也、

奉諭著島津世家、

○山田月洲 名有雄、一名君豹、字文蔚、称喜三右工門、好程朱學受業於岡南員雄、後如江戸師河口、伊東二先生、學業愈進、善爲誌文最長七律、寔延二年八月十六日、爲史官肄業、四年六月

七日轉副史、宝曆十三年正月十一日至大史、先是侍讀榮翁公恩遇特篤、生於正徳五年乙未、明和五年戊子九月二十三日卒、年五十四、門人山本正誼墓誌、

○郡山蘭 名國華、字元實、称權藏、生於享保九年甲辰、自少好學受業於女兒夫児玉岡南、後如江戸入河口・伊東二先生之門、自唐学方累進、爲行人伴讀溪山公至御側役、寔政二年四月二十九日卒、年六十七、赤崎権爲之墓志、

○郡山員良 称主右工門、宝曆十四年史館、生員明和八年爲副史、安永三年正月至大史、八年十月歿于江戸、

○稻生若水

○溪山公

榮翁公 津島如蘭恒之進、戸田斉官、大坂人、

松岡玄達 山田某、四郎左工門、

志賀登龍 名親^{初名}賢、小字豈八、称武兵衛、日州高岡人、父四郎右工門親宗世爲邑士、天和三年癸亥生、自少好學又好善書、

元祿十三年、年十八負笈遊於麌府攻之勤勵、又師梅田治繁修鍊槍既而適京師學於松岡惣庵^{玄達}受業者、十三年十一年丁壬、而如江戸入鳩巢室氏之門居之、三年道學大進、而飯糸府門人、愈多命列府士特許中通、寶曆四年甲戌十一月十九日卒、年七十二、法號精義齋文興弘毅居士、門人山本正誼爲之行狀記、諸石燈^燭以

建其墓側時正誼、年二十一歲、

愛甲季平 称仲兵衛、

○山田明遠 一名有儀、幼字彥八、称司後称伯耆、乃月洲適子、元

文二年丁巳生夙承家學、又好書畫、明和二年自唐學方、爲御側御小姓行行史學事、六年爲御小納戶、後歷御近習役、御側御用人、御勘定奉行・寺社奉行・陞大目附、寛政七年八月二十八日、至御家老、享和二年十二月二十七日卒、年六十六、

上野成章 称善兵衛、

上野 称善兵衛、仕至大目附、

追田利貞 称甚之丞見下、

帖佐來章

日置兼篤 名恭、字德基、称五郎太、自少有異才、受學於遼志、

成章尤精經典、與帖佐來章友善行尚謹嚴、

○^{開祖}山本正誼 字子和、俗稱傳藏、又号秋水、或号小醉翁、師山田月

洲、受程朱學、安永二年、今榮翁公創建府學、乃以正誼爲教授徒衆愈盛官、比御用人兼領湯尾地頭、經史該傳最精於左傳、世謂左傳傳藏云、晚年奉命編修島津國史、又著孟子和解等、侍講

溪山公多所匡救恩遇日渥、生於享保十九年甲寅、以文化五年戊辰十月十六日卒、於家年七十五門人、橋口國器爲之、墓誌、

日高爲常 名爲純、称甚兵衛、受學鳩巢、享保十四年五月三日、

爲大史留學、元文二年出宰大島、四年十一月復本員、六年十二

月爲副使、寛延一年四月十九日死、

野津鑑休 号長兵衛、

川畑作圓 名國風、字自尤号臨川堂信、朱學專精於四書小学近思祿、蓋受業于登龍、初爲仕坊主給事、御數奇屋後舉府仕、爲御書院方小役人、寛延四年、致仕剃髮如初、明和五年三月十一日

卒、法名臨川堂自尤作圓居士、

本田親方 称新右衛門、受學於登竜、寛保三年六月爲表御小姓、

行史學事、寛延二年六月轉副史、寶曆六年八月至大史、安永二年創建府學時預其事、三年正月拜行人領史事、如故其居職也、

編修淨宥圓三公年譜五十四冊、安永八年己亥十月朔日卒、生於享保二年戊戌、享年六十二、

橋口國器 字璉、称權藏、今見教授、

○^{合葬}赤嶋孤山 名懿、字子厚、称茂次郎、肥後人、

赤嶋貞幹 字彥禮、号海門、俗稱源助、本貫谷山土人、至貞幹好學受業於月洲、後遊肥後師藪孤山、學術大進既還舉府士、天明三年爲教侍讀、溪山公寵遇特渥、八年以原任爲大史、寛政五年轉赤卒將、七年至教授比御側役班大府使、貞幹以式日入講經、於神田學校世咸爲榮、又自幼好和歌入芝山持豐門、文化二年乙

丑八月晦日没、年六十四、葬大圓寺大府儒官古賀古愚、爲之墓

表、

深栖早太

清川紹正

生七八歲入登竜門、以秀童聞年十三、正月登龍闕講紹正、乃講

孝經登竜爲文賞之、其文傳于家云、

入佐兼侶 称助八、後三三、蓋作圖弟子可考、寶曆八年十月、

爲御側御小姓行史學事、十一年十一月以疾免史學爲御小納戶、

後削髮出家更号、卽道遍參京師還居蒲生、耕閑庵詠歌著書爲

樂、

金新井白蟬

小田原紹大寺鉄牛爲御城代、寛文七年傳太玄公、

愛甲喜春、名季定、一名廣隆、字玄德、稱諸兵衛又称平左衛門、

後改喜春、生於慶長十年乙巳少如竹三十五歲、寛永二年師僧常

德寺十三世今龍泉寺也、二年泰岳讀書、十七年正月如按救島、

師事如竹受朱氏學居之、六年學業頗頓成、又師江夏二閔受其易

學常、又業贊名聞于世、萬治二年正月命侍讀 寶廟爲志布志、

二月從如江戶道至脇本命爲誌、三年五月、公反自江戶廣隆寺從

之、元祿十年八月十六日卒、九拾三、法名文嶺玄德居士、所著

述書類十篇、皆傳于家、

(不明)

崎御附大坂御御留守居、元文二年四月二十七日、爲御守役讀慈

德公、時年六十七、五月朔日領高原地頭、寛保二年壬戌四月十

三日卒於江戸、年七十二、法名全功院義連長節居士、

川上五兵衛

竹内仁角

二人傳統未可考、所謂實學兼此也、

島津久竹 見前、

愛甲季經 称玄昌夙承父學、又遊學江戸、

愛公季里 幼字玄碩、改称喜春、延宝六年戊午、生受學於曾祖、

喜春年二十而喪、喜春遊學麌府、元文元年爲 有公侍醫、列於

府士仕 慈德公左右、寛延三年三月十五日卒、年七十三、

慈德公

愛甲季堅 称諸^岳_マ衛爲監、先父相死、

季寬 称助次郎、寛文五年乙巳、生幼承祖學以秀重聞、貞享四

年九月四日發死年二十三、

愛甲季俾 喜碩、業醫、

季雄 称新左工門、愛學市未蘭水、

(伊集院俊矩文)

林羅山 初名信勝、稱又三郎、後名忠字子信、号道春、爲民部卿

法印、天正十一年癸未八月、生於京四條町、父日信時伯父理貞

吉勝養爲子、幼惠不群、文祿四年入建仁寺之大統菴、就僧慈諭

讀書以神童鳴、慶長二年東山僧倡欲使爲僧信勝不肯、乃帰家不

復入寺博求讀書、五年信勝年十八、始書讀四書新註、自是覃精

宋學七年秋經過西海、八年開筵聚生講論語集註外史、清原秀賢

奏于朝日、自古講書必蒙勅許、信勝不然請其罪之事、聞神祖々

々哂曰、何爲答之人各從其所好可也、由是講學愈勉、九年遂入

惺窩之門道日新、是年見神祖於二條城、十二年三月始朝駿府、

四月拜台德廟於江戸、而皈洛祝髮、更名道春命也、十六年賜采

地於洛外、十七年以其妻荒川氏從居駿府、元和四年賜宅地於江

戸、寛永六年十二月叙法印位、七年冬賜別莊於上野地、又賜金

二百兩、使開庠序焉、九年冬尾張義直創建先聖殿、於上野之別

莊十年二月丁日始積菴於先聖殿、明暦三年丁酉正月十日九日、

江戸大火及道春宅、二十三日卒、年七十五、私謚文敬先生、

敬吉 名叔勝、

○竹内助市 名益祐、受學如竹、後入禪學生、於元和八年壬戌家傳、

調和技仕泰公、左右侍讀恒爲寵遇最厚、元祿八年乙亥八月朔日

卒、年七十四、法名月汀空松居士、

人もなき我を汀の 船心ならて八月を乗、

○東郷重経 初名忠経、小字多宮、称九右工門、生於慶長十七年壬

子、本姓島津氏、正保三年出嗣東郷氏、受學於如竹、又遊學京

師、延宝二年甲寅十一月七日卒、年六十三、法名一岳道貫居士、

○伊地知重英 後名重張、小字勝八郎、稱助右工門、明暦二年丙申

生受學助一、延宝八年爲大史、貞享三年水戸光國使其臣佐々助

三郎宗淳來訪古書、公使重英爲之接伴、宗淳感博識云、時年三

十一、元祿九年九月三日致大史、十四年、公命如徳島訪採古

書、十五年九月三日歿于島、年四十七、法名一見自生居士、

○本田親貞 称新石工門、仕于寛廟爲定御 供其一年從 公發府城

也、令於衆日、公將以明日發駕、從者及拜諸途同者皆先期出、

既翌公開別宴日傾西山、猶未初興時如竹亦日、侯於城下而憂、

公失信於衆乃嘆息日、噫無忠臣乎、蓋以諫之親貞在側聞、如

竹言大怒之日、汝儕孰忘忠乎、如竹日非敢謂諸君謂、其左右而

已人臣侍餽不諫、如今日可謂忠乎、親貞乃服遂師、如竹受其撃

云、明暦如斯可謂忠乎、親貞乃服遂師如竹、聞宋儒學云、明

三年五月二十一日卒、

○久保之昌 称平内左工門、爲人篤、志士往々慕其風、愛甲廣宗等、善又學示現流於東郷重位事、慈眼・寛陽之二公師島原、有子之照七兵衛事、泰公有功、

○山口治易 称仲左工門、受學於重經、精性理說常讀朱子語類次德

行聞、元祿十六年二月作糸柳十篇、便後學云、又作爲以呂波歌

四十七首、皆述遊學也、寶永三年丙戌正月二十七日卒、法号覺

峯了智居士、

○大玄公

○相良賴安 初名忠清、小字志賀、称源五左衛門、生于寛永八年、

本姓東郷氏、乃重經之至、明暦三年六月、爲相良内藏子賴章嗣養子、受學於伯父重經、延宝四年九月補地頭於水引、乃爲教令

諭邑人、元祿二年八月七日歿、年四十九、忠山元義大居士、

○竹内彌 称傳兵衛、蓋重經門人、侍讀淨國公、

○淨國公 精乎理學、

○山口治 称仲五左衛門、承家学、

○山口治 称長兵衛、承家学、爲山方下目附、

○森有長 称喜右衛門、老号紅雪、

○市末家豊 称宗兵衛、生慶長十年乙巳、乃親貞有長益祐筆善、興

共學於如竹住、于寛庵^{廣力}爲騎馬、正保元年二月二十一日卒、年四

十、法号寒山宗眞居士、

○相良長英 俗字清兵衛、号卜山、受學山口治易、好爲詩有梅菊各

百咏、享保十四年十二月二十二日卒、清寒院殿、文林宗雅居士、

○伊集院俊矩 称仁左衛門、寛文十一年辛亥生、受學治易以德行聞、

享保三年五月十八日、爲郡奉行、歷御目付糺明奉行長、

俸百苞及銀若干、承應元年遂臣、薩藩食錄三百石△、

△明暦二年八月十三日、爲大玄公侍讀、寛文五年命從鹿児府別自

有傳、

○室鳩巢 名直清、字師禮、二字汝玉、称新助、生於萬治元年戊戌

○西健甫 名順泰、号西山、俗称健助、對馬人、以元祿元年戊辰十月三日歿于江戸、年三十二、

○板復軒 名九、字惇叔号、俗九左衛門、江戸人仕于幕府、享保

十三戊申四月二十三日歿、年六十四、

○小倉三省 名克、字政義、称弥右衛門、土佐人、承応三甲午七月十五日卒、年五十一、

○山崎闇齋 名安正、称十次郎、

○伴部安崇

○赤井直義

○佐藤剛齋 名直方、称五郎左衛門、

○稻葉達齋

○川井東村 名與、字正直左衛門、延宝五年十一月六日、大坂人

○河口靜齋 名子深、称三八、播州人、

○伊東反齋 名子膽、

念深見元岱

榮翁公 三曉庵之著

溪山公

改利容幼字、

○兒玉南堂 名實門、字喬松、称早云亟、後改祝人、正德元年辛卯十二月生、寶曆七年正月爲大吏、習學例許中通、七月爲副史兼

唐學事、十三年八月轉大史、九月賜宅區、安永二年三月拜行人行史事如故、四年八月轉稱祝人、六年先是侍讀榮翁公出入帷幄久矣、至是八月授曾於郡地頭特恩云、因九月世列小番、天明二年初侍讀溪山公、亦有功是年七月休比御側役、預參聖堂及史館事、四年七月十七日死于江戶、

○三宅尚齋 名重固、称舟治、

○遊佐木齋

○佐久間洞巖

○羽黒養濟 名成實、本姓牧野氏、称左平休、仕於彦根侯以貧去隱

於賀藩、改姓名云、

○矢野拙齋 名義道、称理平、伊与人、享保壬子正月十二日歿年七十、

○奥村子復 名修運、称源左工門、

○小谷伯致 名齋賢、称伊兵衛、

○兒玉文明 名実識、称主左工門、改早之亟、安永九年至又大史、

天明五年六月卒、

○兒玉圖南 名一鳳、或名一鵬、字國南、一字希雲、初名利張、又

○大玄公

○淨國公

○兒玉金麟 名利貞、一名宝俗、字宗因、又改梅菴、或号靈月堂、

薩州市衆人、生於寛文八年戊申、少好學寛公召之府下、使宗因如長崎、又受句讀於蓮中、謙而學業大進、又好善書有命比御小姓侍講、入帷幄尋比御側御小姓侍講、大玄公、淨國公數從東行、享保二年九月十五日、淨公擢爲府士賞功劳也、大府命公召宗因諸戸田山城守忠貞弟法、又大島雲平、栗元端見受宗因醫術云、寛延元年戊辰十月五日卒、年八十一、

山田月 名實直、称主藏、寛延元年承祖父後仕至邸、

日本仁齊伊藤氏

公名維楨、字源佐、初名維貞、字源吉、姓伊藤氏別號仁齋、所居堂前有海棠一株、因又號棠隱乎、安人夙喜宋儒說、嗜耽性理、後乃知其非首倡復古潛閉、不仕教授生徒弟子數百人、授刺通謁者蓋至三千、于寶永二年病卒于家、七十九歲、私謚曰古學先生、

男五人、長子長胤字原藏繼家學博覽給聞、亦有過其父、

家言 語字內書孟爲之疏、意味血脉原自昭著、
引據經語 專撫孟子、性善四端以解詭語、證人外無道々外無人乎、

易可行、

孟子曰性善此其說所、根由之詰、

中庸曰、天命之謂性率性之、謂道修道之謂教、

孟子曰、惻隱之心、仁之端也、是非之心智之端也、

又曰、人皆有恥不忍達之、於其所忍仁也、人皆有所不爲達之、於其所爲義也

以上並證性之善、爲受教之地、而擴充
固有四端、則爲仁義禮智之德、

書以禮制心以義制事、

孟子曰、君子以仁存心、以禮存心

以上並證以禮義、有心無憚欲、復初之說、見宋儒之學非古、

天道若大路、然豈難知哉、大路者貴賤收、通行之處猶、

本國五畿七道、及唐十道、宋二十三路、上自王侯下至、於庶人莫不

由此、而行唯賢者得行、而愚者不得行、貴者得行、而賤者不得行、

非不可須臾離之道也、故道者人倫當行之路非待教、而後有非矯探、

而能然皆自然、而然至於四方八隅遐陬之、陋巒陌之姦無不自有、君

臣父子夫婦昆弟朋友之論、亦無不有親義、別敘信之道萬世之上、若

此天道尽乎、陰陽往來地道尽乎、仁義相須唯是

往來通行之理、天地之間無適、不一元氣謂之、大極萬物在大極中人

在、萬物中所以最靈、而異於萬物者以其性之善、善而有斯四端之心

也、夫性質不齊有萬不同、雖非天下一人無、性心者而善々惡々之心、

則無古今聖愚皆一也、一則是良心、良心則是四端惻隱羞惡辭讓、是非人熟無之、見其當惻隱者、則惻隱之心發焉、見其當羞惡者則羞惡

之心發焉、至見其當辭讓是非者、則亦辭讓是非之心發焉、擴惻隱之心而充之則仁也、擴羞惡之心而充之則

成智也、仁義禮智謂之德能達、其德於天下而流行者謂之道也、端本也、謂仁義禮智之端本起於此也、故擴我國有之心充、而成德譬之如

稽稽天之水起、於濫觴含抱之木生、於斲栽孔孟之示人、千言萬語皆無、此事人外無道外無人、以人行人之道所以易知易行也、其學之

目蓋有三焉、曰性曰道曰教其修之書、蓋有二焉、曰論語曰孟子中庸之書、即論語之衍義而孟子之書、而即論語之義疏也、昔在孔子、

顧古今歷選群聖、其造中庸之極不出、於人倫日用之間、而可爲萬世標準者、唯堯舜文武之道而已、於是乎盡點大難知難行磅礴廣大、不

可窺測者祖述堯舜憲章、文武如身在堂上、乃能辨堂下人之曲直、故

孔子述而不作、不作非不能不作述、其可述者何必竢堯舜文武、然後

爲比掌乎、比論語一書實爲最上至極、宇宙第一書、而孔子最上至極

宇宙第一聖人、所以生民以未未嘗有、而賢於堯舜遠也、孟子之書又

亞論語、而發孔子之旨者也、孔子之時猶白日中天有日者能行、故其

教人唯告之以修爲之、而不待復詳解其義、孟子之時猶暗夜行道、必

待明燭、故不得不明解其義示所嚮方焉、若夫欲觀孔子之道而不由、

孟子者猶渡水無舟楫豈將能濟乎、程子云論語、孟子既治、則六經不

治而自明矣、比實千古名言也、讀語孟者其法不同、論語等言教而道在其中矣、宜先知其意味而血脉自在其中矣、孟子專言道而教其中矣、

宜先知其血脉、而意味自在其中矣、夫道矣大矣、然不能使人爲聖賢、其所以使人爲聖賢開來、學而致太平者皆教之功也、然而使人之性頑然無智如雞犬、然則不能使其教、而文善惟其善、故曉道受教不啻地道之敏樹、此性道教之別也、聖人之道城而已、人敬知聖人之學以實

語、明實理斯知平易者道、而高遠者非道也、井子日天神氏地神氏遇矣、夫夫暢草之貢於倭姑且置焉、自遣唐之使聘問不絕留学受業凡、刑放其所築、則仁德日新常潤、其身辟面美善、其文章與聖賢、同其

教誠若夫天教、及法華真宗等之弊、浸潤至蔑神滅彝則英斷、既臘後世愚民已眩惑嚴設禁令、偈閉斯徒初入乎、範其功業匪啻以論、當時人永至使三州士民咸趨丑路仰、爲所脅式焉、四五十年至、君薨于永祿十一年、別自有傳而如天教後蓋台德廟世遂令於天下逮驅斯徒、由是藩亦恃遵奉之竝禁二宗、歲六月則偏

督戶口求還歸者至六七年、修正負版謂之札改、赤寄教授之遊耽藩也、桂菴語彥禮教授字、曰、貴範自古世不乏、於賢君明相何以言之、觀其

貞和四年正平三年戊子、三月ノコト也、

菊地傳記ニ當月肥後國ニ於テ、二品式部卿懷良親王ノ御願トシテ、玉名郡高瀬郷、高瀬山清源寺ヲ建立シ玉ヒ、東福寺一輩和尚ヲ以テ開山トシ玉フ、

五月廿八日、足利尊氏ノ庶子、右兵衛佐直冬ハ、武藏國東勝寺ノ賜食トナリ居レルヲ、男ニナシ京ニノホセ此ヨン、内ミ申入云ミ、五年行宮、賜宸翰額於清源寺、

ながらへてとそ思ふ君ならて、そいとものふ人もなき世に、

感君一曰、恩招我百年、魂扶病底床下、披書拭淚痕、

玄惠法印

正平七年二月十五日、行弘尊、京師、

於其學行、亦足以觀有所造焉、故併言爾、

桂菴第二十八

糀桂菴、字玄樹、後號島陰、本貫周防山口人、不詳俗姓、以應永丁未生、永享七年遊洛龍山師事、惟肖ニ受内外學時年九矣、嘉吉二年、年十六而削髮、爲僧始登戒壇頃、肖既老隱棲山中名、日雙桂、以儒鳴

世、因樹亦取撰其名字、當時譚學者鮮不聚稟焉、而樹最苦營雪與竹居、爲璠景徐桂悟蘭坡等齋名、業成而帰飛錫長州領永福寺在赤間追閱二、迨其居、閑愈信宋學、雖欲究之精然未能知、岐陽所點四書悉適注意、否於是慨然有求眞學之志、時會國朝撰遣明使、於五山僧而肖等知擇レ材ヲ之權、乃徵知名衲子八十餘人、聚諸南禪題大梅、梅子鳴馨一聲、令各爲詩以闢其材、時樹亦就試場應鑾賦偈曰、大梅梅子鐵團々八十餘人、下觜難今日當機百雜碎、那邊一核與他看、肖等大感乃舉玄樹後四十年、永正三年、天竟桂晶知陳外郎呈桂晶詩亦言是事云、誰圖漫寄有、茲翁方晉蚤隨獨廣中唱、大梅梅子偈至、今禪味慕禪風是歲桂晶年八十二云、惟此知渠同就試場御聞舉喧、故取註此。於是應永元年、樹使于明入見憲宗宴賚特厚、以詒當時爾。

明年元旦、早朝大明宮時年四十二、乃爲賀詩一句、及齒後每歲、且爲詩言箇一二、因此例示、不忘榮云、聘禮既迄遊蘇杭間、親就鉅儒受朱氏學專取、倪士毅轉釋曹端詳說等曹端號習古四明人官至監察御史、潛心玩理講明四書居、七年博約研究而業大進、內外精蘊靡弗通悟、尤邃書經又長詩驗、其在明也、每興懷觸感軌必爲詩、至若紀夢遇舊諸作、則於明亦詞林競傳、往々咸稱爲有唐人之風、其紀夢詩曰、帰夢飄然落海東、赤城舊院杏花紅坐、迎諸友一樽酒以慰、多年離別中又遇舊作途中適遇、四明人一笑如同骨肉親可有扶桑、新到客報言東魯送殘春多如此類云、文明五年帰報使事、國朝自置博士世々教其學徒、皆以古註而比樹回極、未獨有解新註者、故樹雖有所會得躬非博士不得、公然倡講以教京畿人、蓋國典也後百廿餘年爲慶長五年、文敏林先生始講集註外史、清原秀賢罪之日、自古無勅不得講書可併知焉

且當其時京師大亂、不遑譚學、於是避寓石州、八年游歷豐筑肥諸州、所至一時老師宿儒咸推尊之、就中肥菊府置泮宮、特崇聖學樹往而客焉、吾藩龍雲、玉洞等聞樹鳴碩德、與國老等薦之、於圓室公使人如肥厚聘招レ藩、樹乃欲往而聞薩隅ノ有事不果、九年正月又欲適、旦爲詩曰、肥陽城外薩陽城、聞說今年收甲兵、萬里雲飛駕言邁、風流太守愛憎情、二月菊不釋菜、於泮宮樹猶與獻詩焉日、太平奇策至誠中、春奠賈筵陪泮宮、泗水吹添菊潭碧、寒雲染出杏壇紅、一家有政九州化、萬古斯文四海同、絃誦未終花欲暮、香烟僕袂畫簾風、十一年二月樹遂來藩始謁

公於市來特被寵信、明年二月、公命創寺於鹿兒島府號樹レ柱院、又名島陰寺使樹居焉、蓋因其地在向島陰、以得名寺、且自爲號云、於是樹亦深感公恩遇日厚、而有與所爲遂委身、無復移錫之意、乃與國老伊地知重貞改周防守、稱左衛門尉後胥議、刊大學章句於薩府、十三年六月頒行于世、實國朝章句印行之嚆矢云、距今天保己亥三百六十年矣、嘗聞本傳之布士德田武中、武中傳之市人增田熊、能以讀市田大夫政中、日涉忘人赤池金石、獲此遺余嘗因人請覽其本日、書畫詰然繁難謹探索、故未得覩讀謂公室興隆至、若今日原其溢觴、蓋首此舉矣、然則遺本可レ觀讀謂、公之此疾役有得爾、而入侍讀、寶愛者也、故註于此疾役有得爾、而入侍讀、公側出聚弟子日、講新註、以弘斯道務爲已任矣、自公族大夫至多士群、衲朝野靡然莫不嚮慕、受其學業徒衆益盛、名聲鳴世隣國往々至歡望、以謂薩都新興仲尼之道、移東魯之風撲答小野克盛詩序、是吾藩倡宋學之始也自文明十年、應聘於至天保十年三百六十二年、

公乃受書經頗通大旨克正序文、前此國朝皆從古註而至樹、則獨依集傳

國朝之尊信焉者、可謂自公始矣、是歲秋近衛公

進士官政家也

使大

醫陳祖田來聘于藩、樹與之傾蓋道契最篤、十月告別樹贈以詩祖田回

京師、蘭坡等

南禪寺僧

乃擊節及洛驥客和焉、長享二年移寺城西

時府城在今大興寺後山、而此寺址、則今城北射圃阪邊去、初寺瀕海屢爲風潮所善墮敗、不遑營治至

是命遷新稱呼如、故但有清泉俗呼泉菴云、十月適日飫肥董安國席

間歲、渡唐船多擊飫肥、公移族人忠廉

島津修理

於飫肥城以備邊疆、且

鎮津港至是、遣樹兼掌譯事學徒益衆、延德四年

七月改元明應

白安國還居樹

桂、初樹應聘及平重貞刊學章句見上、盛行海內僅歷一紀板既楷矣、於是十月再刊樹桂

亦在鹿兒島復行世

距今天保巳亥三百四十年矣、愚嘗求遺本、而無獲焉、去歲仲冬男季直偶得之、市刻

跋卷尾則文龍集、辛丑夏六月、左工門尉平氏伊地知重貞、命工鋟梓於薩州鹿兒島、延德壬子孟冬桂樹禪院再刊云、即此板也、而點句說無有和訓、而大書註如本文字行下

一字耳、蓋其授句讀教、悉讀註如本文、然吾蕃間今教童子、讀大雋音泰今讀如字、亦其遺俗云、按時皆古注讀知新古、故大書註似有理焉、後百余年慶長庚子、博士清原等之講四書、唯學庵依朱子章句、而如論孟猶讀古註、見羅山年譜其章句云、亦應吾蕃所

梓本也、但未觀中庸矣、後有得耳愚今所獲、延德本字體古雅筆力雄勁觀者、多鑒爲樹

墨跡、未知果然是歲也、七月私請學官需祓裝潢以藏于家、故併註焉

明應二年復適安國源永春

近江佐々木氏春東林居士來裏其學三年、樹還桂樹永春

亦從、四年告別樹爲詩送、乃渡于明舟次鄧江、八月袖所送詩歸之、

明儒乃廣東參政、劉洪平太守盧瑞等、爭和頌德者十有二名、而四明

進士嚴克正序焉、五年四月樹在島陰即桂樹院、永春猶留鄧江、七月又謁

進士洪子經師所齋島陰集、需弁一言乃弗辭亦爲序、皆名鄉、鉅儕聞于時者而於使彼則孝宗、弘治九年也、六年永春抱畊自明、二月復未致

明詩文、樹大驟其子經序云、精內典通儒書、旁及莊列無一之不究心矣、又克正云、精究內典旁通四書百家子史、於尚書尤究心焉、由是

後學莫不得聞朱夫子師弟間、所講之奧旨、先是南游播名一時者、於唐則栗田受經、於趙玄點

四明教授

仲滿慕華不肯去於宋、裔然善隸書、又能屬文

吾林羅山亦謂達唐使煥發青史栗田仲滿裔然竟前篇

而洪子經評樹爲人爲不

在、於栗田裔然之下、且進士劉洪、盧璃以下、宗顯、倪光、金亮、雜闐、愈澤、鮑垣、沈賜、方震、張珮、倪鑰之屬、亦莫各不和其詩以頌高德者、拏此其所造詣、亦足以可觀焉、九年奉釣帖董建仁席尋、轉南禪南禪蘭坡爲文賀焉、既而帰藩頃讀書法儒、日曷泥吳漢從便可

也、繇是樹以所會得規岐陽所點四書多改乖誤、別注和訓以授子弟、接愛甲氏書云、吾師如竹頭諸文之四書、和訓岐陽創之、至樹明多所會得、故其四日更加脩正以至文之、文之亦間改正以授弟子、而迨如竹始梓行之弘衍于世、由是世人謂之文點、則如天和板四書、跋近代南浦創加訓點、羅浮復潤色云類此也、然今尚得元龜四年所寫論語古本底有訓點、按是歲當丙寅、文之年十八、倪窩十三、如竹三歲、羅浮未生之時、則非文之所創者明矣、日間旁註以曹氏詳說、樹在明也專講此書、見南浦集拏此、元龜本爲樹所脩正者、亦無可疑矣故、故註焉爾、然於斯文也、時猶草昧

學士未知句讀、且有新註也、於是十年樹著書辨四書五經、註有新古、且以國字解、朱註例述係點法、使世蒙士皆知學必崇宋說先生在、能辨其句讀之意今所罕覩桂菴和尚家法和點此也

愚觀二本、則慶長十六年、所寫本與元和十年所刊本耳

而、板文本頗少、於厚本且刪、明応十年字作、元和十年爲如竹样時者、可併知焉、列諸藝文、今將厭觀、然世之讀朱註者、自古往々莫不受其賜、而階梯焉況既梓行章句、於文明與延德、又至明應猶以國字解朱註例述、和點法以弘于世、樹之於朱學其功亮偉矣哉、文龜二年構菴伊敷名曰東帰、三年薦弟子釣雪

上野縁野人住職、日州市未龍源

移安國寺、代董其席而自老于菴、初陳氏之帰京也、五岳僧等寄和樹

詩見上、皆込海南、於是致書需副時多逝矣、難悉獲葉、乃永正三年陳

氏以告桂悟景徐景脩壽碩、桂皓守擇永瑾等、更和寄者十有餘名、皆

碩德之緇流而或恨、吾疾挽師不公諸天下、或述虛席南禪疾、師回轍

之情、莫獨不欽慕以觀其紀者也、然君子不以榮辱易操節、樹雖釋氏

實崇儒學、而承君恩亦如彼、則不敢往招、蓋示不事二君之義可以觀

焉、五年六月十五日卒於東帰菴今上伊敷郡小高有菴址、得壽八十二葬于菴

地、日前建仁後南禪桂菴和尚大禪師、見享祿五年門人巢松、祭師詩序裁杉

爲冢、後百七八十年至太玄公時國老島津圖書久竹、島津主計久年等、訪索師墓無

能識者、最後聞洪志人、愛甲烹春獨識其箋、乃通書問竟得其處、既而老杉又經歲枯、

至享保七年朽根將滅、大禪寺宗玉、一乘院堯周、妙谷寺通岸、及府士鑑田覺醒雲、町

田權兵衛・本田與市右衛門・四本正藏・越山茂右工門・鳥井如見・篠山慶賀・木村探

元・田原武左門・仁禮正膳五等、翕然戮力、就其根址建石記事、即今墓也、

今墓題曰、正興三十九世、前南禪桂菴玄樹大和尚禪師、墓凡 國朝

自古禁非博士建旗儒門、故師沒齒崇儒學事佛、於寺孔釋綜究因循

秀顯亦其時哉、恒誨人曰仁吾儒所宗而我佛之大慈也、又示人詩云、

积門學在敬心君、或云人有正心寧愧天、或云胸中自有不傳書、或云

孔孟何人在用情多如此句也、匪徒機麗靡暢非教所著、有島陰漁唱島

雜著家法僂點等、皆傳于世、若夫遊明諸作別有南遊集、今不傳、又

其真像藏大竈寺、乃畫工秋月所寫云、秋月字等觀薩人學畫、於雪舟

而樹與之應酬、故令圖亦無可疑焉、今著師傳凡所引書、島陰雜著五

岳詩文、高僧傳恭畏問答一名乾、惠論、南浦文集、戰國英雄集、相屬系圖、

不忘抄・西藩野史・慶島藩名勝考等、而於其中若覩原文、以足有証

者粗摘載下否恐讀者、英知其德名一遵至見稱、於明被信乎京以鳴九

州之實也、若夫詩文與時汚隆自然世、運示諸今人徒、却生睡亦惟尚

實矣而已、

桂菴

終日終晝十二時、讀書講武又論詩、故是賢賢誠實意、樽前豈敢醉蛾

眉、作在聖人寧及賢、吹燈細讀述而篇、師門輕薄書生僭、誰使斯文

如古然、

曾子橫身孔聖門、那知一唯涉多言、寥々點坐夜堂靜、階下無人月有痕、

如何記得狀義心、默坐寥々至夜深、敏手鑿開混沌見、先天一氣後天

今、

右、見漁唱今抄、收載多答人詩也、

別紙式冊、左傳またく見出し、此中紀源ニ載置候、文義之事

実少々違哉考合申候間、改正いたし奉備高寶候付、可成令ニ候得共、

幸未被成、苦と奉存、尊丈續迫如此仕候間、此中能のハ被

捨置、此傳ニ而御取譲申候やふ、重疊紀源御願、左候て此冊ハ紀

源之末ニ御綴込候通ニ可申候処、奉願申候事、

兼誼先生

季安抨

漢學紀源中再考

稿

釋桂菴傳

三、大龍開山文之和尚行狀

大龍開山文之和尚行狀

師諱玄昌、號文之、世姓源氏、湯佐、父河内人也、避亂奔于日州福島、於此生師、乃弘治元年乙卯也、自幼聰異群兒、常無處俗意、父母知是法器、撫投郡之龍源一翁室、六歲稚髮、受貞授法華過目成誦、且通其意、所學法華以指^鑑沙^不、不差一字、其文甚顯明也、人稱之文殊童甫、十三歲、賊元正詩膾炙人口、京之相國仁如和尚、嘆稱而和之、傳見少年詩筆清、奇才可畏遠邦生、若通書信比相對、千里同風宜寄聲、加之書、文之二大字爲別稱以饋、自是師聲華輝々、起叢林間年志學、即航海上洛人惠山謁龍吟於熙春、熙見其氣宇甚器^之許入室、凡有微話應答如響、熙曰子他日必能^支吾道厚自愛、遂掛錫于本山服勤十有五年、鞠明究曉唯尽祖意蘊奧、年迫三十歸、日州寓高山少林、財部正壽之兩寺、禪餘嗜學韻六義工歌詩、博綜內外經書、由是文稟教筌充于棟汗干牛、日躉隅三州之縉素雲^和達^一時有問禪要者、歸日吾宗無語句、無法與人雖然、不以言語文字豈能接人也哉、傍有習儒

典者、師日若論本分佛語祖語尚不學、況外書耶、慶長八年三州ノ太守、命師往正興、十刹、六月十八日辱賜釣帖補正興寺開堂、乳香爲熙春、嗣其所行、禪規皆則惠山拜堂提唱、詞海辭河滂渺不竭学者無、能、凌泊其涯涘也、八月二十六日、大相國源家康公降賜釣帖、董相陽建長筵席翌東方無勝幢發揮祖道、雖古宿盛時殆不之過、吾國傳周道講聖典、歲既久矣、右有菅家名公臣儒之、訓今盡泯、故世不知有聖典、師深嘆而加四書訓其義、詳明如迎刃而解以傳世、凡閱經書不由師訓、何歟通曉聖道、然後羅山加訓皆踏、師塵而已、慶長帝辱有詔入內講^之聖典、深愴^之旨時有廷臣言事者、師塞外之人、雖識博才宏詞辨淺陋、而無節何達天聽師聞之、心懷懸愧謂佛、曰生王都難、夫子曰、邦畿千里、惟民所止誠此言也、三州太守忠恒公、電遇日渥捨鹿兒島之館創精舍、時慶長七年壬寅也、追修^之大中公・龍伯公冥福^之、摘其名字曰、大龍山日瑞雲^延師居焉、爲開山英祖傾誠西方、衆望風萃止、至無所容師不之拒、皆隨機而接大說^之無上正法^之、如一雨所施大小、根莖悉獲沾潤矣、吾日域之外有一嶼名中山琉球國、是春秋之世稱霸王歟、彼國王聞師、名望賚書賜紫仰慕見、其道化之盛、而本國異邦之君、交相傾嚮矣、元和六年庚申季秋中旬、示微疾同晦日集門人囑後事、跏趺而化、塔于加治木庄安國禪寺、世壽六十七、臘四十五、生平所述南浦文集六卷、行于世予貞享丙寅秋蒙三州太守光久公嚴命^之、住此山既閱五霜、欲狀師行雜需於此尋、於彼無詳事

説者セイガ 喚呼、惜哉先達不記聊形容万一云、元禄三年庚午六月十五日、
ママ

雲陰嗣祖比丘慈宣撰、

聖武於法相桓武、於天台嵯峨・宇多、於真言鎌倉、於禪宗東照君、
於念佛宗、亦皆自然之理云々、

四、伊勢貞昌復前川善書

伊勢貞昌復前川爲善書 愚考

此狀ハ、慈眼公御家老伊勢兵部少輔貞昌ヨリ、前川爲善ト云朝鮮
人ノ、帰化シテ召仕ハレタル儒者ニ、返答ノ文ナリ、加治木ノ新府
ニ移居レル時ノ事トアレハ、寛永八年公ノ御二男忠朗兵庫殿ニ、
加治木ヲ進セラレシヨリ、同十二・三年追ノコトニモ當ルカ、俄ニ
ハ考究カタシ、抑御國ハ文明中、圖室公御代入唐ヨリ、新註學問
ヲ傳ヘ帰ヘル、周防山口彦ノ僧、桂菴和尚ヲ招カレ、御信仰アリシ
ヨリ、世々其学流ヲ繼承ケル僧絶ヘス、指南セシニ、公ノ御若年
ニテ、朝鮮ニマシノケル時トモハ、松齡公ト貢明公ノ仰セ談セ
シニヤ、大内家ノ遺老ナリシ門司謙柔ト云儒者ヲ、三百石ニテ召抱

ハレ、公ニ陣中ニ侍読セシメ玉ニ、又明國ヨリ帰化セシ汾陽理心
ニモ五百九十七石賜ヒ、又同シキ明人、江夏友賢ニモ三百石賜ヒ、
又右ノ桂菴流ノ儒僧文之和尚ニハ、大竜寺ヲ建テ召ラカレ、慈眼
公御學問アソハシ、歷代歌ニ就中心学探其頓トカキタル程ノコトナ
レバ、時ノ大名方ニモ、冠頭マシセシハ、左モアルベシ、斯テ貞昌
ハ始終 公ノ御相手ニテ、同学セラレ、文之ナトヨリ受ラレシハ、
後ハ江戸ニ定府テ、林道春ニモ出入シテ、書經ナト聞カレシコト、
羅山集ニ見ユ、左アリテ、文之ハ元和中ニ迂化ナレハ、其後ノコト
ニヤ、朝鮮ヨリ捕ハレ未リシ、此前川爲善ナト御側近ク召仕ハレ、
一往加治木ニ移サレケル由、寛永十一年加治木東衆中帳ニ、高六十
二石ト載レリ、其後貞昌ナトノ吹拳ニヤ、鹿府ニ召移サレ、御切米
六十石ツ、賜ヒテ、寛陽公ニ江戸ニ持読シ、詩作ノ法共教マイラ
シ、寛永十四年六月御加増アリテ、百八十石ニ召成サレシコト、其
年ノ十月廿九日、野島久元等ケ御曳付ニ見ヘタリ、慈眼公ノ和漢
ノ御連歌席ニトモ、様々召加ヘラレ、五言句ツ、池深水猶清千秋
楓似錦ナト付タルアリ、爲善ノ孫ハ休宅ト云、今城ヶ谷ノ前川氏、
其子孫ト聞ケリ、又爲善ノ吹拳ニヤ、同キ朝鮮人ノ安岡爲足モ、御
側近ク召仕ハレタリ、元和六年鹿府高帳ニ、醫師三十五石トアリテ、
其時一統御省略アリ、百石以上ハ四分一ツ、以下ハ三分二ツ、上
地アレトモ、爲足ラハ上地ナク、下置レシト見ヘタリ、寛永五年十

二月江戸ニ於テ、六十五石御加増ニテ、百石ニ召成サレシコト、亦御曳付ニアリ、元和六年既ニ鹿府士ト見ヘルニ、此狀ニ移サレントストアルハ、元和以前ノコトカ、又一旦他軒ニ移サレ居テノコトカ、考カタシ、寛永十三年九月府下ノ屋敷帳ニハ、三畳トアリ、万治二年高帳ニハ、百石安國^同神左エ門トアリ、爲足力養子ト大概キニ見ユ、貞昌ハ治乱共ニ勲功莫大ノ御家老ナリシニ、此狀ニ爲足老先生ト尊ヒ、爲善ニハ拜呈貴酬トアテ、闕字シテ公ト呼ハル、事トモニテ、其時代材徳アル人ヲ敬重セラレシ風俗、マコトニ惟以テ宝トセラレシ御政道、感スルニアマリアリ、屋久ノ如竹ヲ召出サレシモ、貞昌ノ寛公ニ御学問ヲス、メ上ラル、故也、僧ニテモ朝鮮人ニテモ、唐人ニテモ道ヲ知レルモノハ、厚禄ニテ愛重セラレシコト、右次第ノ証ニ此文ハナルヘキモノト見エレハ、格別ノ宝軸ト存シ、墨手前ヨリ望テモ、拜見シタキモノヲ、幸ヒ一昨日御持參、且御頼ニ任セ書写シ、愚按ヲ以テ和点シ、朱力キ標註モ粗加ヘル也、但貞昌ノ文ニ乍憚恥ノ字遇ナトノ置ヤウハ、叶ハヌ乎、成字ナトモ爲ノ字ニハセハ、其頃如此文章ハ、珍シキモノ也、如竹ナトモ文章ハ此位ナラン、却テ劣レル方ト存ル也、手蹟モ無疑直筆ト見及ヒ、申候誤モアルベケレトモ、其段ハ博古ノ先生方ヘ尚正し玉ヘ、穴賀く、

癸巳十月十八日

柏原君

伊季安拜草

拜呈 爲善尊翁 貴酬

季夏初二日

貞昌九拜

御春ニ於テ、六十石御加増ニテ、百石ニ召成サレシコト、亦御曳付ニアリ、元和六年既ニ鹿府士ト見ヘルニ、此狀ニ移サレントストアルハ、元和以前ノコトカ、又一旦他軒ニ移サレ居テノコトカ、考カタシ、寛永十三年九月府下ノ屋敷帳ニハ、三畳トアリ、万治二年高帳ニハ、百石安國^同神左エ門トアリ、爲足力養子ト大概キニ見ユ、貞昌ハ治乱共ニ勲功莫大ノ御家老ナリシニ、此狀ニ爲足老先生ト尊ヒ、爲善ニハ拜呈貴酬トアテ、闕字シテ公ト呼ハル、事トモニテ、其時代材徳アル人ヲ敬重セラレシ風俗、マコトニ惟以テ宝トセラレシ御政道、感スルニアマリアリ、屋久ノ如竹ヲ召出サレシモ、貞昌ノ寛公ニ御学問ヲス、メ上ラル、故也、僧ニテモ朝鮮人ニテモ、唐人ニテモ道ヲ知レルモノハ、厚禄ニテ愛重セラレシコト、右次第ノ証ニ此文ハナルヘキモノト見エレハ、格別ノ宝軸ト存シ、墨手前ヨリ望テモ、拜見シタキモノヲ、幸ヒ一昨日御持參、且御頼ニ任セ書写シ、愚按ヲ以テ和点シ、朱力キ標註モ粗加ヘル也、但貞昌ノ文ニ乍憚恥ノ字遇ナトノ置ヤウハ、叶ハヌ乎、成字ナトモ爲ノ字ニハセハ、其頃如此文章ハ、珍シキモノ也、如竹ナトモ文章ハ此位ナラン、却テ劣レル方ト存ル也、手蹟モ無疑直筆ト見及ヒ、申候誤モアルベケレトモ、其段ハ博古ノ先生方ヘ尚正し玉ヘ、穴賀く、

客春二月廿三日之芳翰、三月十六日落手、四月初二日之惠書、五月十日又至開緘宛見公之面、攸然々々嗚呼、公之能大矣哉、文追韓柳筆兼柳筋顔骨矣、有餘力則披之喜目慰懷而已、
退之子邊
公是朝鮮人也、遭亂邦之憂、而成擒乘於我薩摩州、
國君知 公之才善而親、

君邊者無内外耽人之皆羨也、且ツ復 公本雖在鹿兒府、今也移於加治木之新府ニ而、舉秀才ニ門益榮へ名愈發、斯榮幾千萬年矣哉、今公有權門之威、如予至愚之輩、雖可相背如此至遠境、寄書以問客中之安否、是亦道之心厚故也、抑天下道行政日々新、故諸侯大夫士庶人皆勵學業、以欲志聖賢之道、當于此時、

我国君亦冠於諸侯、其芳聲也、不可勝數以爲如 公高才遇知、於世用力於當世者非幸宜也、因茲觀之均遇呂望之周文王、遇了房之漢高、公之同邦爲足老生、先亦雖其器大人、未知之常歎、

公之訴也、嗚呼時哉先生自去歲至、今春在東都而時々陪從、君邊以形其才以故承命、將移鹿兒府、先生之榮達亦笄日可待、令其文告先生者昉任 公之舌頭也、季秋初冬歎仰未帰鞍日取手、笑談日何日乎、萬般期後音耳、恐懼不宣、

五、日本儒者之系圖

易日、積善之家、必有餘慶積、不善之家必有餘殃、夫不然乎、于爰島津氏忠久十四世之後胤、修理太夫勝久、父八陸奥守忠昌、母者豈後之太守大友氏・源政親之女也、勝久素親小人疎賢臣、或事佚遊無度、或以博奕爲業作不善者積累、豈脫餘殃乎、老臣雖諫諍之、聊以不聽之剩、誅川上大和守久昌、諸大臣視之察後、車之誠樞笠^ノ之居城畔、勝久於于爰賴母緣出奔豈後、故我三州所無主也、然相模守忠良遂中興之切、當家之繁榮至今日尋、其濫觴依偏慈母 梅窓之賢慮也、父者新納駿河守是久也、爲伊作又四郎善久之室、設一男子号菊三丸^{日新也}、梅窓爲人好昔之道學、孔氏之遺書以慕大姪之聖風矣、不幸而善久早世、雖爲梅窓寡婦、曾不違貞心擁護菊三丸、在伊作之城而、而聽禁簾之政丁、于此時忠國之長子、相模守友久、其子相模守久幸^瓢、領田布施・阿多・高橋、是時無夫人聞 梅窓之麗質、且有貞心、欲迎之以爲妻、而以使節述旨趣、梅窓曰、予不幸雖爲寡婦偶有一子菊三丸、雖侍養此子、君邊後未不知所止、不如撫育菊

三丸爲伊作之主宰、予亦於領下終世々云、曾不存領諾、而過年序然一瓢認誓紙、以使節述真情日、我及高年未有一子、幸以菊三郎殿爲猶子、讓與田布施・阿多・高橋、以爲我家之督首、假令雖有親子必爲庶子也、梅窓曰一瓢之心底誓盟之上、非可疑處只老心之心緒難計歟、一瓢雖有約信可莫背、老臣之衆儀若有直子、則付兼三丸可所立直子者必然也、見老臣之誓書可定婚諾云々、因茲老臣獻連暑^ノ之誓紙、述不可有變約之旨、於于爰梅窓之帰菊三丸、即有加冠号 又四郎忠良、後三郎左衛門相模守、其胸襟兼智仁勇之三德、啓衰世中興之運、其子陸奥守貴久、賢才有餘而令我三州、其子修理太夫義久、竟仁大度而、既領九州、天正十五年丁亥博陸侯、豐臣秀吉丁鎮西一征之時、除六州雖殘唯三州耳、其餘光巍々在、今子々孫々繁榮者畢竟、梅窓之積善及子孫有餘慶前、大永五年乙酉 梅窓逝去矣、日新尤遊行上人、他阿弥陀仏法名号、妙芳梅窓住一房、於伊作建立道場、西福寺爲菩提寺、所寄進菜地五町、然文祿年間當寺社領勘落之時、此寺領皆落矣、自是以未無緣者、蓋于爰六年矣、當太守羽林次將源朝臣、光久公也、開山第六世住持臨阿弥陀佛也、久國此時補伊作之地頭職、與住持畠塚國老中、老中聞有 梅窓当家中興之功德、所寄附菜地三十石、追奉者爲住持人寺務、不可怠慢若怠慢、而采地永不爲其領用、則梅窓之功德放蕩、太守之所信其功德亦止矣、欽哉綿々延々至祝、至善至善至祝、

川上前因幡守

干貞、承應二年癸巳、四月廿貳日、藤原久國

道樂

伊作
西福寺

伊作西福寺者、梅窓様御菩提寺、日新様被成御建立、御知行五町餘被付置、文禄中石田治部少輔殿以下知等、被領勘落之節、此等領皆被相落候共、當年至六拾年依無縁之爲躰、當住持臨阿弥陀佛被致細談、公儀江遂訟訴之處、白銀三拾枚、因御助成其銀子を以、

浮所候知行高三拾石賣取候令寄附乎、向後代々任侶寺務、無宣疎様可存思慮肝要、時之國君 松平大隅守 光久様在國之御家老、島津

圖書頭殿・伊勢兵部少輔殿・寫津筑前守殿・北郷佐渡守殿・町田勘解由次官殿江・堀四郎左衛門尉殿御使を以相達、伊作當曖衆治田善左衛門尉・田部四郎左衛門尉・村田正左衛門尉具三令濱疏候、且又

西福寺御建立之高趣記、別楮二爲後證、遺置候、恐謹言、

承應二年癸巳四月廿二日、

川上因幡守

久國(花押)

伊作

西福寺

時宗御中

○王仁

此人、百濟國ヨリ初テ書物ヲ持來テ、日本ニ渡シタト云、

●黄備公

此人、入唐シテ歸り、初テ日本ノカタ假名ヲ作りテ、書物ヲ日本讀ニヨムコトヲ教タリ、是書物ニカナヲ付ルノ初ナリ、

嵯峨帝

此代、唐ノ初盛ノ比ニ當リ、日本ニモ天子ヲ初、公主方、公家衆、小野篁・藤原常嗣・云學者、盛ニ行レテ、詩ハ盛唐ノ風アリ、文ハ四六對ノ体多ク、學風ハ漢以未ノ訓詁風ト見ヘタリ、學文ノ道、行ニ於天子公卿之間ニタルハ、是時ヲ爲盛矣、

村上帝

管承相ナトノ時ニテ、詩文ノ格ヤ、衰ヘテ、晚唐白樂天ノ風にナレリ、然レトモ、未タ天子公卿ノ間ニ學文行レタリト見ヘタリ、

菅家江家

菅原家・大江家ヨリ、代々博士トナリテ、天子ノ傳讀ヲツトメ、ヲコトテナンナト云テ、別ニ讀法アリ、何レノ時ヨリ、初リタルコトヲ覺ヘス、然トモ後世モ此ニ家儒書ヲ司レルコト

ト見ヘタリ、公家ノ中ノ儒家ナリ、

鎌倉

足利

足利ノ時ニ至テ、天下大亂シ、武家ニハ學文ヲ禁シ、公家勢薄キ故、學文スル人モ多、學文ハタ、五山之僧徒ニ預置テ、異國ノ應答、文學ノ〔沙翁〕汰尽ク浮屠氏ノ物トナリテ、武家ノ人書ヲ讀ント思フモノハ、坊主ニナラネハ讀コトナラストカヤ、信長・太閤ノ時マテモ、未タ改ムルコト能ス、是日本學文衰微ノ極リナリ、

神祖

家康公ノ時、惺窩先生初テ起リ、程朱ノ道ヲ廣ム、京都ニテ朱注ヲ講セシカモ、管江ニ博士ヨリ咎メタト云コトアリ、然則日本ニテ能ク學ヲ弘メシハ惺窩ナリ、羅山先生是人ヲ師トシ、神祖ニツキ從ツテ天下平治シテ後、羅山ヲ旗本ニシテ、天下ノ儒宗公方家ノ記録所ト定メラル、至此ヲ學文ヤ稍々行レタリ、

春齊

春齊父、羅山ノ家業ヲ受繼テ、門弟ヲ多ク聚メ、學文次第二盛ヘタリ、初テ坊主ニナラネトモ、

上人好之則

憲廟自ラ學文ヲ好ミ、聖堂ヲ創立、自身ニ講釈ヲナサレシ故、御側廻リ残ラス聽聞ス、於此テ旗本ハ岡ク、大小各ミ至テ書ヲ懷ニセサルハ少シトカヤ、今ニ懷中本トテ、四書ナト小本アルハ、皆是時ノ事ナリ、上之人好之、則下ニ是ヨリ甚シキモノ有ナラヒニテ、江戸・京師・諸國ニ至ル迄、學者大儒紛々トシテ、多ク出タリ、日本ノ學憲廟ヨリ、文廟・徳廟三代ニ至テ申興ス、嵯峨ノ時ヨリモ、恐ハ盛ナラン、

○文廟ノ時ニ出テ、日本ノ事實ヲ多ク記シ、必シモ文章訓詁ヲ事トセス、專ラ天下ヲ治ルノ術ヲ務ム、文廟ヲ相クルノ白石間、タゞ三年朝鮮人ヲ退ケ、日本ノヲ貴クス、學文ヲ見在行ヒシ人ナリ、正亨ノ際是人ヲ第一トス、詩モ亦流暢、

○程朱ノ學ヲ專ニシ、篤美ヲ本トシ、詩アリ、文アリ、經義鳩巢ノ註アリ、程朱ノ學風ヲヨク受継タルハ此人ナラン、真ノ儒者ト謂ツベシ、其學風多トイヘトモ、此人ヲ第一トス、門人川口靜齋亦スクレタル人ナリ、

○水戸○黃門公好學、舜水二師トシ事ヘ、多ク學者ヲ引アリ、日本

史ヲ作リナトシテ、至今學文水戸ヲ盛ナリトス、専ラ程朱ヲ尊信アリ、

○程朱ノ篤行ヲミ得テ、文才・學才少キ故、後遂ニハ佛道闡齊ニ近クナレリ、至今マテ山崎流ト云テ、正直一扁ノ學者多シ、

○此時、三代正獻^{忠宣}生ノ時ニ當ル、憲廟聖堂ヲ立休家ニ預ラ家レシヨリ、門人至テ多ク、大小名モ聖堂ノ儒者ヲ請テ、或師トシ或ハ講釈等ヲ聞ク、故聖堂入塾ノ士多ク、村家ノ勢爲盛矣、怪科ノ文詩、和学ノ五科ヲ立ツ、
本ノマ

○於九州高名アリ、專當時ニ行フコトヲ務メ、大和俗訓・篤信農業全書^本ト云ヲ、俗人ノ尊ク爲ニカナ^音ノ著述多シ、學

德モ大疑錄ナト云テ、見識モ有ト見ヘタリ、

○備州ニ仕ヘ、白石先生ノ小カタト云ソヘシ、易地皆然ラン、了海大學或問ナト云テ、明ノ王陽明流ノ學文ヲ傳ヘタリ、其事跡亦^{忠宣}學文ヲ政事ヘ行ヒシハ、此人ナリ、

○京都ニテ、堀川聖人ト云レタ程ノ篤行ノ人也、宋儒ノ學仏

道ニ近シト見出シタハ、此人初ナリ、古義ト云ヲ論語ノ註

仁齋
ナトモ仕カヘ、論語ヲノミ聖人ノ旨ト見テハ、經ヲモ疑シ

人ナリ、潘々タル天下ニタ、ヒトリ、見識ヲカヘテ、別ニ
流ヲ立テスケレモノト云ベシ、京都今ニコノ風多シ、
ママ

○仁齊ノ跡ヨリ起テ、仁齊ノ^{唐食}二出、古學ト称シテ、專宋學

ヲニクミ、程朱ノ後前ノコト、學文ハ愚ドンニ、文ハ註

跋ノ如ク詩 理ニ落タルヲ、世ノ弊見ノ豪傑ト云フ^{オマテ}

徂来 教ヘ、人才ヲ育シ太宰・南郭ナト云弟子有テ、學流大ニ廣
カリ、程朱派・徂来派ト天下大ガタ二ツニ分レタリ、

憲廟ノ時ヨリ英雄起テ、

當時

憲廟ノ時ヨリ英雄起テ、各一流ヲ立テ、中ニモ徂来カ如

キ古今ニナキ説ヲ立テ、程朱ノ學流ヲソシル、是モ程朱

カ六朝漢ノツイヘラタメテヨケレ、後世アマリ馬鹿

正直ニナリタリ、故豪傑ト云テ、其弊ヲタムル爲メリ、

然トモ至只今テ、亦其ヘ出来テ放蕩ト云ニナレリ、

是學者ノ考ヘキ恥ナリ、色々分レタトモ、先ハ程ト

徂来派ノ二流カ盛ナリ、

程朱派 四子六經ヲ明メ、諸子百家ニ至リ、詩文出来要スルニ、

窮理實行ヲ以テシ、古今ヲ鑄錫シテ、今日ノ用ニ立、是ハ無以尚之、然トモ多ク徒ニ四書・小學・近思錄ノミヲタ実行ミミト云テ、文學ナキハ是又矯枉過直モノナリ、アマタ実行ミミト云テ、文學ナキハ是又矯枉過直モノナリ、

今ノ程朱派察之スルハ鮮矣、

○徂来派ト云ハ、四子五經ニクハシク、明ラメ新註・古

註ノ意ヲクミ分ケ、諸子百家ヲ讀テ古今ニ通シ、愚鈍

支離ノ學風ヲ改メント、豪傑ト云ヲ以テ教タト祈歎ニ

氣ヲ付テ、凡ソ經學ヨリシテ、文詩ニワタリ實行中ヨリ豪氣ヲ出スハ是無、以尚之然トモ多クハ實行ニ空ク、放蕩ニナク宋籍ハ知ラヌシテ、宋儒ヲ又ツタヒ歎リ、

文章ハ李王ノ竊盜モノニテ、人トナリ輕シク薄キ方ニナリ行ク害ヲ作コト、宋儒ヨリ人テ甚シ、今ノ徂來派^參マテ察之スルハ鮮矣、

又一ガイニ信スヘカラス、東都ニハ放蕩ノ風多ク、京都ニハ博雜ニシテ、無定見モノ多シ、諸家ノ説紛ミタルモ、各長キ所アリ、短キ所アリ、唯博ク古書ヲ読ミ、

知識ヲ傳フシ調詰ニ明ニシテ、而後其ノ見識ヲ定ムヘシ、必シモ一方ニ泥ムヘカラス、愚按ニ宋儒ノ实行窮理居敬ヲ主本トシテ、陽明ヲ聊カ治行、文才ヲ兼子ハ、

於学文可謂大成矣、大凡学者邊文辭者見識立ス、務見識者書籍ニ涉ラス、今也讀是學變者、專^シ見識^{シテ}而疏^シ書籍^{シテ}ヘカラス、是讀ニ有之^{ナシ}大戒^{シテ}也、見者熟察焉、

明治二十年、蘿陽士

向 章識

六月日 写ス、

末・秦・漢・漢儒・魏晋・宋・齊・梁・隨・唐・五季・宋・朱子・元・明・清、

司徒典案ヲ設テ、君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友

○堯舜

之道ヲ教フ、

堯ヨリ周公マテヲ、佐者七人ト云テ、上君相

「禹・湯・文武周公」

オイ道^{シテ}ノ位ヲ得テ、學文ノ道ヲ見、在天下ニ行ヒシ聖人ナリ、

設^{シテ}爲序學校^ヲ、天下邦国村里迄モ殘ル處ナク、學校所ヲ建置テ、八才ノ童子ヨリ教育スルコト也、其ノ

所レ教ハ灑掃應對ヨリ、誠意止心脩身治國平天下ノ道ヲ教フルナリ、今ノ大學ニ詳ナリ、是學文ハ今日ノ行ニナルコトニテ、紙上ノ論ノミニテハ、ナキコトナリ、

孔子
君相ノ位ヲ得テ、上ノ七聖人ノ如ク、見在天下ニ行フコトヲ得ザルニ因テ、聖人ノ道ノ小シバカリ残存テ、老人ノ覺ヘ人ノ書留ナトヲ取アツメ、初テ書物ヲ以テ教ニナサレタ、然トモ七十子ノ衆ノ問答、皆々國天下ヲ治メ、脩身治人ノ術ナリ、今ノ世マテモ学者孔子ヲ尊信スル事、上ノ七聖人ヨリモ過ルモノハ、其道絕ナントスル所ヲ初テ書留テ、萬代末マテ傳ヘ玉フハ、孔

六、自堯舜至清支那学派盛衰考

○自堯舜、至清支那学派盛衰考 向井源五左衛門選

堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子・七十子・孟子・荀子・周

子ナルヲ以テナリ、是以テ孔子ヲハ儒者ノ宗師ト立タルモノナリ、

七十子 孔門ノ弟子、スクレタル人七十二人、皆夫々持合ノ近キ處ヲ学ヒ得テ、或德行或ハ文学或ハ詩經ヲ傳ヘ、

或ハ易ヲ以テシ、或ハ書傳礼記皆、己レノノ得手ヲ以テ、又門人共ニ教ヘ導ク、是ヨリ聖人ノ道色々様々二分レテ、初テ小サクナリテ、儒者ト云者ノニナレリ、○先聖人ノ道ト違ヒタル宗派モ、段々ニ作レリ、

孟子—荀子 七十子モ死果テ、経學ノ道ヲ知レルモノ少シ、其上楊朱ノ墨翟ノト云、聖人ノ道ヲ見ソコナフタ學者多ク、世人ヲ惑ハシ、天下亂テ、聞學者ノミ世上ニ用イラレ、聖人ノ道絶ヘダヘニナリタル故、色々辨舌ヲ振テ、性善浩然夜氣ナトノ説ヲ立テ、聖人ノ道ヲ教ヒシ人ナリ、○此時老子派アリ、楊派アリ、墨子派アリ、色々種々ノ派アリテ、初テ諸子ト云者アリ、孟子ハ聖人トハ云ハレ、子共諸子ノ一番モノニテ、荀子次之、

周末 ○此時ハ天下右往左往ニ乱レテ、聖人ノ道色々ニ取チガイ、好辨ノ弊甚シク、徒ニ書物ノ上舌ノ端ニテ、口論スルコトヲ學者カ心得工、世上ノ風俗モ知ラス、徒口先ノミニテ、理窟ヲ云ヨウニナレリ、諸子百家紛々ト

シテ乱レリ、昔ノ高名ナル人ノ名ヲ偽リテ、書ヲ著ナドモアリ、

秦 ○秦始皇帝モ、大名ヲ功平ケテカラ、郡縣ニシテ儒者ノ色々先王ノ道ヲ引テ、当世ヲソシリ、埋窟ヲ云フヲ厭ヒキラヒ、儒ヲ坑ニ埋メ殺シ、儒書及百家ノ書ヲ焚キ捨タリ、○先聖ノ道至孔子書物ニナリ、至秦テ書物モ焚アル、天下クラヤミトナレリ、

漢 ○高祖馬虫 天下ヲトリ、叔孫通魯ノ詣生ヲ聚メテ、

君臣ノ禮ヲ制スレトモ、學文ノ道未タ大イニハ起ラス、文帝ノ代ニ校書ノ禁制ヲ免レ、書物ヲ求メ儒者ノ用ラル、是ニ於テ焚残リノ書、方々ヨリ出テ、伏生ナドト云坑ノコリノ老儒ナト出テ、儒者書物ソロク弄シ、世上ニ出来レリ、然トモ文景ノ間ニハ、老子ノ學ハヤリ、儒道未タ大イニハ起ラス、武帝ニ至テ一經ニ通スルモノハ、召出サレテ、官人ニナルコトニナッテ、人々再ヒ文字・記憶ヲ尊ヒ、行ヒハ次ニナレリ、○是記誦詞章ノ學ノ起リ焚アト故アリ、然ルヲ後世マテ改メサルハ過ナリ、ハア上ノ學文ハ、多クハ是時ノ風ヲ傳タリ、

○秦ノ焚迹ニテ、儒者モ書籍モ少ナキユヘ、文帝・武帝

「漢儒」

ト虫

儒者書籍ヲ求ラレケレハ、段々儒者カ出来テ、

詩ヲ傳ユルモ有、書ヲ誦スルモ有、書ヲ誦スルモ有、

戴氏ハ禮ヲ傳ヘナドシテ、儒者ハ博ク物ヲ知リ書籍ヲ多記シタルヲ第一ト覺ヘタリ、○其後劉向親子ナト出テ、多クノ書ヲアツメ考ヘテ、字ノチカイナヲ正ス

コト起リ、孔安國・馬融ナト出テ、書ノ註ヲスルコト

初リ、董仲舒カ如キ、三年庭ヲ窺ハス、書籍ヲ讀レドモ有司馬相如秋あき——ナトノ如ク、詩賦ヲ作リタルモアリ、○先ツ書物ニ註ヲスルコト、漢儒こうじゆ初レリ、是ヲ訓詁ノ學ト云、周公・孔子ノ意トハ大ニチカヘリ、是學文儒者ノ大変ナリ、○藝文志ニ儒者ハ、博問寡要ト云ヘルモ、是時ノ儒者ヲ云、○撫漢書テ見レハ、儒道ノ外ニハ九家ニモ、約ニ立モノアリト云ヘリ、

魏晉

○此時モ、帳擎力博物ホウモク力、集解ナドアリテ、漢儒ノ

学ト、格別ノ替リハナケレトモ、清言ト云モノハヤリテ、老莊ノ学風、虛無恬淡ナト、称シ、竹林ノ七賢ナト、出テ、学者モ多クソレニ化セラレ、詩賦飲酒ニ耽リ、放蕩ニ流タリ、是又學文ノ一変ナリ、至レ是ハ聖人ノ道ニ心カケタルモノ至テ少シ、

「宋齊梁隋」

○漢以未、詞章・記誦・訓詁ノ學ノツイヘ、大ニ流レテ天下ノ学者、タ、詩賦・文章ナドヲ、華ヤカニ作ルコトヲ專トシ、文章ハ四六對偶二作り、詩モ律ノヨウニ作カ、詩文ノ作大ニ替レリ、學文モ同ク華美ノミニナレリ、

唐

△至於唐テ頗ル中興ノ心持ニテ、十八學士ナト云テ、學者多クハ然トモ多クハ訓詁ノ派ニテ、初テ註疏ノ學起リテ、註ノ註ヲスルコト初レリ、○且詩文ヲ試テ勝レタルモノヲ、官人ニ引キアケ用イシ故、天下ノ學風タ、專詩ヲ貴フコトニナレリ、近体ノ詩作是盛ナリ、詩ヲ作得ザレバ、官職ヲ得ザル故ニ、學者皆詩ヲ作レリ、漢ノ世ハ記憶ヲ以テ官ヲ得、唐ノ世ハ著述ヲ以テ官ヲ得、舉業ノ學風隋唐ヨリモ盛ナリ、○韓愈退之、柳原學厚文章ノ格ヲ改、孔孟荀楊ホウヤウ公虫ヒ、頗ル學力アリ、○學者專ラ詩文ヲ務ルハ、此時ヨリ初レリ、是又一變ナリ、

五季

此五代ノ間、天下大亂治世長カラス、是故スクレタ人

物モ出未ス、学文タ、隋・唐ノ流弊ヲ受ケ、専ラウハ
ヘニ華美綺麗ヲ務テ、厚実ノ学風タヘテナシ、

宋

○此時、周茂叔氏初テ実学ヲ唱ヘテ、明道伊川繼之テ、
専ラ經義ヲ務、子思・孟子之学ヲ起シ、華美綺麗ヲ務
タル六朝五季ノ弊、記誦・訓詁ヲ專ニシタル漢儒ノ風、
至於此ニテ大變テ、篤行窮理ノ虫學トナレリ、

朱子

○程子ノ学風、朱ニ至テ大ニ全備シ、躬ニ行ヒ心ニ得ル
ノ実學益盛ニシテ、学者尽ク本性ニ立復リ、人欲ノ私
ヲ去テ窮理致知ノ外、華美綺麗ニ走クコトナキハ、朱
子ノ切ナリ、孟子以未千載之後老人ト云ベシ、○後世
議ニ朱子ノ学起レトモ、六朝漢秦浮華訓詁ノ弊ヲ取り
直シタルハ、誠ニ古今ノ一人ナリ、○四書ニ詩易等ノ
註ヲナシ、漢以未ノ諸説ヲ破リシヨリ、後世ノ学者朱
子ヲ捨置テ、聖人ヘノ古書ヲ議論スルコトノナラサル
ハ何、カレラ子供是ホトノ豪傑ハ、アルマイト云ヘシ、

元

○程朱ハ、豪傑名儒無類ナレトモ、其風次第ノ衰ヘ、
学文タ、カラ理窟ヲツヨク言フヲ貴ヒ、軍最中ニモ軍

○文章モ注疏ノヨウニナリ、詩モ理窟ニ落チ、學文モタ、
愚鈍ニナリ、マ、スグレモノ有リト云ヘトモ、救フ能
ハス、

明

△明ノ代ニナリテ、頗ル風義ヲ改メ、學文ニハ王陽明ト
云人ナト、程朱外ノ流義ヲ立、李獻吉ナト云人、詩文
ノ風ヲ取直シ、季平鱗・王元美ナトアマリ、思心鈍正
直スキタル學風ヲキラビ、頗ル魏晉ノ風ヲ雜ヘ、又學
風ヲ立替タリ、文ハ右ヲ貴ヒ、註疏ノ如キ体ヲ改メ、
詩毛盛唐ニ立帰リ、理窟ノ趣向ヲ取クヘタリ、至此學
風半ハ變シタリ、○唐韓退之對偶ノ文ヲ改テ違意トナ
リ、明李王注疏ノ文ヲ改テ、簡古トナス、晚唐末元以
来ノ詩詩モ改ム、故論詩者千鱗ヲ捨置コトアタ
ハス、

清

○此當分ノ天下ニテ、不レ當ニ委細サレトモ、ヤハリ明
代ノ風義ヲ受テ、色々ノトクアツタ書物ヲ作り、歷代
ノ詩文ナトヲ聚ナトスルコトハ、明ノ世ニ替コトカヤ、

種々草ゾウ紙類ノイタヅラ書物ナトモ、明清ノ間ニ多

ク出来タリト見ユ、至レ此学文ノ風博雜ト虫ヲナン

テモ、博ク知ルコトヲ貴フコト虫シリ、文詩モ挙業

ノ風ト云テ、別ニ一風ヲ立テ、是ヲ知ラネハ、官人ニ

ナラレス、学文ハ程朱ノ説ヨリ外ハ、時ノ禁制ニテス

ルコトナラストカヤ、○古今学文ノ變、大概如レ是物

ノ能キコトモ、久スレハ弊ガ出来ルモノ、其時孟子韓

退之朱子王陽李王ナトノ如キ、ワサト古人●ニチガ

フニハ●アラネ共、無レ撗改ルコト見ヘタリ、学者

ルコトナラストカヤ、○古今学文ノ變、大概如レ是物

案之、

日本學傳一卷、當時サシアタリ學者ノ行ベキ一卷、未タ出来ス、先

彼國ノ學變アラク覺タニ任せ、燈下ニ書記シ又、大ニ間違アラン、
看ル者勿、尤

向 章識ハ始メハ向井称「源五左エ門」、又滄浪トモ云、年十八ノ
時江戸昌平館ニ到リテ、遊學セシ人ナリ、

日本學傳一卷、當時サシアタリ學者ノ行ベキ一卷、未タ出来ス、先
彼國ノ學變アラク覺タニ任せ、燈下ニ書記シ又、大ニ間違アラン、
看ル者勿、尤

ニ聴聞セシメタリ、

平民ノ子弟教育方法

家塾・寺小屋ニテ修學セシメシメ、之ニシテ藩立學校へ、入學セ
シムルノ制ナシ、尤農民等學事ニ從事スルハ、自然意ニ任せテ、

七、旧鹿児島藩學制沿革取調要目

舊鹿児島藩學制沿革取調要目

造士館・演武館

旧 鹿児島藩學制沿革取調要目

藩内學事上ノ諸制度

藩主ノ布令別冊ノ如シ、而シテ學校ニ於テハ、學業上進ノ者別ニ、
加役米ハ無之モ、學生ノ内優等ノモノ、拾五名ヲ撰ヒ、四石ノ割
ヲ以テ稽古扶持ヲ與ヘ、又兒童生徒ノ内、幼少ニシテ父ヲ亡ヒ、
戸主トナリシ者ヲ童子ト稱シ、祿稅ヲ免除セシ法アリ、

士族・卒ノ子弟教育方法

藩立學校へハ必ス入学スヘキ制アルモ、督責等ノ設ナシ、又家塾
等ニテ修學スルハ元ヨリ、差許シアリタリ、又學業優等ノ者ヲ撰
ミ、藩費ヲ以テ遊學セシメ、又公費ヲ以テスルヲモ、學館ノ試験
ヲ経テ許可シタリ、凡ソ此遊學モ齊彬ノ代ヨリ、故ラニ開ケタリ、
然シテ學校ニ隔日四鐘後、四書ノ講義アリ、藩士ヲシテ生徒ト共

全々禁止セシ事ナシ、

家塾・寺子屋設置ノ制度

家塾・寺子屋ヲ開設スルハ、士民ノ自由ニ任ズ、

學校名稱

安永二年造士館ヲ設立シ、明治三年ニ至リ、名稱ヲ本學校ト改ム、

校舎所在ノ地名

薩摩國鹿児島郡、旧杵形内當今山下町ニシテ、移轉セシコトナシ、

沿革要略

安永二年、藩主島津重豪造士館ヲ創立シ、一二昌平學校ニ視ヒ、
法ヲ焉ニ取ル、訣玉儒學ヲ尊崇シ、當代ヨリ倍学事擴張セリ、而
後數十年ヲ経、學風衰頽ノ色アリ、爰ヲ以テ重豪ノ曾孫、齊彬封
ヲ襲テヨリ、大ヒニ其弊ヲ革メ、學風一變ス、此時ニ當リ藩内ノ
學事頗ル盛ナリ、而シテ明治三年造士館ヲ、本學校ト改稱シ、別
ニ小學校ヲ新置シ、和漢洋習字筆算ノ業ヲ授ク、然ルニ初メ造士
館ヲ創立スルノ時、之ニ盡カセシ教授、山本傳藏ナルモノアリト
雖トモ、行事小傳等ヲ詳カニセズ、

教則

教科用書ハ、孝經・小學・四書・五經ヨリ、其他和漢ノ史類及詩
文章ナリ、授業方法ハ凡ソ、四時ヨリ九時迄ヲ素讀トシ、九時ヨ
リ八時迄ヲ講義温習時間トス、然シテ講義ハ隔日ト定ム、授讀ノ

順次ハ大凡ソ大学・論語・孟子・中庸・小學・易・書經・詩經・
禮記・春秋トスト雖トモ、必ラス之ヲ確法トセス、講義ハ四書・
五經・令義解・左傳等トス、或ハ教員中或曰ヲ以テ、小學・四書
其他經傳等ヲ輪講スルアリ、

學科學規試験法及ヒ諸則

造士館ノ學科ハ、和漢學筆道ノニシテ、其廓内ニ医學院ヲ設置
シ、漢醫術ヲ學ハスシテ、又忠義ノ代ニ開成所ヲ設ケ、英學ヲ學
ハシム、又始メ重豪ノ代ニ造士館ト同シ、

演武館ヲ隣廓ニ設、弓馬・槍劍・柔術ヲ學ハシム、併シ文學ト武

術トノ程度、此例ノ如何ヲ期トスルコト、之ナシ、

入学退學ノ年齢凡八才ヨリ、二十一・二オヲ通常トス、

學事試験ハ春秋兩度之レヲ爲シ、生徒ハ四書・五經或ハ詩文章ヲ
講誦シ、教員ハ訣書等ヲ講義セシメ、家老以下諸役員臨席ス、
生徒賞品授與法不詳、

生徒訓條ハ元ヨリ、之アリタルモ、書類明治十年ノ兵燹ニ焼亡
シテ、詳ナラズ、

生徒罰則

惣員出校時間ハ、四ツ時ヨリ八ツ時迄ナリ、而テ教員一名學生一
名、五ツ時ヨリ出テ、開校ニ及ヒ、帰時迄ヲ指揮スル者ヲ朝出ス
ト云ヒ、退校後七ツ時迄残テ、火締リ及ヒ開校等ヲ指揮スル者ヲ

夕誥ト云フ、生徒ノ或ハ校則ヲ背キ、教示ニ従ハサル者ハ、惣員
退校後七ツ時迄留メテ、右夕誥ヨリ復讀ヲ爲サシム、之ヲ罰讀云
フ、罰則ハ只之レアル耳、

教員凡五十余名
書役
凡十名
門衛二名

生徒概數
寄宿生凡六十名
門學生不詳

但寄宿生ハ自費タリ

學校經費
藩主臨校

一周年ノ學費米學田、及金員等不詳、又學資ヲ藩士ニ賦課セシコ
トナシ、

入學許可ヲ得シ者ハ、着袴シテ、師家ヘ回禮ス、
職名及俸祿
職名及俸祿

寄宿生凡六十名
門學生不詳

但寄宿生ハ自費タリ

學校經費
藩主臨校

但シ、勤功ニ依リ用人格ヘ登用、且地頭職ヲ兼シム、然ル時ハ
祿モ又增加セリ、

聖廟ノ設置アリテ、春秋二月上丁ノ釋菜アリ、家老一名以下諸役人
ヲシテ、執行セシメ三家(藩主ノ親族)ノ者、藩主ノ代參ヲ勤ム、神官樂
ヲ奏シテ、其式実ニ盛大ナリ、

祭儀

臨時ニ臨校又ハ、臨時城内ニノ丸ヘ、教員生徒呼出シ、各應分ヲ
以テ文武試業セシコトアリ、

習書頭取全五石四斗
習書頭取全四石

書役助全四石六斗
書役助全四石

學制頒布前ニアリテ、

學頭一人
學監
小學頭
教官三等二分ツ
副教官二等二分ツ
授教四等二分ツ
俸祿員確証スベカラサルヲ以テ、之ヲ欠クモノナリ、

學校構造及ヒ建物圖面
學校ニテ出版翻刻セシ書籍目録、及藏書ノ種類部數
童蒙須知
芋山文集
月洲詩集
四書山崎點
五經全
孝經
職員概數

右、部數不詳

藏書ノ種類ハ、國書及十三經、廿一史詩文章雜書、大凡備ハラザルモノナシ、

一家柄ノ面々者、迫々重キ御役茂被仰付、御國改取扱モ被仰付事候得共、愚癡文盲ニテ者、不相濟事候付、右ノ面々以未幼少ヨリ、一統造士館ヘ入學混ト學問出精可有之、左候テ學校ノ儀者、別段之事候付、學問相進候向者、二男以下者、諸生同様学生ヨリ師員之勤モ可被仰付旨、

御沙汰被爲在、誠以難有御趣意之御事候條、被奉承知一統出精可有之候、此旨申渡向々ヘモ可致通達候、

豊後

一學問并蘭學爲稽古、他國ヘ被差出候面々、是追貳人賄料被下置候処、右被下方ニテハ、稽古方不行届由候付、別段之以思召、以未三人賄料被成下候旨、御沙汰被爲在候段申未候、此旨組中支配中ヘ中渡、諸郷・私領ヘモ不洩様可申渡候、

駿河

先達而被仰出置候通、向レ諸學問武術、近々差懸リ、御覗可被遊、右御次第、

一前々又者當朝、名差ヲ以何某ヘ罷出候様、御側役ヘ御沙汰可被遊候間、御用人御目付ヘ相達、早々向々ヘ可相達候、

但文武ノ儀ニ付テハ、縦令御目見以下之者ニテモ、修行ノ次第、且又業合百數者ハ被召出、相手被仰付儀モ可有之候間、兼テ其段文配頭ヨリ可申間置候、

一刻限ハ晝飯後罷出可申候、若又刻限相違ノ節ハ、其節々可相達候、一勤場差支候共、御用ノ儀ハ由ニテ、不罷出儀不相成候、警勤場同役ヘ次渡候而、是非罷出可申、表方御使者等ノ儀モ、同様同役ト繰替候而、可罷出候、

一病氣御届申上置、引入居候者ハ、其段可申出候、縦令不快又者痛耿等有之、押々ナカラモ、日勤イタシ居候者ハ、渋谷御屋敷迄ハ罷出、其段御届可申上候、尤御暇不被仰付内ハ、相詰可罷在候、但、學問試業之節ハ、御記録奉行并重野厚之亟、可罷出候、其外堀仲右工門・上原源之亟之内、一人ヅ、可罷出候、

一御流儀之調練、又ハ武器組合七調練被仰付儀モ、可有之其節ハ、流儀之無差別打込、相勤候様、兼テ心得可罷在候、

一弓馬小筒之儀、是又諸流打込可被仰付候、且又直心影流ノ儀、師範區々ニ候得共、都テ打込ニ可被仰付候、其外濱川・海老原・堤三家之儀モ、同様可心得候、尤業合之儀ハ、罷出候人數ニ應シ、其節々可被仰付候、

一馬術之節ハ、御厩ヨリ御立馬之内、三疋稽古馬、十疋御軍馬方ヨリ五疋ツ、可差出、御召馬乗御馬乗ノ内、老人ツ、付添可罷出候、

但、當朝歟又ハ前日、御小納戸ヨリ御馬預ヘ、可申越候、

一名差ニテ罷出候上ハ、文武之内不得手之儀有之、御断申上候共、

諸事相濟述ハ、可相詰候、

一着服ノ儀ハ平日ノ服ニテ罷出、稽古ノ節ハ銘々流儀之服、勝手次

第可相用候、

一夕刻ニ及ヒ候ハ、軽キ御賄又ハ、蕎麥切等可被下候、御酒ハ一

切被下間數候、

一罷出候節ハ、御目付ヘ届可申出候、

一御覗場所ノ儀ハ、御側役ヘ得差圖、差引等之儀ハ、御側目付自付

可申談候、

一御覗之節、御側役一人、御小納戸御側目付、御目付奥醫師、奥御茶道一人ツゞ、前以相請居可申候、其外御供ニテ可差越候學問武術、被遣御覗候御次第書、別紙之通被仰付、一統奉承知候様、可申渡旨御沙汰候事、

一御領國中、御改務之儀付、御別紙ノ通細々、
御筆ヲ以被仰出、何共奉恐入事ニ候様、一統謹テ奉承知候、右ニ付テハ被仰出之通、緩急ニハ成安ク、段々不行儀之事共、聞召通無申譯モ、次第二候間、一統猶又誠実ニ心掛、只管差マリ致精勤、學問武藝ハ勿論、質素節儉屹ト御越意相貢キ、涯々其詮相立候様可心掛、此旨支配下々役等ヘモ、可申合候、

下總

筑後
伯耆

石見

駿河

伊織

一領國中政務ニ付テハ、宰相様御家督中、多年被遊御配慮、殊ニ改革且海岸手當同等、譯テ御規定被遊置、諸役場モ差ハマリ精勤

イタシ、追々質素之向ニ候処、兎角程過候得者、緩怠相成華美驕奢ニハ趣安スク、段々不行儀之事モ有之、無益ノ酒會ハ勿論、賄等數進物等モ有之、且士道取失候處業モ有之哉ニ、相聞得甚歎カシキ事ニ候、當時者異國船モ、諸所ヘ渡来、從公邊モ譯テ文武之御沙汰モ有之士風御振興之事ニ候得共、一統奉得其意ヲ、

末々迄モ質素節儉相用、其程ニシタカヒ身分勵候様トノ趣ハ、毎度申渡置候所、今以段々心得違之儀モ有之、甚不可然事候間、各初役場末々迄誠實ニ心掛、屹ト致精勤、就中勝手方其外町人等致支配候向者、譯而廉直ニ可相嗜、又大目附始、目附役之儀ハ、

無親疎善惡之事実、令見聞筋々遂吟味、賞罰明白ニ不行届候テハ、不叶儀ニ候得者、至テ重キ役職ニ付、銘々身分令謹慎、脇々誹謗不受様可心掛候、其外諸役場職分ヲ盡シ、支配之面々モ應身分、正道ニ相勵ミ候様申諭、就中町家ノ者共賣利ニ迷ヒ、不相當之願意モ可有之哉ニ候間、支配之面々屹ト等閑之儀無之様、可心掛旨譯而可申渡候、

右之趣意各始諸役場、深ク汲受、聊無等閑申談、未春下国ノ

上、急度其詮相見得候様、可心掛候、以上、

可申出候、

右ノ者共ヘ、今般書籍賣支配被仰付候付、持合之書籍相当之代料ヲ以無差支、猶亦手廣ニ賣渡候様可致候、左候テ諸士等之内、是追之書物類致熟覽、用辨之後ハ、先々不用之品モ、可有之候ニ付、右両人方ヘ差遣、相當之直引ヲ以テ、當用之書物引替候欵、又ハ代銀相請取、於他所懇望之書物買入候義、少モ不苦候、其段支配人共ヘ兼テ申付置、彼是難渋ケ間敷儀、不申立様申付候、

一御用之節々、右支配人御納戸ヘ呼出、写本其外被仰付候儀モ、可有之候、

一写本之内、要用之書物ハ、勝手次第兼テ寫本可致置候、

一御藏板四書五経、是追御納戸奉行取扱ニテ、諸向ヘ申受被仰付來リ候得共、以來右両人ヘ兼テ相下置、懇望之者ヘハ、勝手次第可爲賣渡候、左候テ両人申受等之儀ハ、是追之通ニ而、支配人ヨリ賣出候節ハ、

四書一部 代錢九百貳拾四文

五經一部

七拾貳文

右之通ニ而賣出、其外四書五経ニ而モ、三冊ツ、懇望之者ヘ者、

右之直賦ヲ以、無滞可賣渡候、尤代錢右御定通、一切致增減間數候、且又末々之者、萬一代錢相滞候儀モ有候ハ、名前御納戸ヘ

一困窮之者共懇望之書物、買入候儀、不相整者ヘハ、古本之内一冊ニ付一ヶ月何程ト申、輕キ見料ヲ以無滞貸借イタシ、三十日限ニ可差返候、萬ニ右日限相過不首尾之者モ候ハ、名前御納戸ヘ可申出候、

一兼テ不見馴古本又ハ写本之類書、店共買入候ハ、其段御納戸ヘ可申出候、右之通被仰付候付而ハ、御納戸奉行并御記録奉行、造士館御役々茂掛被仰付候ニ付、御國中之者共、手廣ニ書見相整候様被仰付候、此旨向々ヘ不洩様致通達、諸郷私領ヘ茂可申渡候、

安政四巳六月廿七日

伯耆

一集成館

右磯御茶屋御園内ヘ、御取建相成候、反財爐高窯、其外致製作等候場所、惣名ヲ右之通相唱候様被仰付候条、此旨向々ヘモ可致通達候、

但、右製作方ヘ被掛置候面々、反財爐掛杯ト其場所ヲ差候テ、被仰付候得共、以未ハ集成館掛ト相唱、諸書付等ニモ其通相認候様、被仰付候、

豊後

駿河

御書取

一名分不正者、政務第一ノ大害ニ候旨、経書等ニモ相見得、通鑑書

出シニモ第一周室ニテ、名分ヲ乱シタルヲ歎キ、記始タル哉ニ相
見得、名分ノ義ハ不容易事ニテ、過去ノ儀ハ致方モ無之候得共、
以末士商ノ差別ハ格別ニ有度、其上當時 公邊士道ノ儀、分テ被
仰出候御時節ニ候間、是迄ノ仕来相改、名分ヲ正シ度事ト被存候、
右ニ付此度町人両人身分沙汰ノ儀、吟味申出趣尤ニ候得共、年数
格別ニモ無之、其上前文之趣意有之候間、町年寄格申付、米錢等
ノ物爲慶美遣シ、勤功賞美イタシ候テハ如何可有之哉、左候而以
未急度名分ヲ正シ度候間、勤功有之節、是迄格式上リノ伺者相止
メ、慶美又者三町年寄上席迄之格式ニ、階級ヲ立伺候方、可然哉
ニ存申候、右之赴ヲ以新規ノ事ニテハ候得共、公辺ニ於テハ如
何様勤功候者モ、町年寄上席ヨリ上ニ、町人ノ身分御引上被仰付
候例モ無之、且ハ名ハ器ト可不以假人旨、聖語ニモ有之候間、右
様名分ヲ正シ候ハ、以末士氣振興之一助ニモ可相成哉、昔ヨリ亂
世ニモ金銀ヲ以テ、身分立身ノ儀多有之候得共、聖代無事ノ御代
ニハ先無之様ニ被存候間、所存ノ趣相談旁申達候條、同列中厚及
評儀以末治定有之度存候事、

九月

中ノ吟味ニハ相違モ可有之候得共、基ヒ稽古修行ノタメニ、他国
へ出候事故、學問ノ工拙ノ吟味ヨリ、學問未熟ニ候共、弥真実ニ
修行イタシ候钦、又ハ当坐困究凌ノ爲メ、願出候钦ト申處ノ人撰
ノ儀、第一ト存候間、心得違無之様可致吟味旨ヲモ、教授初ヘ可
申達候、折衷學并水戸學風ニ不立入様、申付候哉ニモ相聞江候、
此儀不可然、他國修行イタシ候上ハ、何學風ニテモ立入候テ、其
上弥朱子道徳之學風モ、相分候事カト存候、何學ニテモ名義正キ
コソ學問ノ本意ト存候、詩文章達者ニ候共、今日ノ道理ニ闇ク候
テハ、修行ノ詮無之、一生俗儒ノ唱難免事ト存候間、心得違無之
様、修行志ノ者ヘ申立候様可致旨、

御書取ヲ以被 仰出、乍恐御尤之御事候條、以采 御趣意ノ程深
奉汲受、手厚吟味行届候様可取計候、此旨教授ヘ申渡、向々ヘモ
不洩様可申渡候、

駿河

-49-

一近年從 公邊士學問武藝第一心掛、質素節儉相守候様トノ趣ハ、
追々被 仰出候付、諸士一同文武ノ修行、猶又厚心掛候様可申渡
候、

一江戸其外ヘ學問爲稽古罷出度向ハ、造士館ヘ相付願出候様、被仰
付置候付、以來近モ其通ニ而、教授受持吟味行届候様、被仰付候、
尤是造士館之學風計ノ吟味候而ハ、造士館ヘ出席無之者ハ、館

一當春ヨリ諸役人ハ勿論、馬廻・新番・横目・中小姓諸坐書役、惣
テ諸鄉士・與力等迄追々名サシニテ呼出シ、旧冬調置候武藝ハ勿
論、學問手跡等迄相試候様モ、可有之候間、其段兼テ不洩様、可

申渡置候、尤當日不意ニ相達候儀モ、可有之候條、至其節外勤又者遊歩等ノ外出中立不參、及每度候ハ、急度吟味可申付候間、兼テ其段モ申達置候様可致候、且又已下ノ者ノ内、平常心掛亘敷文武練達ノ者モ、可有之候間、兼テ支配頭致吟味道、名前等相尋候ハ、可申聞候、以上、

一學問并蘭學爲稽古、致出府度者ハ、筋々へ相付可願出旨、去年九月申渡置候通ニ候間、懇望ノ者ハ願書取揃可被申出旨、向々支配頃ヘ申渡、諸鄉私領ヘモ不洩様、早々可申渡事、

造士館・演武館者、

大信公御代、厚尊盧ヲ以テ、御造立之處、其後何トナク致衰微候付、此節改テ掛リ申付候條、是述ノ惡弊ヲ改メ、造士ノ文字ニ相叶候様可執計候、

一演武館之儀モ同様ニ相心得、修練之精粗平常ノ心懸等、微細ニ検察無油斷可令沙汰候、

一學問ノ標的ハ、修身齊家治國平天下ノ道理ヲ研究シ、本末先後ヲ知別イタシ、然而當時ノ政務奉行候而モ、能其任ニ堪候様ニ心懸、專要ノ事ニ候、文章詩作モ、儒者學問中一端ノ科業ニテ、稽古尤ニ候得共、專造士ノ法相立、正學ノ風奮起候様ニ、學術吟味可然事ニ候、

一第一、三綱五常ノ本領ヲ守リ、義理ヲ明ニシ、名分ヲ正シ、各祖

宗ヲ敬崇ヒ、生國ノ爲ニ道ヲ開キ候儀、天理自然ノ本意ニ候処、當時儒者ト唱候中ニハ、我皇朝ヲモ夷狄同様ニ心得違、古典ハ勿論律令格式、マタハ六國史以下ニ至リ候テモ、不辨別ノ者モ有之候半软、然ハ孔子ノ道ニモ不協第一、

天照皇太神ノ御明慮モ可畏儀ニテ、右等ノ処ニ全深ク心得、分學風令振起追々、國用ニ相立候様、宜有工夫義專要ニ候、

一古昔聖賢ノ言行ヲ以テ一身ヲ正シ、扱今日ノ世上ニ引競、時勢相應ノ政務ヲ執行候基本ヲ、修行シテコソ、誠ノ學問ト存候、イカホト博學多才ニ候共、今日ノ行ヒ士道ニ背キ候テハ、修行ノ詮無之候間、館中ノ役者能々心ヲ潜メ、深ク致勘考、和漢ノ經史ニ涉リ、名義ヲ明辨イタシ、興廢治亂ノ本源ヲ研究シ、造士ノ道相立、國家ノ良臣追々出来候様、致教導候事、緊要ト存候條、教授以下諸役ヘモ厚ク可含候、且又讀書候テモ、意味取違候得者、雲泥ノ相違タルヘキナレハ、經書ハ勿論、小學・近思錄・大學・中庸ノ或問、又ハ論語精義語類文書ニ、程全書測源錄等ニイタルマテ、熟覽ノ上、今日ノ實行ニ相応ノ処修行第一ト存候、

一儒官相勤候モノハ格別、其外ノ面々ハ、詩文章等不得手ニ候トモ、今日政事ノ一助ニ相成候様ニ心懸、爲致修行候儀、肝要ト存候、當時ノ學者ト唱候モノハ、今日ノ世事ニ疎ク、經濟ノ道ヲモ捨置、沙門同様制外ノ様ニ心得候モ、間々有之候、全ク學問ノ趣意取違

候故ト被存候、古今ノ賢相智將イツレ王明ニ、

皇国之大道ヲ辨ヘ、漢土經傳ノ旨趣ニ達貫通イタシ、國家ニ力ヲ盡候事蹟ハ、典籍ニ歴然タリ、然ハ名分ニ暗ク、道理ニ明ナラス候テハ、何事モ難整事ニ候、惣シテ時勢ヲ考候事第一ニテ、井田ノ法ハ西土三代ノ良法ナレドモ、宋朝ニテハ難行、朱子モ時ト位ヲ考、社倉ノ良法モ發明有之候如ク、時勢當然ノ位ヲ量リ候儀、學問無之候テハ、道理相應ノ處置ハ、難計事ト存候、仮令和漢ノ經傳ヲ、譜讀詩文章等通達候共、道義ニ暗ク時勢ニ達ス候テハ、実ニ無用ノ腐儒タルノ間、右様ノ處上下一同厚ク心得候様可申達候、

一古今家國ノ政務ニ致関係候者ハ、須臾モ捨置カタキ學問ニ候廻、士分以上不致學問者多候故、義理ニ昏ク正心修身ノ實行無之、利欲不當ノ行ヒ干有之故、家政向モ乱レ、士風モ正シカラズ、役職相勤候者共ニモ、夫々仕向ノ條理ニ暗ク、緩急輕重ノ時務ニ疏ク、各分義理ノ筋合ヲモ不辨様子モ、相見得候、是等ノ儀者各格式モ可耻事ニ候間、一同公務ノヒマヲ考、修行有之候様可申達候、

一正學ヲ講明イタシ、物理ヲ明ニシテ候儀者、惣テ人倫ニ基キ、日用實行ノ爲ニテ、仮令數萬卷ヲ記誦シ、詩文章達者ニ候共、實行ナクテハ其詮モ無之、

日新公いろは御詠歌ノ御意味ニモ、相違奉恐入次第二テ、其書ヲ

讀タル达ニテ、實行薄ク郷里ニ居テ、子弟ノ師ト可仰、德行無之

役儀申付候テモ、利欲ニ心ヲ配リ、當坐ノ利得ヲ考ヘ、萬代不朽ノ良法ニ暗ク、更ニ仁義ヲ本トシテ、時務ヲ施候者有少ク、甚以テ嘆敷事ニ存候畢、意全ク無学ノ上、タマ々讀書ノ者有之候テモ、道儀ノ學問イタサズ、徒ニ過候故ト存候間、以未學術致ニ新、義理ノ取舍ヲ決シ、俗學ノ舊弊ヲ致改正度事ト存候、天下二、
天下二、
天下二、

一天下ニ學授ノ設有之候ハ、全ク人道ヲ修治スル爲ニテ、ママ不可闕者勿論ノ事ニ候、然ハ五常ノ本原ニヨリ、五倫ノ定分ヲ歸ミ、文德ヲ修メ武備ヲ治ル事ニテ、理義ヲ明ラメ心術ヲ研キ、兵法武術ノ藝事ヲ勉強シテ、治亂ノ政務ニ通達スルコト等、惣テ是人道中ノ要務ト存候、孫子ニモ彼ヲ知リ己ヲ知ル者、百戰シテ不殆ド相見得候、左候得者和漢ノ書籍ノミナラズ、當時外夷防禦第一ノ時節ニ候得者、夷狄ノ情態ヲモ能致識別、彼ノ長ヲ取テ我ノ短ヲ補ヒ、上下一同心ヲ合セ、本朝ノ威武ヲ擴充シ、四夷制御ノ事、當時

武夫ノ急務ト存候間、餘カニハ西洋和解ノ諸書モ熟覽シ、外夷ノ風俗器械ヲモ致辨別、我羽翼トナシテ、益皇化萬國ニ行亘リ候様、心懸肝要ニ存候、

一中ニモ大身ノ面々成童入學ノ期ニイタリ、適造士館へ出席候共、學局ノ賞勵ハ自然ノ理ニテ、切磋ノ切十分ニ者調兼候道理、且ハ國中ノ者ノ學友ニテハ、井中ノ蛙ニヒトシク候、往々重職ヲモ授

ケ、公私ノ大事可委任者共ニ候處、切磋ノ功乏數候而ハ、臨機應變ノ処置等ハ申ニ及ハス、公界向ノ禮式ヨリ始メ、國々ノ形勢人情世態ニウトク、井蛙ノ見識ニテハ、心得違ノ儀モ可有之歟、既

二、

公邊拜禮等ノ節、不都合ノ振舞モ有之、他国ノ人ニ對シ、頑愚ノ應答ナキ當國ニ限ラス、他藩重役ノ内、間々及見聞候モ有之候、然者文武ノ修行ヲ専要トシテ、物事疏カラン様、心掛度存候、隣境肥後・肥前等ハ、一門支族ノ家嫡等、家来両三人召連、平士巡歷ノ姿ニ而、隨意ニ文武修行ノヨシニ候、是等ハ輕々敷様ニモ候得共、國家ヲ大事ニ考得候者、至極ノ良法ニ候、大身ノ面々ハ父母ノ姑息ヲ離レ、家中諸士ノ阿諛ヲマヌカレ、卑賤ノ辛苦ヲ識得テ、各國ノ事情ニ達シ候良法ト存候間、以未志有之人々、家嫡ニテモ無役ノ内、他国修行両三年、願出候様申付度事ト存候、殊ニ昨年寄相様ヨリモ、寄合以上ノ面々ハ、別テ學問第一ト被仰出候事故、家柄ノ面々一派志ヲ勵シ、各父祖ノ命名ヲ穢サル様、普ク文武ヲ練習シ、又ハ諸士ノ亀鑑ニモ相成、宰相様尊慮ヲモ、安シ奉リ候様心掛專要ノ事ニ存候、右ノ條々以書面改テ、急度申付候間、後半ニ至ルマデ心得違無之様、館中役人ハ勿論、諸士一同ヘ可申渡候、家語日改之不中君ノ患也、令之不行臣之罪也ト、相見得候條、能々可申付候、

八、造士館・演武館

造士館・演武館之事

大信院様厚以思召被召建置得共、何分心掛薄處ヨリ、御用立候人柄相少候ニ付、厚可心掛、右ニ付學問之大脉、且武道心得之儀共、御別紙之通細々、

御筆御書取ヲ以被、仰出、誠以恐入難有、御趣意ニ候條、一統謹テ奉承知被

仰出之通、學問武道相勵ミ、往々御用立候様、心掛可奉安尊慮候、

右之通、組中ヘ可被申渡候、

十月 下総 伯耆 登
□ 駿河 伊織
(不明)

御書取

農者國ノ根本ニ候間、百姓不及困窮、追々戸口相増候様、掛ノ人

ミ日夜心掛、末々達行届勧農ノ文字ニ相叶候様、可吟味事、

但、取箇夫役打起収納ノ時節、其外ノ雜事達、入念上下共辨利

相成候様、可取計事、

一緒方之儀、諸郷出旅前致齋詞候趣意ニ基キ、奉公正路ニ心掛候ハ

勿論ニテ、無證文ニテ出郷ノ者、邪魔ニ相成人柄、貳役々邪正榮
勞等ノ事心掛、及見聞貨財ヲ貪リ、酒色ニ耽リ富家ニ近寄、貧賤
ヲ遠ケ候類ノ儀無之、勸善懲惡ヲ昼夜心掛、貳ノ痛ミニ不相成様
回勤イタス可キ旨、可申達候、

但

緒方ニ不限、寺社方・山奉行・郡奉行、其外諸役々ニモ全様
相心掛、華美ノ振舞無之様、可申渡候、

一諸上風俗并文武之道修行之事

諸士風俗不宜時ハ、一國之風俗乱候基ヒ候間、先達子申達候通、

弥不作法之恥業無之、武士道相守り、文武之諸藝無懈怠可致修行

旨、諸頭之面々ヨリ可申達候、諸郷之儀程遠之場所多候間、地頭
ヨリ郷士年寄等ハ、急度相守候様可申渡候、

但、諸頭役之面々茂、文武之両道無懈怠心掛候儀、第一ニ候、

自身怠候テ、支配ハ何程申渡候共、難行ハ當然ニ候間、此

段能々相心得、風俗立直リ文武両道共、眞實之修行ニ相成

候様、可取計事、

一孝子并平日心掛且敷モノヲ、引立遣シ、鳏寡孤獨長病等ノ面々ヲ

心付、救助取計遣候義、第一風俗立直リ候根本ト存シ候間、末々

達心付ケ候様、可申付事、

一音信贈答之事

音信贈答ハ禮節之事故、分限ニ應シ軽キ品贈答ハ當然之事ナカラ、
往年之習風ニテ、間ニハ内意等申込候節、過分之贈品モ有之、其
内ニハ賄賂カマシキ致進物候向モ、有之哉ニ相聞得候、此儀第一
風俗乱シ立利欲ニ赴キ候媒ニ候間、急度立直リ候様可取計、各中
始折角差送候ヲ、押返シ候義ハ、義理合ニテ難致筈ニ候間、以後
急度無用之進物無之様、表向諸向ヘ可申達、別テ町人等之町人(重リカ)等
之進物之儀、急度不相成段、可申渡候事、

但、進物等ニテ、推崇之儀者無之事ナカラ、末々心得違候テハ
不宜候間、急度可申達候、

一家宅營作屋敷取廣メ等之事

一衣服之事

八月

豐後 多門 石見

先比申達候通、彌堅固ニ可相守旨可申渡事、

一軍役之事

鹿児島藩、造士館

近江 伊織

武士第一可心掛事候間、音信等節儉相用置、非常之節糧食ヲ始メ、
万事不差支様用意第一心得候様可申渡、且又海岸防禦調練等之儀

モ、折角心掛け届候様每々可申渡候、

一米價之事

教授 黒田嘉右工門

上達
秋水ト号ス、赤崎

務、御側役ニテ兼

教授 橋口権藏

居政新庵、同校筆者ニ出ツ、

四書講義、様ミ出来ル

教授 松元仙藏

居所西田、佳ノ人ノ由也、

教授 黒田嘉衛

講解至テ上手ノ由也、

教授 市来源右工門

詩文良ス、

教授 山田十助

山崎學者ニテ、筆記中ノ筆記

教授 山之内作次郎

学者也、詩文ハ不得手也、タダカシヒ解ヲスル人

教授 得能彦左衛門

岩川、山口與一郎ヲ慕ヒ、山崎學ヲ主トス、

教授 平川喜兵衛

墨記學者也、漢文ハ下手也、

學頭 横山安之丞

四書・小學・近思錄講釈上手也、

學頭 岩川喜兵衛

五經ハ書經・詩経・易傳・大略講ス、

官内正之丞

重野孝之丞

後安

譯ト云、

児玉源之丞

海江田彦之丞

今藤新左衛門

後安

ト云、

城下ヨリ諸郷末々迄、格別高下無之、上下共通用旨敷入念候テ、
毎々聞紀無抜目様、可申渡候、

右之條々申達候間、篤卜及吟味、諸郷末々迄不洩様申渡、來年帰
國迄ニ詮立候様、取計專一二候事、

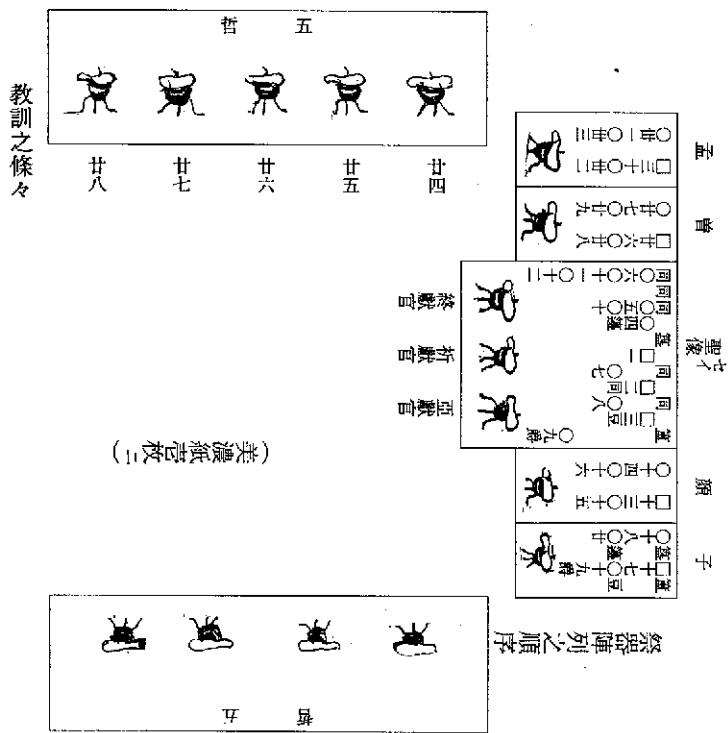
一勤農方并諸郷旅勤、其外風俗等之儀ニ付、御別紙之通諸事、旧弊
相守改候様、

御書取之御趣意相守、一統習俗相改來春御下国迄ニ者、其廉屹ト
相立候様、分テ可申渡旨被仰出候、

右之通段々被仰出候御深慮之趣、誠ニモツテ難有奉恐入次
第二候條、一統謹テ奉承知、於諸向茂万端掛心頭厚、御趣意
之御旨相守、来春御下國迄ニ者、屹ト其廉相見得候様、可

心掛候、末々迄茂不洩様手堅可被申渡旨、向々ヘ致通達、諸
郷私領江茂可申渡候、

今藤勇助 後勇
 久保田新次郎 卜云、
 町田次郎四郎 後好那
 山野半助
 榊六郎
 同 藤次郎
 篠崎甚七
 稲田郷衛門
 西田弥四郎
 高峰藤太 能高
 上云、
 伊知地宗之丞
 五代競太 後德
 夫卜云、



教訓之條々

- 一爲國之守護爲一郡之主行國政、撫育士民事不知文武之道難成、文武八車之兩輪、鳥之兩翼不可欠一事、
- 一志八諸道之根本也、大本不立則萬事不遂、故二先志可堅固事、
- 一玩物則喪志是聖人之格言也、況於專遊興而好勝負事、佚樂而耽酒色乎、此等之事曾テ不可爲之事、
- 一忠孝愛敬八、人性ノ自然順之、則榮ノ逆ノ則亡慎、以可順其性事、

一雖一日不可空過少壯、而不學老大、而雖悔不可有其益事、

鳴津又八郎殿

一能ム諫則必爲良將三略有之、將能愛諫能採言云云、實能可思之事、

一大玄君ハ、二十代ノ太守薩摩守綱貴公ノコト、

一以臣知其君、以友察其人故不知臣下ノ善惡、則之日暗將然レバ、

御袖判
條々

先ツ能ク辨近臣之邪正、而正直之者、當之邪曲之者教之、而帰正逆是君師之逆也、如此則阿隨僥奸之レ謀哉、能之心掛肝要ノ事、

右條數ハ少クシテ、詞雖短其義ハ則廣遠也、平生是ヲ身邊ニ置

テ讀之可味之、惡シク心得事新數様ニ引受テハ、却テ忠言逆耳、

良藥苦口能之得心シテ、可有信用、其方年十六才、已ニ去年元

服シテ益成長、並ミノ心掛ニテハ、却テ諸人ノ笑ヲ招キ、先祖

ヲ耻シムルノ基也、武門ニ於テ不珍事ト雖、朝夕讀四書五經、

而通其義弓馬武藝ノ儀ハ勿論、能ク軍法ヲ學習シ、或ハ手跡ナド

モ拙ナカラズ書キ嗜シ、賦詩和歌彈琴ハ風流之事、皆以テ左文右

武ノ業ニシテ、モ欠ル時ハ車ノ一輪ヲ折リ、鳥ノ一翼ヲ折レル

ニヒトシ、光陰如矢時不待人、可勤学者今年生ルヤ、相構ヘテ徒

ニ日ヲ送ル事有ル可カラズ、其方事此記シ置ク條數ノ旨ヲ、專ニ

相守リ、文武文武ノ逆ヲ学ヒ、令名ヲ後代ニ可残、志ヲ能之決定

シテ、愛親敬兄ノ義ヲ忘レサル、則是忠孝ノ道中、武將ノ魁ナルベシ、敢テ不可有油斷、仍テ教訓之状如件、

元禄十五年六月廿五日

大玄君御名

(宝永三年ノ太守、廿一代吉貴公)

宝永三年四月朔日

一平日學文武藝ヲ相嗜、親子兄弟其外類中ニ陸シク、傍輩中之交無表裏、萬端風俗ヲ不乱、正道ニ相勸武具・馬具等ノ儀、其實用ニ基キ分限相應ニ可調置、見分辻ヲ存シ、異様ノ道具、又ハ不應分限、結構ノ道具謂間敷候、轟相ニ有之候テモ、不事欠事ヲ專ラ相考、可致置其用意事、

一親子兄弟ノ睦朋友ノ交止、禮法不可紛風俗、就中若キ者共、學問武藝俄ニ修練難成事候間、別テ心掛可相嗜之、其身難正敷行跡、能キ者ハ奉公ノ品、能可召仕之連之、我儘ニ生立士ニ不似合、月代衣類等異様ノ爲躰ニテ、大勢列立、或ハ路次門頭ニ寄化リ、非法ノ狼籍等ヲ働く、仕置ノ妨ニ成儀、甚以不可然、稠敷令制禁之事、喧嘩口論堅ク所令停止也、萬一不意ノ儀ニテ、及爭論候トモ、隋分致堪忍短慮ノ効、無之様致覺悟、道理於有之ハ可遂披露、理不盡ニ事ヲ敗ルニ於テハ、沙汰ノ上加成敗可設所帶、勿論双方荷擔ノ人ハ、可爲本人同罪事、

近年士之風儀惡敷、耽利欲候者共有之由、相聞得甚以可然候、末々

ノ者適モ、邪成心底無之様ニ、可相嗜候、

明和六年丑十月朔日

左中

右京

別紙ノ通被仰出候条、不致忘却可相守候、此旨與中支配中、諸

外城ヘ可被申渡冒、地頭領主與頭支配頭ヘ可申渡候、

延享四年卯十二月

左衛門

主計

右平太

轉

典膳

安永二年巳三月

左京

右ノ通、表方御役人限、致通達御側方御勝手方ヘハ、寫ヲ以テ可相達候、

今度聖堂・講堂其外諸稽古場适モ被召建候、此儀ハ諸人學問藝術一涯改テ相勵、出精仕猶以往々御用相立、風俗モ正敷方ニ相成候様被思召上事、畢竟御領國中爲教學、右ノ通御造立被仰付、思召ニ候間、難有承知可仕候、

明和六年ノ太守、廿五代重豪公

伊織

弓・鍊炮稽古ニ、賭勝負ヲ企候儀共有之由、被聞召上甚以如何之儀ニ候、右通ニテハ、稽古ノ本意ヲ背キ、自然ト風俗モ不宜方ニ成行、不可然事候条、向後賭勝負無用可仕様、勿論稽古方ノ儀ハ、專相心掛致出精美儀、不取失様被思召上候、

右ノ通御家老・若年寄・大目附召出、御賢慮ヲ以テ、御直ニ

難有爲仰出御事候間、謹テ奉承知、屹ト相守弓・鍊炮賭勝負、

一切不仕、稽古方無油斷可致出精候、其外右式ノ儀、無之様堅ク可相嗜候、

右ハ去年十月・十一月ノ時分ヨリ、聖堂御建立ノ沙汰ソロミミ申

四番觸役所

新納五郎右工門

候、江戸ヨリ右通被仰遣候得共、當分御領國中上下困窮ニ及ヒ、罷在リ出来出銀ヲモ被仰付時節候故、御勝手方御家老衆ヨリ、此涯御差扣ノ筋被申上、被召上方ニテモ、御家老ナド中々被差留候儀ハ、相叶間敷ト在申候、其後世上ニモ差テ沙汰無之、又此頃ニ至リ彌立候様ニ候得共、場所未タ不相知ナド申候、二月ノ初頃ニテモ候哉、御用掛等被仰付、場所吟味有之、上ノ讀良吾助殿・後醍院喜兵工殿屋敷ヘ、内々畔反等御尋有之候得共、御川地ニ難成、其後比志島要人殿屋敷見分有之、其時分平方見分有之候得共、御用地ニ難成、其上屋敷ノ儀ハ、引料被下候ニ多分ノ御物入、六拾貫目ノ申候故、終ニ只今ノ所ニ究リ申候、最初ヨリ諸人モ氣寄、御吟味モ有之候得共、爰ハ火邊ケ場ニ御先代ヨリ、被成簀候所故、往外ノ外ヘ御吟味ノ由也、御建立相究リ候ト場所不相知内ヨリ、御普請方ニテハ、材木集切込ニテ候、最寄宜敷場所ニ材木立、櫻島又ハ小山田村ヨリ、御秘藏ノ材木集り申候、尤上品ノ材木ハ、先年以未爲御用心、御普請方被召置候材木ノ由也、一通ノ処ハ大形杉材木ノ由也、

一淨岸院様御遺軀、二月十九日福昌寺へ御入寺、公義御役人織田圖書殿、三月四日御代物ニテ、翌五日爰許出立、其内被差扣出立ノ日ヨリ、右場所へ取付方ニテ候、則ヨリ虎落ヲ維ヒ申候、左候テ植有之候松ヲモ障候ハ、越シ方被仰付、御拂ニ成申候、松ノ

分一年ノ所務、大凡千五百貫文計有之所ノ由承申候、成程地能成申所ト相見得居申候御物入、凡銀貳百五拾貫目ト申候得共、三百貫目ニハ可及ト取沙汰ニテ候、諸士以上御寄附銀、心落次第上納被仰付候外城ヨリモ、上下町ニモ係リ申候由、中山王・島津因幡殿・島津筑後殿・種子島藏人殿へ手傳被仰付、當分日々千人ノ上集リ、大御普請ニテ候、大工三百七八拾人モ可有之候、夫請人ノ夫被是合六百余入モ可有之候、土八元ハ老丈引其上七尺引、爰ニ聖堂ノ分七尺引上、其外講堂环家地、又ハ不引テ不叶所ニ引上申候ゾ突ト土持ハ、請負ニテ候、土當分ハ南泉院司橋邊下ヨリ持申候、櫻島ヨリ夫立被仰付候日々、六七拾ゾ、參申候、外ノ外城ハ作職ニ支候由ニテ、御郡方ヨリ断日之由也、當分陣小屋ヲ見候様ノ小屋段々有之候、

(右或人ノ筆記中ヨリ抜ク)

一組方講釋講堂へ被召置、未月ヨリ隔日四ツ後、講釋被仰付候、一與頭ヲ三四人ヅ、出席、小與頭ノ儀モ此内之通、可罷出候、一士ハ勿論、外城衆中ノ儀モ聽聞罷出、其外家来・町家迄到テ、志原者ハ末席ヨリ聽聞申付候、

一士之子供、於講堂素読等致度所存ノ人ハ、勝手次第可罷出候、安永二年巳八月
左中

太守重豪公

此節聖堂並諸武藝稽古場被召建候ニ付、諸御役人ノ儀モ、御用ノ透有之節ハ、講堂講釋ノ席ヘ罷出、諸稽古場ヘモ差越、師匠家ヘ相付致稽古候様被仰付候、

安永二年巳十月

組中若キ者共、多人數列立徒ニ夜行立等致候處ヨリ、喧嘩・口論等不相止、先年以未分テ被仰出趣有之、殊ニ御直ニ組頭ヘ御意ノ趣モ候処、其涯ノ様無之、連々致忘却候筋ニテ、到頃日夜行立、又辻歌ナトウタヒ、致徘徊者モ有之由、相聞得不可然候、元ヨリ爲土ノ子右躰ノ風儀ハ、有之間敷事候処、如何取違候哉、畢竟稽古事等ノ心掛モ無之、徒ニ罷在候処ヨリ、斯ノ通候間、互ノ禮義ハ勿論、学文武藝相勵、尋常ニ可相交候、左候ヘハ自ラ恥辱受候儀モ無之、自然ト風儀モ正鋪可相成候間、親・兄弟・親類又八年長候者タリトモ、理不盡ニ打果候ハシ、屹ト御咎目可被仰付候、

安永五年申四月

主馬　　帶刀　　市正

太守重豪公

文武ヲ嗜ミ武士道ノ穿鑿ヲ遂ケ、専ラ仰出ノ旨ヲ相守、明輩中以禮讓相交、風俗モ宜ク士ノ差別屹ト相立、往々御用立御奉公相勉

候様、可心掛候、徒ノ致徘徊等候処ヨリ、不圖爭論モ到未、事ニ

依テハ刃傷ニ及ヒ候儀モ之有、第一奉背　思召親兄弟ヘモ掛難儀、其身モ仕形ニ依テハ、士ヲモ被召離、旁以其罪不少候條、親兄弟共聊以無緩疎様、嚴敷可申教候、此上　仰出ノ旨ヲ不相守、法外ノ儀モ有之候ハシ、誠ニ御仕置ノ妨ニ相成、不忠ノ筋候間、不被加御憐愍屹ト御咎目、可被仰付候、尤親兄弟共ニモ、譯ニ依テハ迷惑可相成候條、是又可申聞候、

安永九年子六月

太守豪重公

大進

学文武藝ノ儀ニ付テハ、御領國中妻テ被仰渡置趣有之候ニ付、油断ハ無之筈候ヘドモ、此節從　公義分テ、被仰渡趣有之候條、猶又一涯相勵、可致出精候、御先代様厚キ　思召ヲ以テ、聖堂ヲモ被建置候ニ付テハ、学文ノ義就中出精致修練、其詮相立候様心掛候、尤文武ノ藝格別致出精、下地宜シキ者ハ、支配頭ヨリ吟味ヲ遂ケ、時々可申出候、且江戸在勤ノ面々、務ノ間ニハ向々申談、学文武藝心掛、専ラ質素ヲ本トシ、平日ノ交禮義ヲ不乱、御屋敷中風俗宜様、可相嗜旨被仰出候條、謹テ可奉承知、難有仰出ノ御旨趣、乍憚其旨ヲ奉汲得一涯致出精、萬端質朴ヲ相用ヒ、不依何事惣躰風儀宜ク、思召ノ一筋、屹ト相立候様折角可心掛候、尤右ノ趣支配上下役等ニモ奉承知候様、具ニ可申渡候、

天明七年未十一月

九、良將御書 徳川家康幼年ノ際、教育書

和泉 安房 大炊 粒

徳川家康公

御幼年ノ際御

教育ノ書

良將御書

天明七年十一月、太守廿六代齊宣公
学文武藝ノ儀、兼テ 御沙汰被爲在御事候処、頃日諸向一人出精

ノ段、相聞得候、分テ心掛宣キ者ハ、追々達 貴聞ニモ事候間、彌以相勵往々無怠慢可令出精候、

右ノ通、向々ヘ不洩様可申渡候、

天明九年酉六月

石見

安房

登

主計

勘解由

太守齊宣公

一御家代々与乍申、貴盼家督之優營有事者、無之候、誠ニ久家をミ
なく滅布之時節、繁榮候事者、二・三代之有道残者、(朱方キ)神慮先祖
之御守深故候間、彌被重天道、可被祈家之長久儀專一事、
一此比ニいたる迄、子孫無之候間、大加寺道と存候處、恐之保之勇
子誕生、竚持共中々難述言語御因(朱方キ)平生之恩慮肝要ニ存候、其
故者一天下之國衆、每度之御普請ヲ取相勵、又々年々駿府江戸江
參上、其苦勞不可勝計候處、當家者被領數ヶ國、一度茂御普請不
被仰付、又切々之出仕も無之、諸人之羨不残事たるへく候、如此
大果報ニ被打任、心遺無之候ハ、寸善尺魔と申ならハしに候間、
はたと可被及氣遣儀、可有之候、就中當世者金銀を以被續家事候
間、内々不入事ニもの、入候儀、可有用捨候、以事之次申候、貴
盼諸道具共手間之入たる様子と相見候、又被召仕女房衆衣裳等茂

餘り、結構之躰にて候、内々之儀者大方ニさせられ、少成共其入

目、公儀之用ニ被立、國家之ために成候様ニ、御分別尤存候、諸

侍も切々之出物ニ、御かれはてたるよし候、然處内々之花麗共候ハ、世上之見掛取沙汰、又ハ堪忍任難成、人々之述懐も可起候哉、少ならぬとおはされ候ハん事みてるを、ろくニ存候間、天道にもかなひ、國家子孫之祈祷ニも可成之事、

一右之如申候、貴盼御代之様、爾他國之取持有之儀、前代未聞ニ候、誠ニ公儀ニ付、諸國辛苦を取盡候處、日達國使共被進候事、不

方墾切ニ候間、何時も他方之使ニハ、被人御念、自身振舞をも被

寄合、會尺等念比ニ候ハ、可然存候、惣前他國之客人、鹿児島

役人衆、無沙汰無之様連々可被仰付候事、速々可被仰付候事、

一當國之様を見申ニ付、近御親類中ニも、或ハ氣任或ハ被構大欲、

心躰ニ見得候ニ、兎角御爲ニ可成人見及不申候、又歴々之中ニも、御用ニ可立人多茂無之候、少御爲可成者存衆者、早年寄申候、然時者ゆくすゑの儀、何共氣遣千萬候、御分別之前不及申儀ニ得共、餘心遣候儘申事ニ候、

右條々之中、僻事而已ニ可有之候条、以用捨可有御覽候、恐々謹言、

九月八日
陸奥守殿

維新御判

此之枚、宮之原家之本を以、写置候事、

抑我乍生于當家枝葉、被侵病惱手足無勇健、不所及了簡故不_(作)作

殿(作)下得、太守慈恩之快樂無閑何、豈可奉對殿下爲讎乎、然る依爲浮世不意價蒙御不審、唯々切腹願者、爲累代之御家我一身、可成殺旨再往向成臣雖伸避後等、碌不克承諾無詮方次第也、倩葉之爲

臣下之敢存之難默止、然則至 大守公非放天君臣頭、武勇之本文勵暫時之戰者也、

嶋津左衛門尉歲久入道

七月十八日

晴衰

近習中

-61-

御書 是ハ神君渡河に、御隠居され候比、江戸江御成有て、還御の後、慈徳院の御臺様へ、進せられ候御文なり、時代を考候に、慶長十二年以後にて、神君六十七・八歳、慈徳公三十・二歳、大猷公六七歳、忠長君五六歳ばかりの、御時の事なるべし、

一筆申入候、まづゝ日増に暖氣ニ成候て、葉よく候、其御程いよ／＼御無事に、若達も息才に候や承り度候、冬としハゆか／＼御目にかゝり悦入候、其節ハ、何角御當取の御世語とも、老後の樂に御座候、能々此段表へもたのミ入候、

一竹國殊の外成人悦入候、夫に付先比其地へ參り候節、竹へ附人の事江申付候様にと申置候、定而申付られ候半と存候、

國事ハ一躰、殊の外發明なる生付にて、重疊の事、其御方別して
御秘藏の由、左様に可有之事ニ候、大ゆへ存寄申入候間、能ミ御
心得生立候様可被成候、

一幼少の者、利発に候逆、立木の保に育候ヘハ、成人の節氣隨我儘
者になりたくハ、親の申事も聞ぬものにてハ、親の申事さへ聞ぬ
様子になり候ヘハ、召仕候者の申事ハ、猶以の事に候、左候ヘハ
後に國郡を治め候事ハ儲置、身も立申さぬ様に成行申候、一躰幼
少の節ハ、何事も直成者ニ候、併如何様ニ窮屈ニ育候ても、最初
よりの仕付次第にて、外より存する程は、太儀もなく、是を植木
に替へ候ヘハ、初め六葉よろひ割の、落人の產立と同し事故、隨
分養育いたし、最早一・二年も立枝繁多く成候節候、添木いたし
直々分り候様に諸立、其内ニ悪き枝者かきとり、年々右の通り手
入いたし候ヘハ、成木の後直なる能木に、成申候人も其通り、四
五歳らハ、添木の人を附置候て、悪き枝の我儘に育たぬ様子致候
と、後直々能人となり申候、幼少の時、育さへ致せハよきと心得、
我儘に致置、年比に至り、急に異見いたし候ても、我儘の惡敷枝
はかりはそり、本心本木ハ失ひし事故、直り申さす候、是には今
以存置候事有之候、三郎出生之節、年若にて子とも珍敷、其上言
かひすゆへ、育さへすれハよきと心得、氣之詰り候事ハ致させず、
氣儘ニ育て成人の上、急ニ申聞せ候得共、兎角幼少の時行儀作法

ゆるやかに捨置、親を敬する事を存せず、心やするニ存候、後ハ
親子の争ひの様に成候て、毎度申ても聞入す、かへつて親を恨ミ
候様になり行申候、夫にこり候まゝ、外の子供ハ幼少より、我等
か前にて、行儀作法よく仕付候者へ申付置、若し少にても、不行
儀我儘之事ハ、我等へかくし申さす、速に申聞候様に申付置候に
て承置、別に出候節、毎度或ハ叱リ、又ハ是ハか様に致さぬ様候
て、一ミ申聞候故、陰日向なく直々育申候、第一親をこハく存候
へ者、敬よく幼少より、親へ孝行致候事覚へ申候、其上小身者と
違ひ、召仕候者の申事を、能ミ承り候様にと、申事專一に申聞候
事、親の在うちハツ、しみ候ても、親の居ぬ時節になり、我儘に
なり國郡を失ひ候者、古より多く有之候、兎角常々側にて召仕候
侍の者、第一孝行と天命と、下へ慈悲をかけ、武家の事幼少より
申聞候へハ、自然と身持克成ものに候、君臣と申事ハ宣りし事に
候へとも、君たる者ハ臣君と心得申事專一の由、われ幼少の時、
安部大藏毎度申聞せ申候、尤臣として君に仕候事ゆへ、いかやう
に無理成事をも、せひなく承り、無道之君へも仕候へとも、夫に
てハまさかの時の用に立ぬものに候、兎角上よりハ何事によらず、
慈悲をうけ負偏頗なく、賞罰を正して、臣をば君の本と心得候
へ者よく候、臣ありての大名なれハ、召仕者なくてハ、大名の詮
なく候、とかく幼少の者にハ、召仕の者の申事を、能ミきけく

と、堂々御申聞をなされ候事、専一の事に候、人ハ人を鏡として、身の正し候外ハなく候、

我儘にて、終に我願望の叶事、決而なき事に候、

第一、我僕にてハ親を恐れず、親に見かきられ、

第二、親族にうとまれ、

第三、朋友にうとまれ、

第四、召仕者にうとまれ、

第五、我身の願尽叶はず、

右五ヶ条之達成行候へ者、身をうらみ、天道を恨ミ、後にはわづらハしく心乱るるより外無之候、只幼少より物を成田ならぬ事、能ミ心得申度き事ニ候、

一大名ハ、惣領ハ格別、次男よりハ召仕候者、同様心得候事、常に申聞せ育候時より、能ミ心得候様、與ミ可被申候、惣領より次男の威勢強きハ、家の乱れの本に候事、

一幼少の節、万事おうやうに整き者の物云ひ、まねぬ様に心得候事、夫もあまり大様過てハ、却て下の情に委からず、慈悲の心薄く成申候、常々の遊に、國の名産の事、或ハ大名の家筋家柄の事、并家業ともあれは、何の代より譜代の者、何の節の手柄、何の節の高名等致候子孫抔と咄致候へ者、幼少より家中の者の如在にならぬ事とも、聞及び覚え候故、成人の後自然と仕置、行届申候、大

名の自身にたしなミ候事ハ、弓馬第一鎗長刀鋏術も、心得可申事、水こゝろもなくてならぬ事ニ候、

一学問ハ大名ハ、自分博学に成候にハ及ハぬ事にて候、学才有る者に、堂々其道の講釈承り、其外物の義理善惡の事、行作のよき人の行儀作法、名将忠臣の物語、僕臣主の心をくらまし、其國を乱し、代々の國郡を失ひ候事とも、常々承り置我身の曲尺、ゆるまぬやうに心掛候事、第一ニ候、

一とかく人の道ハ、五常を守るにとまりて、其外にわか身の鏡なくてハ、何事もしれぬものに候、常の鏡と違ひ、外よりとく事ハなく、我心を問にてときさて申候事、我身の行のあしきハ、鏡のてらさぬ故にて候、まゝ其疊らぬやうに致事ハ、常々身の行ひの善悪を人に尋ねるより外ハ是なし、善をきく事をよろこひ、其座にて其惡を改め、善をなし候ものへ、褒美を遣し召仕候へハ、次第に鏡ハてらし、身の善悪ハ其席にて知れ、家中の善惡民百姓の取沙汰居ながら知れ、家事にて候身の善をきく事を、よろこへは、俊臣氣に叶ひ候事ばかり云、横に成行身の惡をきく事をよろこへは、忠臣日々に進ミ、忠言を時々きく事ハ、身の行にて天地の道に叶ふ事に候、此處主たる者の第一の嗜にて候、召仕者利口にて、きてん者の取入處にて候、何事も正直なる者をゑらみ、召仕候事、第一の事に候、

一井伊兵部事、平日ハ言葉少く、何事も人にいわせ承り候、氣重く見得候へとも、何事も人にいわせ承り候、氣重く見得候へとも、何事も了簡決し候へ者、誓申者にて、取分我に何そ了簡達ひ候爲にならぬ事ハ、皆人の候ぬ恥にて、物静に善惡申者にて候、夫故後にハ何事も、先内相談致候様になり申候、

一身のたしなみの事、人々すききらひ、得手不得手有之事ニ而候、とかくおのかたよらぬやうに、致させ候事、譬へハ四季の花、色々々に咲候へ、いつれも詠め有之候、とくたゞと申草花も、香もあしき物にて、何の用にも立申さる草のようなれども、湯の薬にハ炎して用ひ候へハ、薬にて候、其如く何藝も、人の覚え候事ハ承り置、何その時に入用の事ある者にて候、第一自身にふ得手の事、人のいたす候いミきらひ候者、往々有之事に候、夫ハ大身の別して致さぬ事に候、夫ハ大身の別して、致さぬ事に候、我等中年の比まで、基を一向に不存人の、打さへふ用の物氣詰にて、用にもた、ぬ事とはかり存、人の好ミ候ハ、うつけ者の様子存候處、近年基を覚候へは、雨降の徒然に慰にもなり、先達而うつけ者と存候者を、相手に致候、是にて察し候に、何事も詮なき事ハ、古より致し置かぬ事に候、呉くも自分氣入候者を、善と存候、氣に入らぬ者を、悪と存せぬ様に致すこそ、専一の事と存候、只身の智恵のと、かぬ事、朝夕に存する事にて候、

幼年の者得て、氣に入らぬ事を申聞候時、側に有合ふ器などをなけ、ふらり物を挽し候事、虫氣故とはかり心得、捨置候事甚記の毒を増と申者に候、先虫氣に候ハ、炙活藥を用ひ、つのらぬ様子、致すへき事に候、成人の後も何そ氣に入らぬ事有之候へ者、物を損ひ候事まゝ、有之候、是余り我儘の募り候故の事に候、器ハ損し候ても其通の事に候へ共、後ハ召仕候者、氣に入らぬ事申とて、手打に致し、氣がさへたと致したる様子、覚え申様子に成行事ニ候、病氣根入ふかくならぬさきに、早々直す事ニ候、一堪忍の事身を守るの第一ニ候、何事の藝術も、堪忍なくてハ致し覚得候事もならぬ者にて候、天道に叶ふ身ハ、身の我儘致さぬ堪忍地の理ニ叶ふハ、先祖より一郡一城を失はぬ堪忍、人和を得而も、我氣隨致さぬ堪忍、其外身体悉く堪忍を用る事ニ候、仁ハ我召仕ふ者、并民・百姓の賞罰を正しく致し、疎をもめぐミ、親シキをも罰ス、是仁の堪忍なり、君に仕へて身命をもかへりみす、一度も約をたかへす、是は我的堪忍なり、人の事を先にして、身の事を後にし、起るより寝るまで行義正しくする。是禮の堪忍也、我に慢して、人をなひかしろにする事をせず、是智の堪忍也、君父につかふるよりはしめ、假初にも表裡輕薄をなさず、是信の堪忍なり、古法を守り我物好をせず、美器・美服・美色に心を動かさず、是目の堪忍なり、美器を好まず、穢しき匂ひにもおかされ

す、是鼻の堪忍なり、雷又ハ戰場にて、弔鉄炮の音にもおそれず、先陣に近み高名を遂る、是耳の堪忍也、酒を過さず、美味を食さず、是口の堪忍也、其外手足にも堪忍有^ルなり、右の堪忍有るを一生の間守る人ハ、大身ハ家を起し國を治む、小身ハ身上を起し家を治む、堪忍のなる事ハ、十全に致さねハ、家をも國をも越す事ハならぬものなり、たとへ八十の内を八ツ九ツ守り、一ツ二破り候へは、其破れし處より、夫邊の堪忍いたつらに、成行もの二而候、大方の堪忍強き者の、是邊ハこらへしか、最早堪忍ならぬと申す事、まゝ申事ニ候へ共、夫も義によつて破而ハ、破るといふとも行ハる、ものにて候へとも、多くハ我智恵短きより、我體に落人て、身を果し家を破り、國郡を失ふ、たとへハ弓を射ス者の手前を能引渡し、はなれにてゆるミ、又ハ持出しなとして、初のよき手前も、いたつらになる様なるものにて候、とかく堪忍八十全ならぬハ、堪忍の詮ハなき事にて候、日本にてハ楠正成一人にて候、初より一向堪忍の氣なしと、言葉にも出し行ひしハ、近世田勝頼にて候、夫故一生の行ひ道に叶ハす、先祖より数代の家を失ひ身を果し候、織田殿ハ近世の名将にて、人をよく仕ひ、大氣にて智勇もすくれし人にて候へとも、堪忍七ツ八ツにて破れ候故、光秀の事も起り候、太閤様にハ、古今の大氣智勇至て堪忍施つりたる故、忠貞より二十年の内には、下の主にもなられ候、程

の事ニ候へとも、余り大氣故、分限の堪忍破れ候、大氣はとよき事ハなく候へとも、身の程を知らす、万事花麗に過分の知行、其外人に施すハ、大氣にてハなく、奢と申ものにて候、知行其外施品も其分にあたつてこそよく候へ、

一奢心なく物こそ儉約を用ひ、常に其程をよく知るを以て、政道正しきといふなれハ、下々ハ過分に知行、其外給ハリ物其程に、施したたふるをハ、奢者に引當て、吝嗇の取沙汰致し候、古より賢君賢主の過分に給り物、万事花麗之行ひハなく、身を慎ミ儉約を用ひし事ニ候、

一惣して召仕候者の、何そ仕候か、不調法にて叱候事、其者のよく得心致し、向後改させ候やうに致候事、主人たるもの、専一に候、我に事年若より專心掛候故、異見を加へ候もの、誤を改めぬものハなく候、兎角如向様にも、人のすたらぬ様に致度き事に候、先あやまち候者へ、其あやまち候事はかり申て、叱り候故、心得違ひ致し、主人をうらみ候様に成行、夫邊能勤候者も、不足の心出来、不勤に成候て、主人もおろそかのようになり候事、全く異見の致方あしき故、人を捨ると申ものにて候、異見の致候方ハ、其者を呼び出し、一人側へ取成し候者を置き、外の者を退け、常よりも言葉を和ハしけ、前に其方ハか様の節、何の手柄を致し、何の節よく勤候杯、其者の心をよろこハしめ、其後ケ様の不調法、

其方にハ似合ぬ事と申、能ミ申聞せ、吳ミ此以後相改、前ミの通心付勤候様に申聞候へ者、其理に服し、身の誤を存分相改候者ニ而候、主人たる者ハ、一人にてもよき人の出来、如何様の軽き者にても、科人の出来ぬ事のミ心掛、身をつゝしミ候事要用にて候、いかやうの利発の者も、主人の目よりハ行届かぬものにて、まして並々の者、ぬけかちの事にあるへく候、其行き届かぬ所ハ、主人より行届候様に心付、不調法にならぬ様に致し、召仕候事心掛、第一の事にて候、召仕候者科に申付候ハ、多くハ主人の科に候、一主人の風儀者、側廻りに召仕候者の、風俗大切に候、上の事下へ知れぬ様に、下の事ハ能上へ知れる様子有度事、取分氣に入候者、風俗心懸肝要の事に候、其者一人にて、一家中の風俗変し、善惡是ある事に候、

一治世にも身を楽に持候事、保養にもあしく、何にても業のなき時は、婦色其外色ミの悪事、出来候まゝ、朝起てより、臥迄の行儀を定め、毎日其通り致候事、食事もたゞ、美味はかりたへ候て、うまき物にあらず、平日食物随分軽き味のものよろしく候、月に兩三度ハ美味たて候て、よき由承り及候、

一近年日課を六万遍つゝ、唱へ申事、老人の入らぬ過役にて候、遍数へらし候様に皆々申聞候、成程遍數減し候ど、樂ミになりまいらせ候へ共、幼少より戰國に生立、多くの人を殺し候へハ、せめて

ハ罪亡し申も、成申參らせ候は、且年若り一日も隙に、暮し候事ハなき身故、當世ハ静ゆへ、隙過てこまり申候、何その業を致度候へ共、夫もいらぬ事故、念佛を日々の稽古事の替りにいたし候故、毎日朝起致し、夜も早くハ休ミ不申、怠らぬ様に心掛候事、夫故食事のあたりもなく、健にて念佛のかけと存候さへ、申傳へ候、先其人の行儀を正さんと思ハ、平日の起臥剋限と、食事日々同し事候、又多分有之缺にて、行儀正不正知れ申候由、左様に可有之事に候、惣て氣丈過候てハ、あやうき事ニ候、勇氣ハ分てなくてハならぬ第一の事にて候得共、只和ハらかに大やうに有度き事にて候、召仕候ものかさつに無之様、可被申付候、右之趣よくく御申聞せ、只直ミ父母兄弟の中、禮義作法ミたれぬよう、吳ミ御育可被成候、右の文ハ國へ御渡し置、成人の後もよくく相心得候様、御をしへ可被成候、かしく、

二月廿五日

返すく申置候も、國事隨分御心付被成へく候、右之通りにさへ、御育て被成候へ者、案候事無之候、以上、

明治廿年初冬写之終、

福島氏藏

○戒言

一有人教幼子曰、抑臣下ノ事、君ニハ我ヲ捨、苦勞ヲ顧サレ、自然ト忠ノ道ニ至ルヤ、父母ニ仕フル事ハ、心ノ便リイイハリ、如何様ノ儀有トテモ、少モサカワヌ様ニ、常々尊フ事ヲ忘ルヘカラス、縦世上ニ孝行ナルト云ワル、モ、其影ノ子ヲ思フ半フンニモ及ベカラス、増テヤ平生ノ心持ニテハ、不孝ノ儀眼前也、次テ朋友ノ事誠ヲ以交、稀ニモ侮ヘカラス、諸人ヲ輕ク思フ事ナカレ、藝能ナキ逆モ、我ヨリ年老タル人ヲ蔑ニスヘカラス、尤貴人ヲ敬フヘシ、扱我身ノ嗜ハ、其分量ヲ不忘、道ヲ正シ、如何様ニ取ハヤストモ、不義ヲ曲テ成スヘカラス、縦初二モ能一言ヲ聞ナハ、深ク胸中ニ納メ置キ、以未身ヲ立長ク奉公ノ志肝要ナリ、世上ヲ見ルニ、我コソ物馴タル顔付ニテ、人ヲ直下ニヲモヒ、出過タルハ、諸人上向ハ能様ニ有トイヘトモ、内ニハ憤ヲ含也、是無禮ノ様本也、如此人ハ必追従賣^{バイス}借^{カス}宗トシテ、他人ノ機ヲミ心中ニ、ヲモワヌ事ヲ云物也、身震シテ忌ヘシ嫌ヘシ、飲酒ノ事ハ兎角、分ニ過乱ニ及ビ、無用ノ所ニ行、奢ノ心出来、後ニハ先祖ヨリ傳來シ、知行ヲ捨及命也、總シテ行跡乱ルハ、大酒故ト知ルヘシ、又若年ノ時分ニ動サレハ難成事トモ、有少ハ形ヲ付ヘシ、年タケ悔トモ詮アルマシ、盤上尊ノ遊ハ白髮隱居ノ覩也、心寄ル事ナカレ、其外人言ヲ以月日ヲ送テハ世間并也、善人ニ替^{カズ}ヨニ似タレトモ、(不明)誇ニ逢ヒ殊赤面ニ及フ事多カルヘシ、是又可口惜次第也、色ノ道

ハ身命ヲ捨ルモ覺ス、君親ヲ忘ル、例古今多シ、第一戒ヘキ事ナリ、召仕之下人彼モ人ノ子ナレハ、親トシテ子を思フハ、上下隔ナシ心ヲ添ラルヘシ、其餘ノ事ハ是ニ隨テ相考、少シモ懈怠有ヘカラストソ、

伊地知助右衛門丈

花園會約

學校壁書

一古人の善をなすを、不是とするものは何事そや、良智の人心に有、其職に居て其職に任せ仕るは、不勤故也、此に我輩弓馬の家に生れて、武士の名を得る人なれハ、武士の徳に厚く、武士の業を勤さるは、自良智に恥る恥也、それ武士ハ民を育む守護なれば、守護の徳なくてハ、叶ふへからず、其徳の心に有を仁義と云、天下の事業にあトハなくを文武と云、故に明にして、慈愛有は文徳也、明にして勇強なるハ武徳也、良智明なれハ、此徳もとより我に備れり、是故に今諸士の念約致良智を以宗とす、殊に得かたき此付を諫難聞、聖教を問過難き同志、數輩集れり、三難の時いかて黙止すへきや、三難の禍を得るに、嘗て徒に悠々として、飽腹に安んし、此世を空ふせば天感明也、其罪寔に一生而已矣、可恐可戒之甚世也、それ文武に德^有、徳者猶苗之生実の如く、藝は猶耕耨之事の如く、文武を以耕耨の事として、心の生理を生長養育し、

教学に長し、階に聖苗を詣はむ事、何の幸か是に如ん哉、

一毎日清晨に盥擲し、衣服を整え、聖經質儀を熟讀すへし、文才の拙き者は、或は孝經四書の經文を讀、或は先学著述の仮名書を讀觸(タマ)、發載信印作之、二益を求て心を冊子の上に放任する事なけれ、

一食後には射を學ふへし、時過て後、槍・大刀を習ふへし、馬・鉄炮は人により時により、難習しなれる勢に任せて可也、武藝は治平の具才を止(義なれば)越なルハ、相和し相補え、散て争心殺氣を挾事なけれ、

一書數は文武の藝術におひて、其使に可す時を以、是を習ふへし、

一禮樂者六藝の尤重きものなれは、礼ハ心の敬をあらはし、樂は心の和を述たり、禮樂を學はむと欲する人は、まづ此心を存養すべし、綱ひ礼樂を學事不能人も、善敬恆和也、德あらは毎事無体之礼を行ひ(本マ)□に、無聲の樂を(本マ)せん、故に君子の禮樂は身をはなれ(不明)

一札用・軍用缺へからず、困窮を恤て下民を救ふ事、分限に應し有へし、家居飲食・衣服・器物妻子の私用におひては、儉約を專として、こ、におひて、儉約ならすんは、或は札用を欠、或は軍用を度り、或は慈悲・利濟の心なき人成ルへし、世俗其恥にあらざるを以恥心よく顧省して、是をわをまぶべし、

一朋友の交白他敬讓有之、相和睦し温泰自虚にして、益を得るを本

とす、威儀恣にて言語卑して、争心浮氣を以交は、下僚の凡俗也、他人の是非世間のあらざることは、あへて口に云事なく、恭敬の誠を案し、すべて色欲の雑誌禁之、況淫行におひておや、風は必心に問であらハれ、言は心の聲なれハ、その恥を知べし、

一朋友の交、一体心を存し、其困窮を相すべし、其業を相助て物我の我意我念に葬れ、便利にひかるゝ事なけれ、もし物我の意念起は、一体の良智を味し、同胞の親愛を亡(ナシ)ましき施也と、深く投

□誓覺すへし、
(不明)

一朋友の交過を規し、善を勧るを以、眞実の友とす、過を見て規す事なく、善を知にて不動は、同志相切磋するの本旨にあらす、徒に其罪を咎め、其是を兼ふも、又同志切磋するの始願に非す、是を規すに和を以し、是を勧るに時を以すへし、ミたりに論辨をなされ、議諫稍不叶事あらは、心を虛にして自友せよ、夫良智の愛敬、萬物を以一体とす、我手足の破るゝ時は、是を作る事必平愈に至らされへ止す、人之心病を療するも、能知て善に導くの□
(不明)案を追し過を聞人も、良藥□に苦さをふ厭して、病に利有事をすへし、過を親人に向て、蓋(本マ)□こえ外に慎むは、たとへハ病者、醫師に逢て、其病を隠する如し心事、光明にして内外明く、同心に恥て念之格去すへし、

博ク衆人ニ接シタルモノノ、享クルコトヲ得ヘキ利益ナリ、コレ決シテ口舌ヲ以テ、教悔スルコトヲ得ヘキモノニ非スシテ、唯世界ノ活事ニ就キ、実地ニ経験シテ、無言ノ間ニ了悟シ得ヘキモノナリ、余ハ之ヲ名ケテ處世ノ学ト云フ、

一〇、長善館ノ設立ニ就キテ私見ヲ述ブ

諒訪青年会誌、第十五号より于見ユ抜萃ス

長善館ノ設立ニ就キテ私見ヲ述ブ（續稿）

赤沼金三郎

凡ソ物ニ利アレハ、必ス一害アリトハ、能ク事物ノ実際ヲ觀破セル
明言ニシテ、普ク之ヲ天下ノ万物ニ微スルニ、皆然ラサルハナシ、
今我共同寄宿耽ノ設立ノ如キ、其利固ヨリ大ナリト雖トモ、亦決シ
テ一點ノ害ナシトハ云フヘカラス、吾人は宜ク其害ノ在ル耽ヲ究メ
テ、屏絶ノ策ヲ講セサルヘカラサルナリ、

余ハ諒訪ノ小天地ニ少長シテ、見聞當ニ狹ク徒ニ虚倣ト妄信トヲ養
ヒ、一方ニハ痛ク世人ヲ輕蔑シ、一方ニハ過度ニ一部ノ人ヲ、崇信
セシカ、東都ニ來り衆人ニ接セシ以来、天下ノ人ハ悉ク輕蔑スヘキ
モノニアラズ、又決シテ畏ルヘキモノニアラザルコトヲ、悟ルニ至
リ、

夫レ青年ノ士カ、父母ノ膝ドヲ辞シ、他郷ヘ留学スル者ノ、各志ス
所ノ専門ノ学ヲ成就セハ、其目的ヲ達シタルモノ、如シト雖モ、コ
レ未タ全ク、留学ノ利益ヲ尽シタルモノト、云フベカラスシテ、他
ニ更ニ大益ノ存スルモノアルナリ何ゾヤ、曰ク他人ノ虐待ニ遇フト、
異聞ヲ廣ムルトノニコレナリ、此二者ハ父母ノ膝下ニ生長シ、親戚
ノ情話ヲ樂ムモノ、決シテ得ヘカラス所ニシテ、唯他郷ニ留学シ、
ノ糧ヲ蓄ヘ、單身海内ヲ跋涉シ、或ハ富士ノ嶽ニ攀チテ、獨リ石窟

ニ入りテ宿シ、或ハ草莽ヲ排シテ、五家ノ莊ニ入り、平氏ノ遺族ヲ訪上、或ハ体ヲ養老ノ湯ニ投シ、或ハ身ヲ磯濱ノ洋ニ洗ヒ、或ハ雨夜薩摩ノ嶺ニ迷ヒ、或ハ風る遠州ノ洋ニ漂ヒ、具ニ櫛風沐雨ノ艱難ヲ嘗メタリ、其迅雷轟キ、烈風怒リ、狂瀾ハ爪牙ヲ現ハシメ、舟ヲ呑マントシ、草木に怒髪ヲ張リテ、人ヲ倒サントスルニ當リテハ悲泣シテ、救援ヲ求ムルトモ、慘刻ナル風雷ハ、何ノ寛宥スルコトアランヤ、無情ノ反響ハ山谷ニ震ヒテ、人ヲ弄スルニ過ザルノモ、今日明悉ノ下ニ坐シテ、當日ノ状況ヲ回想スルモ、尚ホ毛髮ヲ豎タシムル者アリ、然レトモ此虐待ハ、実ニ激切ナル教師トナリ、忠愛ナル朋友トナリ、余カ志氣ヲ堅確ニシ、余カ膽力ヲ強固ニシ、余カ身體ヲ健康ニシ、余カ期望ヲ遠大ナラシメタリ、余今日晚学ト鈍方トニ閱セズ、博ク佛・英・獨・羅ノ書ヲ讀ンテ、邃ク一科ノ學ヲ專攻シ、一身ヲ犠牲トシテ、國家ニ報セントスル決心ヲ、取ルニ至リタルモノハ、實ニ之ヲ社會人類ノ虐待ト、山・海・風・雷ノ虐待トニ、謝セサルヲ得サルナリ、

虐待ノ教育タル実ニ残酷ナリ、苦痛ナリ、然レトモ真正ノ万智ト、真正ノ德行トハ、獨リ此學科ヲ履ミテ、始メテ達シ得ヘキモノナリ、世人ハ小節ヲ慎ミ、小信ヲ守リ、区々トシテ、意ヲ言語容貌ノ末ノミニ、用イルモノヲ指シテ、道徳家ナリトナスコトナルカ、真正ノ道徳家ハ、獨リ此ノ如キニ止ルモノニ非ス、真正ノ德行ハ剛毅ノ意

志ニ存シ、剛毅ノ意志ハ艱難困苦ヲ経ルノ得ニ非レハ、決シテ養成スルコト能ハサルモノナリ、世人ハ言語ヲ巧ニシ、周施ヲ便ニシ、円滑ニ身ヲ處シ、他人ノ歓心ヲ博スルモノヲ称シテ、才智ノ土ト称スルコトナルカ、此等ノ輩ハ一旦危難ノ身ニ逼リ、生死ノ前ニ横ル際ニ當レハ、心神昏速シテ、策ノ出ル盼ヲ知ラズ、譬へハ燧爐ノ力ヲ假リテ、開キタル梅花力、一朝寒風ニ遭ヒ、忽チ凋落シテ已ムト同ニナリ、真正ノ万智ハ、窮阨ヲ經失敗ヲ重スルニ非レハ、長スルコト能ハザルモノナリ、古人曰ク、艱難ハ爾ヲ玉ニスト、豈真ナラスヤ、虐待ノ教育ハ人才ヲ造ルコト、此ノ如ク其レ大ナリ、故ニ余常ニ曰ク、青年ノ士カ、他郷ニ留学スルモノハ、獨リ其専門ノ學ヲ成就スルノ益アルノミナラス、他人ノ虐待ニ遇フト、異聞ヲ廣ムルトノニ於テ、至大ノ益アルモノナリト、

然ルニ今共同寄宿恥ヲ作り、同郷相識ノ者相集リ、親愛溫和ノ情ノミヲ養ヒ、啟勵猛烈ノ風ナカリセハ、山河七十里ノ外ニ留学スト雖モ、猶ホ郷里ニ在ルト異聞コトナク、虐待ノ教育ヲ受クルヲ得スシテ、柔懦放逸ノ習ハ、遂ニ接スルコトナクンバ、其智識一局部ニ止リ、各地方ノ異風奇俗ヲ聞キ、識見ヲ長スルコト能ハサルニ至ルベシ、又同郷ノ士ハ、互ニ相親愛スルモノナレハ、久シク同居シテ、益其情ヲ煖メ、遂ニ相狎ル、ニ至ルトキハ、平口談笑諸謹ノミヲ事トシ、着実ノ勉強ヲ防ケルニ至ルモノナリ、コレ最モ豪フヘキコト

ニシテ、同郷ノ士共同下宿スルモノ、往々免レサル耽ナリ、以上述フル耽ハ、共同下宿ニ伴フ所ノ不便ニシテ、吾人カ力ノ限ヲ尽シテ、屏絶スルコトヲ、図ラサルヘカラサル耽ナリ、

余カ議論ノ岐路ニ入候ヲモ願ミス、喋々困苦ハ良師友ニシテ、虐待ノ教育ハ、眞才眞徳ヲ養成スルモノタルコトヲ、論シタル所以ノモノハ、共同下宿ヲ創設シ、其目的ヲ達シテ、実効ヲ奏セシカ爲メニハ、深ク意ヲ此間ニ用井、徒ラニ寛柔ヲ尚ヒテ、放肆遊惰ニ流ル、コトナク、厳確ナル約束ヲ作リテ、凜烈ナル氣風ヲ養ニ出テ、ハ、廣ク天下ノ士ニ交リテ、其見聞ヲ廣クシ、入りテハ互ニ警戒切磋シテ、進修ノ益ヲ圖ラサルヘカラサルニ由レリ、コレ頗ル難事タリト雖モ、方法ノ如何ニヨリテ、成功スルコト能ハサルモノニ非ルナリ、試ニ我第一高等中学ノ寄宿舎ヲ見ヨ、高等中学ノ生徒ハ、放縦不羈ヲ以テ名アリ、曩ニ兵營ノ割ヲ用井、之ヲ鎗制セシヤ、生徒ハ舍監ヲ見ルコト寇讐ノ如ク、常ニ殺氣ヲ帶ヒタリキ、然ルニ近日其制ヲ改メテ、自治ノ制ヲ用井、寮内規約ノ編制ハ、之ヲ生徒ノ手ニ販シ、寮内整頓ノ責ハ、一切之ヲ生徒ニ負ハシメシヨリ、委員ヲ公撰シテ、整理ノ任ニ當ラシメ、良心ノ制裁ニ依リテ、卑劣ノ行ヲナサ、ランコトヲ約シタリシカハ、前日ノ放縦不羈ヲ以テ称セラレタリ、生徒ハ極メテ從順自制ノ人トナリ、前日ノ慘怛タル殺氣ハ化シテ、雍々タル和氣トナレリ、此ノ如ク他人ノ管束ヲ離レテ、却テ

從順自制ノ人トナリタリト雖モ、其氣象ハ啻ニ萎靡セサルノミナラス、益勇壯活潑トナリ、鄙屈賤陋ノ行ヲハ、痛ク之ヲ疾視シ、若シ遊蕩ニ流ル、カ如キモノアルトキハ、其朋友若クハ同級生ハ、其事実ヲ調査シ、事實明白ナルトキハ、同級生並ニ其朋友立合ノ面前ニ於テ、前日爲ス所ノ事實を明白ニ陳述セシメ、然ル後再ビ遊蕩ニ流レサルコトヲ誓ハシム、而シテ其行爲ノ性質ニヨリ、其友人等之ヲ責讓シ、其罪ニ服シ、如何ナル制裁ヲモ受ケント發言スルヲ待テ、孔明カ泣テ顔良ヲ斬リタル所ノ劍ヲ假リテ、其人ヲ笞チ、深ク心神ニ貫徹シテ、改悟ノ実効ヲ顯ハサシム、一般ノ風此ノ如ク厳烈ナルヲ以テ、一タヒ鄙陋ノ行ヲナシタルモノハ、全寮ノ同学生ニ撗斥セラレ、遂ニ身ヲ措クノ地ナキニ至レリ、今ヨリ益此美風ヲ養成シテ已マサレハ、純然タル道徳ノ小社会ヲ組織シ、府敗セル今日ノ書生、海中ニ於テ清淨ナル一条ノ流ヲ見ルコト、

我共同寄宿所ノ成ルコトアラハ、其利益ヲシテ、單ニ空氣ノ流通、飲食ノ精撰、地位ノ高燥、運動ノ便利、室内ノ清潔及ヒ、費用ノ節減、疾患ノ看護、智識ノ交換等ノ、數者ノミニ止ラシメス、更ニ之ヲ利用シテ、東都書生ノ惡風汚浴ヲ遮断スル城郭トシ、徒ラニ親愛和睦ノ好情ヲ養フニ止ラシメス、凜然トシテ犯スヘカラス、毅然トシテ屈スヘカラザル氣象ヲ、養成スル鍊習場トナシ、親和モ流レテ狎侮ニ至ラス、仁愛モ失シテ鄙屈ニ隔ラス、放蕩不品行ノ者アルト

キハ、一般ノ輿論ヲ以テ嚴然之ヲ責罰シ、必ス改心スルニ至ラシメ、
郷里ノ父兄ニ對シテ、十分ナル保険ヲナシ、苟モ此中ニ寄宿スルト
キハ、郷里ノ父兄ハ、豪モ心ヲ勞セサルニ至ラシメサルヘカラス、
詢ニ此ノ如キニ至テハ、共同寄宿所ノ利益ハ、實ニ廣大ナルモノニ
シテ、将来寄宿所ヨリ、幾多ノ人物ヲ出スニ至ルヤ、知ルヘカラサ
ルナリ、

共同寄宿所ノ設立ハ、其目的ヲシテ、單ニ費用ヲ省クノ一点ニ止マ
ラシムルモ、其利益タル決シテ鮮少ニ非ラス、然ルニ規約ヲ嚴ニシ、
良風ヲ養ヒ、共同寄宿ニ伴フ所ノ不便ヲ除キ、之ニ加フルニ互ニ積
善ヲ旨トシ、不品行ト怠慢ヲ戒メ、以テ德義ヲ砥砺スルコトアラ
ハ、其益スル所豈ニ勘少ニ止マランヤ、是ニ至リテ始メテ、我諏訪
家カ敷地ヲ貸付セラレタル厚恩ニ報ヒ、又我郵会カ中學設備金ヲ寄
セ、有志諸君カ義捐金ヲ寄セラレタル厚意ニ答フコトヲ得ヘキナリ、
余ハ此寄宿所ノ長善館ト名ケラレタルヲ見テ、世間一般ノ共同寄宿
所ト性質ヲ異ニシ、将来ニ向テ、偉大ナル期望ヲ抱ケルコトヲ知レ
リ、今日風俗腐敗シテ、德義ノ懷乱セル時ニ當リ、此館ノ本郷臺上
ニ屹立スルコトアラハ、單ニ其名ヲ聞クモ、人意ヲ強カラシムルニ
足ルモノアリ、而シテ此名ハ、甘棠遺愛ノ意ヲ寓スルモノ、其我郷
人ニ于フル感覺ハ、之ヲ他人ニ比スレハ、更ニ大ナルモノアルナリ、
然ルニ之ニ加フルニ、其実ヲ以テシ、能ク外部腐敗セル空氣ヲ妨キ

テ、内部ニ純粹ナル德義ヲ義ヒ、万緑叢中ノ一點、紅タルコトアラ
ハ、余ハ獨リ郷リノ爲メニ之ヲ賀スルノミナラスシテ、我邦ノ爲メ
ニ之ヲ賀セント欲スルナリ、人或ハ僅々六七十名ノ寄宿所ヲ作り、
德義ヲ養成セシコトヲ勉ムルカ爲メ、余カ此言ヲナスヲ聞カハ、誇
大ノ言タルヲ笑フヘシト雖モ、苟モ東都今日書生ノ状況ヲ知リ、我
邦将来ノ利害ヲ慮ルモノハ、必ス吾言ノ誇大ニ非ズシテ、實際ノ倫
タルコトヲ諒スヘキナリ、詩ニ曰ク善人不匱永錫爾類ト、一人ノ力、
尙未能ク一世ヲ感化スルニ足ルモノアリ、況シヤ六七十人ノ青年ヲ
ヤ、此青年力堅忍不拔ノ志ヲ養ヒ、正義正道ヲ以テ、一世ヲ鼓舞ス
ルコトアラハ、豈ニ國家ニ益スル所ナシトセンヤ、カピトール丘ノ
群鶴ハ羅馬人ノ眼ヲ覺シテ、其覆設ヲ支ヘタルニ非スヤ、誰カ六七
十人ノ青年ハ、國家ニ影響セスト云フヤ、況シヤ将来此館ニ入ル者、
決シテ六七十人ニ止ラサルオヤ、余ハ我邦書生ノ状況ヲ思一毎ニ、
感慨胸中ニ鬱勃トシテ、抑ユルコト能ハス、今長善館ノ設立アルニ
當リテ、大ニ論スル所アラント欲スレトモ、余才短ニ學淺ク、今日
之ヲ論スルモ未タ信ヲ世人ニ取ルニ足ラス、且ツ余今專ラ語學ニ從
事シ、今ヨリ一歳ノ間ヲ以テ、英語・獨逸語ヲ完成シ、傍ラ羅匈語
ヲ講スルコトナレハ、自ラ修ムルニ、コレ急ニシテ未タ他人ノ事ニ
関スルニ、暇アラス、力ヲ郷里ニ尽スノ志ハ深シト雖モ、翼未タ成
ラス、以テ大ニ翱翔ヲ逞フスルコト能ハス、是ヲ以テ姑ク我銳ヲ抑

ヘテ、筆ヲ此ニ止メ、他人大成ノ日ヲ期セリ、今我道ノ未タ成ラサ
ルニ、長善館ハ將ニ成ラントスルニ遇ヒ、喜悲相混スルノ感ナキ能
ハサルナリ、余ノ状況タル、此ノ如キヲ以テ、以上述ツル所ノ如キ
モ、極メテ浅近ニシテ、人ヲ益スルニ足ラス、唯聊ガ寸志ノ丹誠ヲ
表スルニ過キス、若シ長善館ノ成ルアリテ、余カ言其萬一ヲ益スル
コトアラハ、余ノ榮タルヤ美ニ大ナリ、

向ス、属官山崎仁奉戴者ヲ式場ニ誘フ、本縣知事渡辺千秋敬授式ヲ
行ヒ、校長拝戴シテ式場ヲ退ク、廳門内外奉迎者禮式ヲ行ヒ、校門
内外女教員全生徒附屬生徒等奉迎シ、夫ヨリ校堂ニ奉置ス、万歳ヲ
奉祝シ、且ツ業恩ノ優渥ナルヲ以テ、鴻恩ニ奉酬スルノ義氣ヲ養
成セシメンカ爲メ、一同御眞影ヲ謹テ、拝賀シ奉リシニ、誠御英遇
ニ涉ラセラレ、吾天皇陛下日本帝兩陛下、御眞影ヲ奉拝シテ、如斯
学生祝砲ヲ發シ、唱歌立體式ヲアリタリ、

一一、御眞影謹拜 今上天皇

御眞影謹拜今上天皇、新年紀元節・天長節ニ際シ、鹿児島縣尋常師

範學校生徒ヲシテ、天皇・皇后兩陛下ノ御眞影ヲ謹拝シテ、萬歳ヲ
奉祝シ、且聖恩ノ優渥ナルヲ知ラシメ、以テ鴻恩ニ奉酬セシメンガ
爲メニ、御眞影拝戴ノ儀ヲ、曾テ宮内省へ、該廳ヨリ上申相成リシ
ニ、此程宮内大臣ヨリ、御下賜相成シ、天皇・皇后兩陛下ノ御眞
影ヲ、今茲天長節ニ際シ、明治廿一年十一月二日、縣廳内ニ式場ヲ
設ケ、全午前第十時、本縣尋常師範學校長代理、全教頭森孫一郎教
諭・助教諭・幹事・舍監・訓導職員一同、生徒生徒率ヒテ縣廳ニ參
戎裝

一二、忠重公家庭學校ニ於テ脩身問題御答辨

過日 忠重公家庭學校脩身科業ニ於テ、問題御答辨ノ次第、教
育主任色川氏ヨリ、聽所ノ概旨ヲ記ス、左ノ如シ、

色川氏脩身科業席ニ於テ、生徒總テニ童子ニ對シ、問題ヲ設ケテ云ヘルハ、
往時蒙古日本ニ攻來リシ時ハ、數千ノ艦船十万ノ敵兵ヲ立口ニ、擊
沈セシカ、其時分ノ戰艦ト曰フモノハ、今ノ軍艦トハ比較セラル、
モノニアラス、至テ小サクシテ、且ツ脆弱ナルモノナリ、今外國ノ
軍艦我日本海ニ攻來ラハ、生徒各如何カスルト問ヒケレハ、生徒答

辨スルニ、或ハ大砲ヲ以テ射ルト曰ヒ、或ハ油ヲ灌テ焼クト曰フ者
アリ、又水雷艇ヲ以テ衝クト曰フ者アリ、色川氏ハ故ラニ問難シテ
試ント欲シ、水雷艇ヲ以テ敵艦ヲ碎クハ至テ好シ、然レトモ是ハ至
難ノ事ニシテ、其功ヲ仕遂ルコトハ、甚タ六ヶ敷モノナリ、何トナ
レハ、敵艦ヨリ暗夜ニハ、電氣燈ヲ以テ、海ノ四面ヲ射照スルカラ、
容易ニ敵艦ニ近ツクコト能ハス、敵艦ニ近ツクコト能ハス、敵艦ヨ
リ我水雷艇ヲ見認テ、一發大砲ヲ打ツモノナラハ、立口ニ我水雷艇
ハ擊沈セラル如何カスルト問質セシニ、生徒皆黙シテ答ル者ナシ、
時ニ忠重公御年十才兩肱ヲ齊ヘ、威儀勇然トシテ、予之ニ行クト仰ラ
レタリ、色川氏愕然トシテ心ニ喜ヒ、尚試ミニ反復シテ、水雷艇ノ
至難ヲ解クニ、必死ノ地ナルヲ以テシ、君之ヲ爲サル、カト云ヒシ
ニ、忠重公從容不迫、益々威儀勇正ニシテ、國ノ事ナラ仕方ガナ
イト仰セラレタリ、此ニ至リテ色川氏ニモ、忠重公今日ノ御答辨
ト云ヒ、御動作ト申シ、群童ニ抽ラレタルヲ見テ、大ニ感喜シテ、
自ラ涙ノ下ルヲ覺ヘサリキ他ナシ、今日ノ御答辨、既ニ将来有爲ノ
御資性・御志操ノ端倪ヲ窺ヒタルモノニシテ、今日初テ御教育申上
ルノ綱手ヲ握リタリト、慶賀雀躍スル所以ナリトテ、全氏ヨリ御褒
美トシテ、日本武尊草薙劍ヲ、攬帶セラル、ノ画図ヲ進呈セラレ、
又既ニシテ、忠重公

御尊父様、御前へ御帰告ノ節、鈴木氏ヨリ右御答辨ノ形行、委細上

申アリシ處、御前ニモ非常ニ御怡思召サレ、御褒美トシテ、御製作
ノ短刀一振ヲ進セラレタリ、右ノ如ク、御尊父様ヨリ御誠心ニ、
御怡ヒ被遊御褒美進セラレシハ、御教導第一ノ御手段ニモ、相適ヒ
タル事ト賀セラレ、益御教育ニ盡職セラル、ノ精神ナリ、
右ニ付、御姉君姫様ヨリ、御祝詞トシテ、御詠一首ヲ進セラレタ
リ、左ニ記ス、

遙々と、世にたつ君かいきこしハ、まなひの道にあらはれにけり、
右ハ、明治二十九年四月十五日、写置、

〔頭書〕

〔明治二十九年二月、橋口氏ノ色川氏ヨリ
ノ贈書〕

薩藩學事三

薩摩學事要用

愛甲喜春

永樂十三年乙未撰四書五經云云

庚辰孟春

僧桂庵、本貫周防山口人

戰國英雄集錄抄

鳩巢不亡鈔卷第一抄

論語集註卷之三云云

京五岳諸老詩

一、永樂十三年乙未撰四書五經云云

一永樂十三年乙未、四書五經大全二百二十九卷、此時天下破棄古註無家藏古書一本者、日本帝皇百二代、稱光院寬仁年、應永二十二年也、元和刊本無日本二字、以下ノ二十一年也、今從慶長本

普廣院殿御代、渡唐船雖載新註來、叢林不事本書之學、故不辨新

古之好惡本書之學ハ、依當時語乃謂儒學可以知之

一東福不二岐陽和尚、初講此書、凡正本國傳習之、謬以便於叢林說禪、宜於士俗世話為要而已、慶長寫本、要作惡誤、今從元和本

一建仁竜雲有論語集註、其卷末ニ有書、岐陽和尚講筵之說之本也
雲龍庵本ノマ
慶長本説ノ下無之
云大唐一府一州、其外及郡縣皆有學校、日本纔字元和本無也字

足利一處ノ學校學徒笈之地也、然在彼而稱儒學教授之師者、至今不知有好書、徒就大唐所破棄之註釈、教誨諸人慶長本説、作壞、今從元和刊本

惜哉後矣、若有志本書之學者、速求新註書、可讀之云々、

右採於家法僕點、餘皆載下

一愛甲喜春欲傳、於四書新註、寛永十七年庚辰孟春、航隅州屋久島、而遊學安房本佛寺、如竹上人之門下六年矣、上人太學之講筵之時、謂文之和尚大學講筵之發端云云、我今說新註和訓之權輿、昔者應永年間、南渡之帰船載四書集註、與詩經集傳來、而達之洛陽、於是慧山不二岐陽和尚始講此書、為文和訓以正本國傳習之誤、當此之時東山有惟正、東福有景召此二、老時之名柄ニシテ而同出於不二之建仁寺ノ山号門、匪啻精此二書人、以博学多聞稱焉、季安接二家法和點、桂庵書曰、普廣院殿時、然則當永享八年所帰舶、而非二應永中事ニシテ、明矣、但シ冷言新註不舉其書目如書目、則文之所承亦應必有撫焉、右採於相屬系圖餘不載焉、

為詩譽中時、柱菴就其試場、乃立賦之曰、

大梅梅子鐵團々、八十餘人下觜難、今日當機百雜碎々、那邊一

核與他二看相屬系圖、作難下若讀不叶、今從舊舊門者所寫古本改之。

二、僧桂庵、本貫山口人

僧桂菴本貫周防山口人、按下、明應三年、桂庵答周防萬安寺延伯永西寺雪舟柏皆桂庵、故國之墓逆去、又夕鵠巢門人河口子云、周防山口大内氏所葬都、而其

霸中國時掌明朝、期合之印使舶所未住故、文化最盛于此二云、按二足利謹古之遺唐使末々有勸令、至明永樂中、始有勸令無則明招我使船云、

字玄樹、又號島陰、不詳姓氏所出以、應永三十四年丁未生、永享

七年丁卯年甫九矣、寓洛陽、南禪寺師惟正景召西禪師、學四書新註等、季安從兄、本田親章近得論語公治篇一冊、不與今本同、乃元龜四年所写古本而桂菴所和點本也、字無首例、大字書註與本文義略抄于後、又聞市田氏及七飯野谷口氏各藏古刊大學、本皆先火失、伊地知周防守重責等所刊ノ行、桂菴點於吾藩者云、並二大舊音泰、今讀如字云ハ、字モ亦大ニ違之不異本文、而吾藩授句讀者教讀八字自占為俗、因是考之凡ソ受大學、時多尚幼少稱追、孟材王亦少ク進、乃子教連本文二皆讀其註哉、大ニ書註可以觀也、按於本文古註先行、自岐陽倡宋學以來、至我桂庵愈尊信徒衆、最モ盛焉、當時之授句讀也、不然授其詩文、則新古學徒何以テ別ンヤ、可以知不與今授ル句讀、同其法也、今國家尚尊新註、雖家奉之未タ及講註、而義業者多矣、然レハ則徒二讀四書白文者之、於價ニ朱氏也、孰與能タ誦二大学連註二ツ編者、桂庵躬親受明學、其設教亦可謂有所傳ル也、

嘉吉二年壬戌冬、削髮為僧、始登戒壇、時年十六矣、文龜二年歲旦詩自序此事也、前年既ニ長内外皆通位、至禪師領長州永福寺主席、文正元年丙戌遣唐使赴中華將軍義政使僧周鳳為告辭、又此二月贈書於朝鮮國事見義政、謹而忘仁無其事焉、後士御門帝勅僧惟肖、擇遣唐使時方ニ五山縉徒知名者八十餘人、

惟肖不能遽試、其材召皆聚諸南禪寺、乃題大梅梅子、而鳴磬一聲

游學於蘇杭之間、讀倪士毅、四書輯釋曹端之詳說、及諸註解、尤粹者益講宋學、遭其難通則得就時鉅儒明辨其疑、以造其深焉、初桂菴在卷在

明受儒學帝許之、於是超海入明云事、見英雄策、四明洪子經序本集日、精內典通儒書旁及莊列、無一之不究心矣、又嚴克正日、精究內典

旁通四書、百家子史於尚書尤究心焉、前是日東尚書、皆從古注獨桂菴依朱子傳、請教後學如指諸掌、又其客明每興懷觸感輒必為詩子經、亦嘗見其紀夢遇舊之、作心敬其為人同、能曲尽離索之意詞

林、往々競博咸評為有唐人之風、而補之集

南遊中ハ別テ有詩事ハ、見下注、蓋二絶句載之

此云集則隋朝後所作

是為紀夢、按文明十三年、送人還長門詩云、城外舊樓存、是觀之洪子經所註、永福玄樹

迎諸友一樽酒、似慰多年別離中、超海遠過赤城寺、梅花院落我書齋、又云赤間

城外舊樓存、是觀之洪子經所註、永福玄樹

途中適遇四明人一笑如同、師之、永福者因入其夢、而句及之可以知知也、

骨肉親可有扶桑、新到客報言東魯送殘春

是ヲ為

天保舟不載、遠未物神有途中詩百篇、又長享二年送安國雲夢之京詩云、吳越江山西鬱絲、黃金臺下步丹墀、南遊有君集上拂埃去、洛水清波洗蕙詩、且ツ及南遊諸侯、以是觀之別ニ有詩文集在、於當時而雲夢之京者明矣、今不傳於世惜

時方京有亂避寓石見

大内左京大夫義

八年丙申游歷豐筑肥時、肥

耳、報使事

文明應元年、答肥後隈部氏詩云、憶昨南遊尚壯年、黃金臺上去朝

又長享二年送安國雲夢之京詩

云、吳越江山西鬱絲、黃金臺下步丹墀、南遊有君集上拂埃去、洛水清波洗蕙詩、且ツ及南遊諸侯、以是觀之別ニ有詩文集在、於當時而雲夢之京者明矣、今不傳於世惜

哉、時方京有亂避寓石見

大内左京大夫義

八年丙申游歷豐筑肥時、肥

菊府置泮宮、隈部總州忠直等、特尊聖學招之、菊府因桂菴往客於

二愛亭

菊府有白鷺亭、有二水

於是吏部

「頭書」菊池陸奥守、武運同肥後守重

二愛亭

菊府有白鷺亭、有二水

於是吏部

「頭書」菊池陸奥守、武運同肥後守重

二愛亭

菊府有白鷺亭、有二水

於是吏部

源武貞、彈州源重清、禮部藤為秀、藤重貞、秋月種朝

疑クハ楠前守父兄也、

白石兵部

三才圖繪考、

釋珠林人善鷗詩、

珠光嘯月太極自嘆專岳靈岩寺

周泉

秋月氏

熊峯在菊府、

熊峯山、汝南聖觀寺

在菊府、

竹山寺等咸、加寵禮多競欲

師之者

桂菴答異部詩云、六國江山昔一遊、一忘身處處歸公

當此時、薩龍雲

寺

在市來、

玉洞冠岳寺在串木野、宗壽等亦聞其碩德、蓋與國老薦之於

圓室公、乃使人肥厚聘桂菴招致藩

徵克正亭

可併見焉、桂菴乃欲往而聞薩龍

心迹清、

有事不果

按是年烏津忠廉等九者戰薩隅、見于古書是也、九年丁酉正月又欲適薩

且為詩祝之日、

肥陽城外薩陽城、聞說今年收甲兵、萬里雲飛駕言邁、風流太守

愛惜情、

二月猶客菊府、觀釋菜於孔廟、時

西園

府緬素詣泮宮、各獻詩文、若

詠歌桂庵亦與獻詩

後百五十七年、寃永十年二月、林羅山初釋菜於先聖殿見

其年謹、季安音神武帝、始都宮崎王化漸東如斯文、亦自

西漸東觀

此可知也、

太平奇策至誠中、春尊賛筵陪泮宮、泗水吹添菊潭碧、寒雲染出

杏壇紅、一家有政九州化、萬古斯文四海同、絃誦未終花欲暮、

香烟僕袂畫簾風、

秋薩僧溫岳適肥謁桂庵、桂庵因報玉洞豫鷹公徵也

謝岳詩云、因君相約龍潭寺異日僧林添一頭可併見焉、

冬十一月、隈部直上忍贈衣一領、十年戊戌春、及專岳陟阿

蘇山、既而將如薩或沮之曰、亂邦通舟亦如憂、何桂菴既二決行、

乃為詩對之云、

一錫西尋苦薩泉、干戈塞路不通船、青山綠水功勞外、何處第尋

食與眠、

二月亂忠直等、二十一日始至市來見玉洞、於龍雲寺、時玉洞見其

禪薩詩前感、而和之圭庵贊韻、是為來藩之初筵其詩云、是月二十二日、幕府賜公書曰、願承渡唐船事、使者止副往來遇薩、其必遇待、六月廿三日、賄其苦達公私、公之使桂菴、蓋閑閑學、其勢可亦考也、

花柳風前春滿城、太守家國不言兵、白頭老矣紅塵客、幾入此門

蓋尋見公、四月十一日從陟冠岳在串木野為詩若文、公愈竊信、於

是有千載一遇語、時公十六、而桂庵年五十二、寺主宗壽則七十

二矣愛甲季定曰、桂庵故自明着船坊津、聞京有亂、乃棄坊津、日新公迎之庵兒府云、戰國英雄集云、日新聞桂庵傳反自明國卑禮招師云、又室鳴果不忘草等載桂庵事、亦因是說云、季安案、僅七歲、君与時未至不辨而明、且与漁唱亦不合傳聞誤也、

而未幾遂未慶府、八月与玉洞遊於日隅間、十七日解纜有詩云、

客裡秋深出國都、西風吹送海東杼、飄々此去知何處路、入大邦

天一隅、

又和玉洞覽島之韻、

黃蘆灣水白鷗濱一嘯詩成、喜興新老矣、江湖吾樂土竹間、漁屋

卜誰隣案明年卜新寺、則在此處可以知也、

九月謁久逸於柳間、乃公叔父而日新君大父也久逸時称式部太輔、嗣別族伊作氏、蓋長祿二年、先公移久逸

於柳間、後二十年則當此歲、而久逸年三十九矣、後八年復伊作、

九月謁久逸於柳間、乃公叔父而日新君大父也久逸時称式部太輔、嗣別族伊作氏、蓋長祿二年、先公移久逸

於柳間、後二十年則當此歲、而久逸年三十九矣、後八年復伊作、

九月謁久逸於柳間、乃公叔父而日新君大父也久逸時称式部太輔、嗣別族伊作氏、蓋長祿二年、先公移久逸

於柳間、後二十年則當此歲、而久逸年三十九矣、後八年復伊作、

九月謁久逸於柳間、乃公叔父而日新君大父也久逸時称式部太輔、嗣別族伊作氏、蓋長祿二年、先公移久逸

於柳間、後二十年則當此歲、而久逸年三十九矣、後八年復伊作、

九月謁久逸於柳間、乃公叔父而日新君大父也久逸時称式部太輔、嗣別族伊作氏、蓋長祿二年、先公移久逸

於柳間、後二十年則當此歲、而久逸年三十九矣、後八年復伊作、

九月謁久逸於柳間、乃公叔父而日新君大父也久逸時称式部太輔、嗣別族伊作氏、蓋長祿二年、先公移久逸

於柳間、後二十年則當此歲、而久逸年三十九矣、後八年復伊作、

自是桂庵首講宋學教授國中桂庵答小野克盛詩序、有徒充官齒於斯文之句、可以概知焉、恒侍讀公側授公尚書公通大旨、禮遇殊厚見于明人嚴克正序文、乃近江人源永春、在明國所與稱美之語也、加之、公族吏部、久逸遠州勝久長州第人並為公廉、平山忠康、新忠親、及執政鳥取播州政秀、村田越州經安、伊地知防州重貞等以下至里、衆士若緇之屬、朝嚮望多受業、所矜式者其聲大鳴世、匪啻日域遠聞西土隣國、往々歆望之至、謂薩都興仲尼之道、移東魯之風亦見于答小野克盛詩序文也、實西藩唱宋學之開祖也、或問季安居稱桂菴有功於宋學、我意恐不然彼果能稍儒書、蓋居皇都而講之乎、余日羅山集云、慶長八年羅山年二十一、聚其徒弟講論語集註、外史、清原秀寬私媚疾之、乃奏日自古無勅許、則不能講書、廷臣猶然況於俗士乎、諸罪之遂以聞神祖云々、十一月四日、復游冠岳、講說魯論王僧宗壽、為幼學士六七人請之也、

是冬廣濟寺湖月亦公ノ叔父、就訪烏陰、桂庵為詩謝云、

竹映晴沙沙映苔、豈圖高駕此飛來、細林今視鳳凰戢、一朶祥雲

五色闌、

十二年庚子正月為賀詩述恩言箇者例也、

五十三過、又一年新舊樞主、白頭禪春風誥蕩恩彼地、門外長江

如此類後不悉載多見雜著、十一年己亥、公命創寺於府下海涯、二月落成、時會友詩云、新築成時花、是梅細吟香影雅庭開、此遊好使、諸公讀桃李明朝、春一盃可以推知焉、乃授桂庵白撰名以

居焉、桂菴曰、凡名於物多所嫌忌、乃摘名字以命新庵、遂號桂樹院、

愛甲季定院字作庵雜著、其為地也、在向島陰因自號島陰季安按巢松集書、島陰若又云、

春來增景島陰寺、始是則當其寺號改號、愛甲季定曰、在慶府立野先史、本田鶴字曰、鶴頭射圃博為故址、今季安接漁唱云、海涯新居或八、海岸尺地為暴風怒潮被墜敗、是故長辛元年、移寺城西以是考之、本寺故址庇有兩所、而今射圃則阻海岸、如非創地、且季定等無獨言移者、所傳故址、蓋其所移也、詳註長辛元年

十三年辛丑秋、近衛殿下漁唱書準三官、若大相國疑政家公、使大醫陳祖田ム又英雄集云、桂菴既得儒學、未聘、公

反自明國船入蘇州、太守貴久招建儒寺、為師學之、桂菴亦難欲弘道、於天下特竢待、桂菴與之傾蓋情好最親、十月臨別為詩二首送之、祖田帰然知義曉及管領僧元等、不可有與為焉、故留蘇州云、貴久者武久之誤也、

京、小南禪寺蘭坡等、

坡等擊節、十四年壬寅及沿騷客多和韻焉

此所二入ルハキ詩十七首、卷末二写載ス清書ノ時ハ、皆爰入等也、間歲、

公喪疾矣、十七年乙巳幕府

義尚、遣竹田法印照慶未療

公疾、十八年内下正旦詩及之、凡賓

客至薩、則桂菴必逢迎、蓋為常以故名、益著聞京師、長享元年丁

未三月二十四日、及釋玄甫即達州勝久是也、等從公、遊妙谷寺時有詩云、年々

例追隨ス、太初賜寺在海涯善為風潮所、墮敗不遑營治、於是桂菴相

守車此也、

初賜寺在海涯善為風潮所、墮敗不遑營治、於是桂菴相

收於城西、移庵居其地有清泉、因人名泉庵現千漁院號如故、

牛猶書桂樹院、則亦仍舊号可以也、接明五年、和答僧惟善成甲詩序云、一葷達津口之

文見草庵、於漁雨寢烟之際、問予安否津史告以生有焉、季安又夕聞當時公宮近

今清水二、自此探西、則爰甲季定、本田親學等所相傳、今堅野射圃之邊嘗、其故址

也、世有傳云、今ノ府城南所在有島、若官廟前ノ池者、古ヘ為凌處故三謂王ノ凌治

承中、謫人俊亮等亦解縲焉、池邊ノ柳下云、今掩桂菴詩考時風景、其詩二云、荒與

漁村咫尺、又云一字短亭千里艸、又云江亭臨水小倉浪蘆花深半處、一漁郎之類皆、

明忠五年在庵所望之句也、又享禄四年九月、架橋於興國寺ノ前、小川見于亂道參

當時興國在今處云、彼是參考桑田碧海隨世變、今塊面水八、則當其滙浪而下ノ新

橋、當其津口親學等所傳、亦如有

謂焉、粗設于此、缺未招正焉、

時謝人詩二云、

城西卜地故深幽、泉在怪石圍處流、四面回頭山似畫、雙趺展脚

屋如舟、新詩相賀貴華軸、陋巷堪誇多景樓、何夕招師共乘興、

丹楓江外白蘋洲、新詩相賀貴華軸、陋巷堪誇多景樓、何夕招師共乘興、

新居未成作、小詩寄忠親上人、

近卜新居屋半間、經營未得暫時閑、對床何夕共哦句、檻外長江不
尽山、

路人曲荊疎竹間、暮年心事愛幽閑、新庵修補我雖之、材在詩中積似山、

答肥後隈部氏、詩二十八首之一明應元年所作、而非移菴之年、然ト里因關其事、今併載此後微之、

是高陽才子多、況傾冠蓋又鳴珂、海西盛族風流輩、況不處仁如知

何、

一一二·三山千萬峯、浮空積翠暮光濃、島陰絕景債誰畫、浦々烟

枯船入松愛甲季定載諸相極系圖、爲無居望向鳥作、但浮空積翠作漫空積水、按是季定受如竹口授、所贈筆也、故其誤字不承起句、有如此者、今此從漁唱、

答周防萬安寺、延伯詩二十八之二首亦明應三年作所也、

容膝蕭然屋半間、繞檐樵篴入漁灣、鷗々元有不孤德、好買其隣賣

我閑、

首陽未必冠諸峯、偶着夷蒼喜遇逢、桂樹叢生島陰地、江山雖美爲

誰客詩經字向、

賦島陰景

島陰佳景附沙灣、遠景高低紫翠間、莫謂弱流三萬里、爲君擊出巨

鰲山、

島陰櫻花天文三
年所作、

寺藏石底得春多、花近湖邊影落波、殘雪數峯稱櫻島、當年聞說詠

倭歌、

先是飯尾大和守、布施下野守承幕府旨、遣公室族人書曰、渡唐船入日州諸港、其警護之旨、從先規為文明十五年四月九日事、既而匠作忠廉、從隅

帖佐徙封於日飫肥城，乃召桂庵又忠廉移飫肥，則為前年、文明十

投宿於僧院作是詩

八手十九日事、乃圓案公印贈匠作扇詩、有自註云、鈇城公匠於是士

東行二百里山川、廻浦城陰擊
夜船兩度冠未民半散、僧居

二月轉錫，於飮肥安國寺為之主席。按閻歲圓室公疾矣，蓋為桂頤等鑄體。日是時也，福昌寺宗琮等，以禱准推。理學不用，於是乎、應匠作召、明憲元年答隈部氏，詩云來時賑客，一鄉人居淮浦。半貧鄧昔田荒三五畝，製錢鏽地土墮民又云，五石分明不分汪陸、興鱗鷺群。近

來多少僧生戮，萬仞龍門脚下雲。又四年隣寺尋詩友，北院富多南院貧之句等。按龍門及北院，皆指福昌寺等，而自言南院併七可考也。

龍遇日厚學徒益進。官使問僧貧之語，蓋齋齋即匠作別號。二年戊申元日。

七
五

今年六十二禪翁、未沐檀家仁愛濃、安國招提二會曉、花含嘉瑞

咲春風、

延德元年己酉冬、幕府又使惠山僧東陽号寶勝院遊說日南、二年庚戌

春、公如厭肥講大追物、於是匠作饗客特開勝會、桂庵與之言詠各

其壞也、是年正月入明京師、三年辛亥八月病卒于壞、桂庵在

其體也。蓋四傳之草率的，五至六月將卒之指，極月有餘

肥闡詩哭之憲
乃分法謚字名冠篇首
為詩十首曰
非敢駁詩有自存也

豐州、明應元年王子桂菴反烏
情焉而已、嗣子忠朝立是為典慶

陰、二年癸丑復如安國、往來兼兩寺如無常居間歲、幕府使朝

忠掌渡唐船事、故入明者多過飫肥、秋近江人佐々木永春号東林居士

亦將遊明過飫肥而謁桂菴、言學臨別送詩、三年甲寅十月公使桂

施及梧州篤久如飫肥、和忠朝於伊東氏、一日俱發鹿兒島、夜至廻

甫今福
桂菴有詩

小春十有一日、與藤摶州赴日州飫城之幕、及深更到廻浦口、而

村田
殿

十月十五日

實專一二而、又為圃進狀候可有心得候、恐々謹言

忠昌御花押

四年乙卯忠朝、遂伊東尹祐三侯・高城城公命也、是歲僧東松亦遊

明、告別桂菴、桂菴亦賦詩時、蓋及永春齋持島陰集、俱至明國舟

次郵江閩越、八月永春以桂庵所作詩示嚴克止名八端四、明人賜進士、出員外郎、等、因求和韻、乃寄之詩頌詠、其為人者十二人、而克止為序、

五年丙辰四月、又歸島陰、七月永春等在明請洪子絳、求序島陰集、
十六日子絳乃亦序之、實為明孝宗弘治九年而皆以名鄉鉅儒並聞
於時者也、六年丁巳正月、桂庵自飫肥反島陰、二月永春還自明十
九年、復訪桂菴、以明人所贈詩文、致桂菴其詩文云、

島陰序集

賜進士第奉政大夫修正庶尹兵部、選清司郎中致仕奉、

詔進階朝列大夫、四明洪常子經序、

人生覆載問同天地之帥、形同天地之塞、所以有華夷之辨者、豈以

其彊土之遠風氣之殊耶、亦則處之在夷狄、則進之者蓋有以也、日

本國在東海之東、自後漢始入中國、由是得觀墳典之全、聞周孔之

道、而用夏變夷、是以其國雖舊、而俗則新矣、若唐之粟田授經、

於四門助教趙玄默仲滿之慕華不肯去、宋之奮然能屬文善隸書者、

要皆與華人相後先也、是豈可得而少之哉、我朝

太祖高帝法天爲治、

聖子神孫繼體守成、而薄海内外無不被其教化、故九越裳、肅慎、
蠶狁、高麗諸蠻國遣使入貢、白雉桔矢之類者、肩摩踵接無虛歲也、

今天子改元、弘治之八年、日本國復澤而來、朝舟次吾鄆江上、

一日

有客持、其國南禪寺僧、桂菴島陰集、凡千萬言、詣予不解華語、索紙筆以告予曰、桂菴吾國緇流中之翹楚也、精內典通儒書、旁及莊列、無一之不究心矣、成化四年觀、

光上國、得從華之大夫士遊、益增其所未能帰、避亂居豐筑之三州、

凡其吟詠性情、應酬于求之作皆在、於是終居薩州之鹿兒島故名島陰集、敢焉大人先生二言以序之、儻蒙不拒、其為榮幸固可言哉、予嘗見其紀夢遇、舊之作能曲尽離索之意、則固心敬之矣、

及觀是集、則誠不在於華之作者、及其國粟田奮然之下也、可喜也、已乃不辭、而爲序以歸之、弘治九年、歲在丙辰七月既望、

贈日本 桂菴樹禪師詩序

賜進士出身奉真、大夫南京兵部車駕、員外郎、四明嚴端克

正序、

大明弘治乙卯仲秋既望、吾鄆吟社方先生、時起榜日本源君永春過、

予載拜而告曰、吾國桂樹院住山、桂菴玄樹禪師精究秘典、旁通

四書百家子史、於尚書尤究心焉、吾阪尚書往々皆從古註、而禪

師獨依晦菴朱子門人之傳、與後學講解如指掌、誠日本緇流中之

巨擘也、知禪師者掌薦之、於蘿閣日三州、太守君島津公者用邀以發明、尚書大旨禮遇殊厚、由是後學莫不得聞朱夫子師弟間、所講之奧旨古所謂折其善者、而從之也、愚嘗辱禪師愛厚見、贈

七言二絕今幸納款、

絲絲、

上國獲各鄉鉅儒索和其韻、將以帰用復禪師雅意、敢于執事一言以引重之、予惟禪師囊者納貢遊、吾中華覽山川之秀挹賢哲之多、予嘗叩其胸中、所蘊非尋常者、比可嘉也、況源君能讀書善、吟咏又在予所愛、故不辭而為之序俾持、以為贈云、弘治年日長至、

遠播詩名有幾家、上人贏得鉅卿誇、珠璣奪目龍蛇字、傳到扶桑錦上花、
聞說蓬萊接島涯、老僧應擬淺黃眉、慚余亦夢尋真訣、塵事紛々飛若絲、

賜進士出身廣東參政劉

謾道維摩不出家、也能說法動人誇、日東老宿多時別、看到菴前
幾度花、

老禪帰臥海天涯、謂樹江雲想白眉、課罷榜嚴無一事、閑持金偈
寫烏絲、

都察院經歷宗顯

苦行清心是釋家、上人高致縉紳誇、吟寄客膝紅塵遠、只種琅玕不
種花、
養壽多方未有涯、童顏兒齒更芝眉、蔭老去成真隱、不見王言出似
絲、

味易老翁倪光

上人東住楚天涯、珠玉詩林獨可誇、萬里乾坤雙老眼、白雲深處看
飛花、

夢中騎鶴到天涯、西竺東林老百姓、一別石橋雲雨地、春風怨入柳

賜進士南京兵部郎中金亮

穿山居士雜閑方

海國多才是故家、名高文道衆堪誇、當年曾拜天王龍、看盡長安寶
樹花、

東去扶桑天一涯、雲開望斷遠山眉、箇中老衲參空相、不着塵凡一
縷絲、

賜進士出身四川按察僉事俞譯

自是繙流第一家、墨名儒行是堪誇、獻珠曾遇中華地、得見春風紫
陌花、欲向遠公結蓮社、愁聞戒酒使攢眉、于今老去都忘却、日々
江頭理釣絲、

賜進士廣平太守前都給事中盧瑀

老僧到處即爲家、詩律清新豈浪誇、前度入朝承燕賜、醉來銀海欲
生花、
幾年高臥島陰涯、頭上霜毛映秀眉、心靜自無流注想、任他嬌管雜
清絲、

江郎讀隱鮑垣

石泉倪鑑

四海車書混一家、昔曾納貢達人誇、桂菴高臥應多趣、幾回蒲團夢筆花、

中華遊遍興無涯、詩社于今想白眉、何日觀光重有會、高山流水奏桐絲、

頤心子沈賜

禪學詩才號一家、明珠無價不爲誇、菴前老桂天香別、壓倒祇園蒼菊花、

憶昔浮盃過海涯、儒林爭喜識長眉、瞿曇老去知無恙、自咲昌黎髮易絲、

友梅方震

聞君日域老諸家、出語驚人足可誇、借問禪房幽寂優、處雲幾樹已開花、

上人家住海東涯、勸破塵寰只皺眉、濁有詩魔降未得、滿頭短髮尽成絲、

正庵張珮

獨憐之子大方家、辭賦春客不待誇、爲遵正菴曾有問、蚤年應夢筆生花、

大明日本隔天涯、翹首空懷馬白眉、独札新詩再三詠、相逢惟忘餐垂絲、

上人少小便離家、一入山門衆耽誇、揮麈談玄登法座、繽紛繞膝雨天下、悟得真如浩莫涯、蒲團長日下脩眉、當年曾聞三生事、飛盡爐烟細雨絲、

是月公猶疾矣、使桂菴讀般若經禱之、三月永春辭還、八月讀經於朝、是爲結願、初薩州持持久、相_于先君當路、於國悌大岳公旨因先君亦不協迨公不愈、蓋追念之十月別建、大岳公廟特尊其號曰、小城殿蓋公聞孝於桂菴故也、七年戊午豐州忠朝、亦新大覺寺廟、欲尊其號、乃具狀差使京師、就神祇長卜部兼俱請之、九月兼俱奏、

帝乃二十五日、冊贈福島大明神、八年己未五月、使者持冊至自京師忠朝、捧詣廟下祭告諸神、亦爲公也、時桂菴爲之、祭文其文曰、

大日本國之海西路、日向州福島大明神者、帝王城西嶺大學教寺前、尊主盟某公之靈也、神姓源氏、永享之末年、因倭臣議左相府、善山大居士懼、其有閻牆之禍、公見幾逃出洛、微服遠超海竊竄西南極地、日州福島院、影響暗昧殆如入山之深入_于林之密_于、然劍射斗牛、其光難敢輞焉、事漏而聞于京當、此時相府號令、電激雪斧塞外藩垣、風行草偃_于、搃無可容身之地竟、自殺于本院、將謂康

釣軸坐上台、何圖陪錦彝埋下土避、邇聞者徒嘆嗟而已、實嘉古元

年三月二十有三日也、于今雖歷五十八年、其憤懣之氣焰赫、然不

息土人往々有不測之慮者、咸以爲 尊靈所祟其、然乎不然乎、

蓋傷於讒隕命者、汨羅有沈塚浙江有怒潮、土人祭以慰藉厥怨懟、則能利濟人民、能擁護家國我日域、昔丞相之靈亦然り也、于北野于西紫無處不崇敬焉、胥山神號威惠、顯聖王祭伍員也、江讀神稱廣源順齊王祀屈平也、遙瞻前規寧忘後徵、是以先數年院土、故有司美作守藤原

相攸、於城外高築壇、新建祠崇尊靈、以祭神之禮、一日藤明府、

島津豐後守忠朝思惟、尊靈之廟食者事似卒爾也、不若奏京師歷上裁謹具狀、差使以聞矣、神祇長上從二位大中臣卜部兼俱、委悉時義以達、宸聽焉、明應七年九月二十有五日、冊賜福島大明神之嘉

號、今茲已未祝冊自京師降シ、夏五吉日吉辰郡主忠朝率、神官臣

民等詣新詞 設、非常之祭議發揚、宣奉安神号、於是詣詞下者

不知幾多、各歡抃踊躍以歌以舞不亦盛哉、朝廷既致崇極、於大神

邊郡悉仰廟食於萬世、然則與夫江讀胥山、北野之神何有優劣耶、

伏願擁護力、同卓地山利濟切蒼、印水月專祈邦君藤氏身宮安泰、

壽算綿延天布金穀、以治化遍三州永偃、于戈以威名傳四海、特冀

忠朝武運長久、德譯宏深家有賢子賢孫、益喜兄弟叔姪之繁茂、郡

無貪官貪吏、偏誇士農工商之衆多、所謂仁義忠信耿存祿位、貴富

兼備者也、至祝至禱、

明應第八年己未五月、神官等敬白ス、

右採雜著、宏贍典麗多雖如此、今文集亡諸體不備惜哉、

九年庚申奉釣帖王、於建仁友人蘭坡、爲文賀之按龍峯草脩
謂所詩序

十年辛酉桂庵年七十五矣、先是日本讀論書者、必用漢音佛書用吳

音爲法文德帝二年、百濟僧法明來、譯羅摩經音、于此始又聖文帝時、吉備公入

唐既歸本朝奉授、孝謙帝十三經漢音始、于此至桓武帝延暦十七年之二月十四日、姓桂庵在明學校、聞之群儒皆曰、吳漢何泥只從便可

トモ設讀法、桂庵取岐陽所倭訓スル、四書尊明儒教、既改正之以授徒弟、

即所載左論語集註等此也、然於此文時猶草昧教導、未聞世之學、

儒者往々未知、其句讀若註有新古也、於是又著書粗辨其新古、且、

以國字解句讀法述、桂庵點式後裔知學、必尊宋說、先在能辨其句

讀之意、即所載左桂庵和尚、家法倭點此也、

桂庵和尚家法點日州飯野土人、谷口金藏家藏、元和十年所刊行本外題如此、而

所存本則題曰、本府士伊勢貞頤家藏、慶長十六年九月八日、俊正者於山川津、

所存本則題曰、四書五經古註與新註之作者、並二句讀之事、但古註以下皆之分註、

按桂庵著授八、其弟子專于在論俗耳、蓋元和本乃如竹在藤堂氏命工繕梓、時如竹必惡題不雅、而改書之可以考也、俊正未詳、既云山川蓋舊本必出、正竊寺然トモ無所考、註備フ後考、

四書六經朱晦庵悉雖有欲斥、其謬正其失之志、於四書既經年月、

老年不幾、故先五經內謬失、最甚者周易周詩先生、自作傳与義、

一宋朝以來儒學不原、于晦庵不以爲學焉、故兒童走卒、皆誦不宗朱

子元非學看到匡廬始是山案相屬系圖如竹語、愛甲喜春曰、吾聞諸文之、凡大

明學校皆額此十四字云、

兩句唐音、不宗朱子元非學看到匡廬始是山、此意、漢儒以未儒者

雖多以晦菴爲宗之義也、宗宗領也。元和刊本無下宗字匡盧山、於山衆美相、備贊朱子之學也、

一新註諸家之說、違背晦菴之義者、皆不敢取也、

四書者

一大學舊禮記、第四十篇也、二十九卷載之、今晦菴章句、

一中庸舊禮記、第二十一編也、二十五卷載之、今晦菴章句、

一論語古註何晏、集解今晦菴註慶長本作章句讀、今從元和本下倣之、

一孟子古註超岐、今晦菴集註、

五經者

一周易古註、王弼新註、程子作傳朱子作本義、二十四卷六十四卦、

一尚書古註孔子十一世孫、孔安國作傳新註、晦菴門人蔡沉、號九峯

先生作集傳、今題書經十卷五十八篇、

一周詩古註、毛享作訓傳授毛萇、故毛詩ト号ス、新註朱子作傳、今題詩經、二十卷十一篇、

一左傳古註左丘明作傳、故名左傳杜預作註新註、南宋高宗時、胡文定公作傳、今題春秋胡慶長本無胡字從元和本三十卷魯國史記也、隱桓莊・閔・僖・文・宣・成・襄・昭・定・哀、此十二代二百四十二年之間記之、此時号春秋之世上、雖有周王號令、不行號大國十二諸侯、此書非魯國事而已、各國戰伐是非得失皆載之、以爲後世之戒治國家者、不可不讀此書也、

一禮記古註鄭玄字康成作註新註、宋元之間、陳澔作集說古今名禮記、三十卷四十九篇、

若人問五經新註如何答、易、朱子本義、書蔡氏傳、詩經朱子集傳、春秋胡氏傳、禮記陳澔集說、

蔡氏傳・朱子傳之傳、濁可讀也、胡氏傳之傳スンデ可讀也、集傳集シユウトウヲ可添也、集說之集ハ、シユトウヲ可畧也、說ハゼット濁テ可讀也、

一六經者、五經ニ加孝經也、

一南宋高宗元和刊本無高宗字淳熙十六年己酉、晦菴撰大學・中庸序、此時

新行于天下日本、文治五年判官殿、衣川年也元和刊本、無日本以下十
三字、今從慶長本、

一大明永樂十三年云々、一普廣院殿云々、一東福云々、

一建仁云々、右四ヶ條見上ノ岐陽傳ニ、故ニ不復載焉、

一句讀之事字訓曰、句地也、絶也、一句之フットキル、所也、一句ハ二字モ一句也、曰ノ字ハ一字ノ一句也、或ハ二字・三字・或十字・二十字雖多一句之所以、其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣、此十三字一句也、○讀音豆韻會宥韻曰、凡經書語絶フル處、謂之句、語未絶而點、分タル語之謂之讀句點、於字之旁讀、點字之中間云々、私云旁トハ、字ノ下右ノ旁也、中トハ、字ノ下マンナカナリ、イカニモ朱点ナカト、ソバトニマキレヌ様ニ、点之也、人ノ初心ナヲ云ニハ、句讀サヘツキマエヌト申也、法華経ノ句切

様ニ字ノ下マンナカバカリ、朱ツケヲイテハ、句讀ノ差別如何、可知哉、

モ不讀處アリ、

一語辭助辭ノ事、註者ノ意、有差異耶、此ニハ皆ヲキ字ト申也、

○之乎者、也爾哉兮諸於欵耶矣已而耳、如然思此外 有之欵、

一之字ユリヲイテ、此時ハ當字可點也、

子之武城云々、大學人之其所親愛、而僻焉之類コレガ、此時ハ末假名ハカリ也、其爲仁之

本與之類、又、ナカニヲイテヲクコトアリ、謂之父、又如レ之トモヨム、此ノ字句ニ切ル處アリ、學而時習之ノ類、

一乎耶歎、此三字大略ヤトカト讀也、コレモ上ノ字ノ下ニテ点シ、添フル也、不亦説乎、其爲仁之本欵之類、

一者字云ハト徳者○如此点々、又上ニ也ノ字アラハナリト云ハト、可点也、

一也ノ字、江西ノ云讀文也ノ字、而シテ字句讀、能ク可辨ス云、句ノ時ハナリト讀テ可切也、但シナリトヨマレヌ處アリ、然トモ一句ノトマリナラハ、句ニ可切、而シテ好作乱者、未之有也之類、讀ノ處大ヤト讀テ、下ニカクルナリヤノ点、上ノ字ニ点シ添サルナリ、其爲人也之類、又ヤト讀マネドモ元和刊本ハ、讀メトモニ作ル、句ニキル、處アリ、字訓ニ誠ハ実也、是ハ讀クセナリ、又人ノ名ノ下ニハ、不點皆ヤト可讀、古點ニ回也ハカリヤト讀テ、商也賜也ノ類不讀事也、又ナリノ点モ、上ノ字ニテ多点シ添也、又、ヤトモナリト

〔行間〕

○南禪寺毫派号江西州福寧寺京兆人、平姓總州太子東郡氏子也、蚤建仁天祥入室、

資性俊逸、梵漢博記注、初建仁後輿南禪讀メトモニ作ル、以文之聲鳴、晚年退

居東山々續翠軒、文安丙寅八月五日寂、述作有江湖集錄、天馬玉津珠續翠亭、若干卷」

一乎諸於于此ノ四字、返点中アルトキ、皆無讀也、○諸字ヤト讀處多キナリ、其舍諸其猶病諸之類、又不讀處アリ、

○於字于字上アルトキハ、オイテト讀也、二字多クハ通シ用ル也慶長本無于字、以下二十六字、今據元和刊本補之、

一而字此而字、大略讀ノカシラ字ナ（リ）、但シカモ元和本シカレトモト讀ムトキハ、句ノカシラニモナル欵、夫不涉句讀處アリ、人不知而不懼之類新註、此而字而毎字如此点ス、其故ハ古点ニ不讀ヲク故也、學而時習之、此一句論語首篇之篇首、五學皆肝要學ナリ、爭力可不讀乎、古点ニマナンテ、トキニナラウトバカリ讀テ、而之兩字ノ不讀曲事也、但下ニヲイテ、ヨマレヌ處アリ、已而々々、今之從政者、殆而之類、又反而遠而周詩ノ辞、註曰而語助、是ハハンタリトヲケレハナリトモ、讀ムヘケレトモ、ハンシエンジト讀テ、令知有而字也、又ナンチトモ讀ム、中庸ニ而強欵、註曰而汝也、

一矣字大略一句切處也、故又ト点ス、又レリタリ、ケリト讀ヲ是モ
令知有矣字也、又在其中矣之類、又又トヨマネトモ、一句ノ切ル、
意必有之、民德帰厚矣、可謂孝矣之類、此字上ノ字ニテ点シ添ル
也、又ヤトカト讀處アリ、可止矣之類、添乎ノ字カナトヨム、己
矣乎至矣乎之類、但ヨマレサル處多キ也、清矣鮮矣之類、又句軟
讀軟中ニヲクモアリ、鮮矣仁甚矣、吾衰也久矣、吾不復夢見周公
之類、

一焉字イツンクンゾト讀時ハ、皆於處切人焉、瘦哉之類、又コレト
讀處アリ、下必有焉者矣、大學心不在焉、中庸上焉下焉、論
語焉往而不三點之類、大略不讀處多如丘者焉、女得人焉爾乎、井
有仁焉、又聲ヨミツ、クル處アリ、大學序ニ各倪焉云々、

一惡字虞韻音、烏註曰安也語惡乎、成名而居惡乎在云々、又ア、ト
壬讀、孟惡是何言也元和刊本無此條、

一耳爾而已也已可謂好學也、己不足觀也、己斯害也、己世字アル時
ハ、ナラクノミトヨンテ、令知有也字也、也己矣三字亦各言其志
也、己矣己矣可言詩、己矣而已矣、無所苟而已矣、忠恕而已矣焉
耳矣、孟子盡心焉耳矣、己乎此ニ字ノアト、難讀尤斯謂之、君子
己乎

慶長本ノ假名ハ、右ナリ、
元和本ヲ、左ニツクルナリ、

一也字韻會紙韻上声也、三處ニ出之、初ハ己苟起切月令、其日戊
巳、又歲在己日屠維、又身也對物而言日、彼己論語克己復禮爲仁云

也、次ニハ字母以字羊里切止也、訖也甚也又語終辭、孟子曰仲尼
不爲己、甚註曰己猶太、又次字母、似字象齒切歲在己日、大荒落
辰己、又上己節字無釣桃者、爲終己未識義也云々、以上見、于韻
會、又ヤムトヲハルト讀時音ハシ、孟子予不得己待、未年然後己
之類、ステ已廣韻去声賓至志韻載之、註曰過事語辭、韻會韻府去声不
載之、

孟子己ノ字多、註曰助辭イツレモノアトハ難讀也、可知己註曰、
語助辭、孟子篤々乎、不可尚已放辟邪侈、無不爲己之類、私ニ云
釣桃トハ字ノカキヲスルヲ云也、カギトハ己此カギ也、辰己ノ巳
モヲワリト讀ム、己モ同字ト云意也、

一哉字與乎字少異ナリ、一兮字鳳兮々々、

一思字中庸日神之格思、註曰思語辭此思ノ字、ヨマサル也、

一則字此字古点ニ、上ノ字ノ下ニテ、トキンハト点スル、時ハスナ
ハチト讀ム事マレナリ、故ニ新註朱ニテ、則毎字如此点スルナリ、
是爲可正名古點讀落也、又墨点ナラハ、字ノ右ノ肩ニサシアケ
テ、每字スノ假名ヲ可点也、スト点才ハ必上ノ字下ニテ、トキハ
ト可点ナリ、トキハノキニハペ、如此可引也、キノ假名ヲハ不
用也、但トヘハトヨマレヌ処モアルヘシ、古點ニトキンハト、点
スルハカタコト也、又ノリトモ讀ム也、爲天下則ノツトルナゾラ
フトモ讀ム、堯則之又ノツトルモヨム、

一將・宜・當・盍・令・教・使・俾・遣・須・未・
ス・ベシ・ヘシ・ナン・ザル・ジム・シム・シム・シム・シム・ベジ・シ

此字皆二度讀ムナリ、點スルニハ、マサニヨロシク、ナンゾスヘカラクラハ、末假名ハカリモ好也、シテメハ皆下ノ字ニテ点シ、添ヘテシムラハ、當其字右シムト点スルナリ、令人知之類雖三字、用一二点古點ニ令如此点スレハ、一二ノカヘリ、二ノ假名シムニサシアフナリ、末ノ字ハタハ、末假名ヲハ点スルモアリ、又ハ不点アリシトトマバジノ假名ヲハ、左ノ肩ニ可点也、未不ノ二字ハ、ズトトマラバ、不可点也、

一與字此字讀多シ、ト・トモ・タミス・アツカル・アタウ・メス・ユルス・カ・ヨリ・與三子孟子與人爲善、註曰與許也、又韻會魚韻軟、字註曰今經傳通、作與、字俗以爲語末之辭、增韻疑辭也、

一大字大學註曰、大舊音泰、今讀ヲ如字、是濁可讀之註也、又論語ノ註ニ日、大音泰是ハスンテ可讀之註也、然レハ大略不音、皆濁可讀ナリ、

一其諸字註曰、語辭景召日、如此字音訓トモニ不讀也、既ニ有註上如有其諸字云也、此外語辭ト註スレトモ、不讀處アリ、涯分ソラニ讀時、其字アリト知ル様ニ、可記臆也、

一噫嘻吁於戲乎嗚呼、

一誰字誰爲誰與、一孰字此字イツレトモ讀也、

一何字イツレ・イツク・ナンソ・ナニヲ・イツカ・ナニヲ、何當何

執、

一奚字大略與何字讀同シ、奚自奚以爲奚、而奚其正奚、先此何奚二字、未假名バカリモ、又一字皆ナキコユル様ニモ、点スルナリ、一夫字ソレ・カノ、若夫成功則天也之類、又大略力ナト讀也、善夫吾知矣、夫有是夫不仁者、有夫不秀者有夫、今亡己夫吾知免、夫莫我知也、夫賢乎哉元和刊本、無吾知免、三字及以下之数字今從長本、

一日字ノタマハクヲ、ノタバクトハ鄉段也、平家ニモ賴朝ノタマハクトコソアレ、子曰ハ皆ノタマハクト点スルナリ、ノ玉ハク如此モ点スルナリ、又日トモ点スル也、イハクハ日如此モ点スルナリ、

堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子ハ皆ノ玉ハクト可点ス、但周孔モ對君上ニイハクト可点也、于見論語之往、

一如字コトシ・コトクニス・祭如在祭神、如神在上下、有ニ字如此讀也、又モシトモ、アルビハトモヨム又以下元和刻本、

一或ノ字アルイハ・アルハ、是ハ下ノイノ假名ヲ不讀也、又モシクハトモヨム、

一事字君上ニハツカウマツル、父長ニハツカフト讀也、事父能竭其力、事君能致其身之類、其外依註釋、叶世話抑揚之讀可有之、

一粢字此字依韻音訓カワルナリ、タノシミノ時ハ、洛葉鐸韻也、音染時ハ覺韻也、不音如字不ガウノ時ハ、音ハ効去声効韻也、此外依韻依聲、又依聲用字ノ音訓カワルナリ、禊トハ人也、人禊是也

用トハ人ノ能知才藝萬事所作是也、山ハ躰也、山ノ生長スル草木山ノ用也、字モ又如此、治字國治自然ニヲサマルハ躰也、治國人ノ所作ハ用也、躰ノ時ハ治ノ字去声也、用ノ時ハ平声也、用ノ時ハ平声也、食字モ如此イ、ト云時ハ躰也、音ハ嗣クラフト云時ハ用也、又音ハシヨク好字、經傳ニテ声ノ声有之、皆コノムト讀ムナリ、ヨシト讀ム時ハ皆不声、惡字虞韻ニ音ハ、烏註ニ日安也、語ニ惡乎成名、孟子ニ居惡乎在云々、又ア、トモヨム、孟子惡是何ノ言也、虞韻以下、慶長本無、アシト云時ハ、音ハアク、善惡是也、ニクムト云時は、音ハラ好惡是也、此類甚多シ、一見字声去聲綠韻也、韻會一韻兩處ニ出之、初ハ日見經^音切角清音視也、末日見形甸切羽濁音顯也露也、俗通作現声與反有之、皆アラワルマミユト可讀、八俗章ニ義封人、請見日君子之至於斯也、我未嘗不得見也、從者見之^之註日、請見見之見、賢遍反得見見無反也、マミニ童子見見、其二子アラザル天下有道、則見貨賢遍ノ反、中庸ニ見著龜見音、現声與反無之、皆ミルト可讀也、大學視而不見之類ル、ノ時モ同シ、見惡之類、一自字ミツカラトヨム時ハ、自此点スルナリ、オノツカラノ時ハ、自此点スルナリ、末假名ヲカラト、点スルハミツカラトモ、オノツカラトモ不知也、字以下數字、慶長本無之、一爲字爲ス爲爲爲如此點ス、イカニモ少シアケテ、字右肩ニ可点、

サケテ点スレバ、爲ノ字之ノ字点ハ、ナシニマキレスノ点トナス、○タメニス、○マキレスシテノ点ハナシ、テノ点ニマキル、也、爲政爲人爲爲爲爲^{セシスルトヲ}爲國之類、又爲^{タメニス}元和本曰^{五ヶ}曰是ハサケテ点スルナリ、爲ニス、右ノ肩ニ去声ノ声、有之皆タメニト可讀也、タメニト讀ニハ、經傳皆去声アリ、又爲ニ氣稟所拘之類ハ、去声ニアラス又以下慶長本、無アラス之役、元和本補于此、

一川此堅点二字時ハ、音ハ右キ訓ハ左也、二字ノ時ハ、音ハ字ノ下ノ中也、訓ハ字ノ下左ノ旁也、三字ママテハ音訓トモニ引込、大学二苟日新日新也、論語吾日ニ三ツ申々如也、天々如也、君子儒小人儒之類^{君子以下ハ、字元和刊本無之、仍慶長本}、又三字ツ、ケトモ不引處アリ、一家仁之類、又湯補文章トテ、一字ハ訓一字ハ音時ハ、能考字輕重其重字ニヨツテ可引、音訓点大学ニ其知至之類、又及四字二字ツ、引クナリ、王宮國都之類、一カリカネノ点ノ事、イカニモ本字ノ点畫、マキレス様ニ、左ニヨセテ点スルナリ、二字三字乃至五六字マテモ、下ヨリ讀ミノホセハ可用鷹金也、不可用一二点雖三字中^カノ予於等ノ置寺有之、可用一二之点、其一二ノ上二、又讀ノホスル字アラハ可用、上下之点人有貴於己者之類、上下ノ上ニ猶讀ノホスル字アラハ、可用甲乙点也、一二上下甲乙之点ハ、不点カナワサル處ニ用ル之也、古点任筆可点鷹金處ニ用一二、二ノ處ニ上下甲乙ヲ用フ、甚タ悪キ也、

一井オワ此假名ハ、依辭用之也、居字ナントヲ井テト讀ムトキハ用之也、又オワノ假名ハ、オモフ・オシム・ウタル・ワカルト云ニ用之也、下ニハ大略不用之也、是ハ假名ツカイ也、

点スルナリ、或ハ上、或ハ一二字樂如此ノ点ノ中ヲ、アクリハ傳写ノ時アヤマリアリ、

一丁ア七フ「トシタ」此假名、新註三用之、但シフヲウニ用フルハ、訓ノ讀ノ時ニ用之、音ニハ又不入声ノ字ニ用之、不入声トハ兩音ノ韻也、入法合十之類、東平声風去声孔上声、此平去上ノ三声ニハ、

フヲウニハ不可用也、丁ヲマニ用ルハ、コノ假名ニマキル故歟、

七ヲサニ用ユルハ、易レ点故歟、アノ假名ハアニマキレス様ニ、

イカニモナ、メニ引ク也、メノ假名ハメノ假名ニマキレス様ニ、

ナカク引ク也、又此メノ假名ハ、只テニハハカリニ点スルナリ、

賢其賢之類、又其字ヲ訓ニ讀辞ノ中ニ示シテ点スルナリ、指レ東

指化爲人君爲人善之類コト、此ノ假名メト同前、辞中ニ如此点ス

ルナリ、不得已母自歎也之類、其誠其言之類ニハ「トシタ」不用也、

一シメム此三ツ之假名、依其辭可用之、ムトメトノカハリ有様歟、

此シノ假名ハ未來之辭也、ヌノ假名ハトマリヌトテ、假名ノムスヒぬナリイハツル辭ナリ、無ノ字不ノ字之意也、

一子ヲネニ、ヲ専トキヲ時、古点ニ如此カエテ点スル事アリ、甚惡也、本字ニマキレ又ムツカシキ假名、畢竟無用也、

一字ヲ音ニ讀時、音ヲ末假名ハカリハ不点也、束ト如此皆点也、

一訓讀上ニテモ、末假名ニテモアレ、讀ミヤスキ様ニ、一方バカリ

一改字事、大學親民親ハ作新身有所忿懥、身ハ作心命也、命ハ作息、彼爲善之此四字一句不讀也本論語井有仁、仁ハ作人五十卒字誤也、孔子七十之時語也、加數年近、元和本句作回、今從慶長加假声

一不二和尚日、吳音漢音ノ事更ニ難信、然レトモ本國久讀ツケタ様

ニ、ヨマネバキカレヌナリ、一家仁三家者、儒書ノ中ナレトモ、

呉音漢音隨處讀之也、或經文禪話モ其マ、讀ム也、說禪寂滅教唱

アゲ、又雪山成道ト讀ムハ曲事也、セキベツセツセンヲ、セツサ

ント讀物笑也、又論語ノ三十四十スンテ讀コトハ、昔ヨリ俗書讀

ミ、讀ミツケタレトモ、文字ハ人前ノ用也、人問年ハスシテ、三

四十ト答ヘタラハ、カタコト、可笑也、只世界ニ申シツケタ様

ニ讀テ、早々達理爲肝要也、雖然鄉談其外卑辭ヲハ、又宜止之也、古點ニ不亦樂乎之類、イヤシキナリ、タノシマサルヤト、讀テ好

也、是ヨリ惣州望ナラバ、文字讀コトハ、無落字様ニ唐韻ニ讀ミ度キ也、其故ハ、偶一句半句ソラニ覺ユル時モ、ヲキ字不知、

其何字也、口惜事云々、

堯甲辰已下以甲子考之

七十二年

堯、起甲辰、至乙卯

六十一年

舜、起丙辰、至丙辰

四百五十八年

夏、起丁巳、至甲午

六百四十四年

商、起乙未、至戊寅

八百七十二年

周、起己卯、至甲寅

四十年

秦、起乙卯、至甲午

四百六十九年

漢、起乙未、至甲申

三百六十九年

南北朝、起乙酉、至丁丑

二百九十年

唐、起戊寅、至丙寅

五十七年

五季、起丁卯、至己未

一百二十年

宋、起庚申、至己卯

八十九年

元、起庚辰、至丁未

一百二十四年

大明、起戊申

日本、明應十年
辛酉、考之

以甲子考之、自堯甲辰至今年、明應辛酉三千九百四十六年、十九

史略云、堯甲辰至元順帝終年丁未通計、三千七百二十四年云々、

自堯甲辰已下至此也、字一限元和刊本不載之、依慶長舊本補

儒釋道三教者

一佛周四代、照王二十六年甲寅、四月八日生于天竺刹利王家、日本

地神五代不合尊即位以来八十三、萬五千六百七十六年六年慶長、周五代穆王五十三年壬申、入滅年七十九、日本不合尊八十三萬五千七百五年也元和本五十四年、自壬申至今年、明應十年辛酉二千四百五十年也元和刊本云、自壬申至元和十年甲子二十五、百七十三年也、按如竹命于時所改善也、後皆倣之、

老子周二十一元和本二十二代、代定王二年丙辰、九月十四日生于楚國陳郡曲仁里、日本第一神武天皇五十六年、佛後三百四十五年也、周二十五元和本五作六、代敬王二年癸未西去壽九元和本九作八、十八載日本第三安寧天皇三十一年也、自癸未至今年、明應辛酉二千百十年也元和刊本云、至元和十年甲子、一千一百四十一年也、

孔子周二十三元和本三作四、代靈王二十一年庚戌、十一月四日生于魯昌平鄉陬邑、此時老子五十五載、佛後三百九十九年、日本二綏靖天皇三十一年也、周二十六代敬王四十二年、魯哀公十六年壬戌四月八日卒、年七十三、日本第四懿德天皇三十元和本一作二年、自壬戌至今年、明應辛酉二千七十二年元和本云、至元和十年、甲子二千一百三年、

周十七代惠王十七年辛酉、日本天王之始、神武天皇五十載、即位于日向國宮崎郡、治世七十六年、壽一百二十七歲、自辛酉至今年、明應十年辛酉一千七百九十八年也元和刊本無以下八條、仍慶長本補之、

一秦始皇即位元年乙卯、日本第七代、考靈天王四十五年、至明應辛酉一千八百三十八年也、

一漢高祖即位元年乙未、日本第八代孝元天皇九年至明應辛酉、千七

百九十八年也、

一唐高祖即位武德元年戊寅、日本三十三代、推古天王四十七年、此時聖德太子四十六載、至明應辛酉、九百六十四年也、

宋太祖即位、建隆元年庚申、日本六十二代村上天皇十四年、至明應辛酉五百四十三年也、

一大明太祖即位、洪武元年庚申、日本百代後光嚴院彌仁十七年、應安元年至明應辛酉、百三十四年也、

一年號始前漢第五代、洪武帝建元年、日本第九代、開化天皇十八年、至明應辛酉千七百三十二年也、

一日本年号始、四十二代文武天皇五年、改元大寶、自漢ノ年号ノ始、八百四十年後也以上八條載慶長寫本

一南宋二代、孝宗淳熙十六年己酉、新註行于天下二、日本八十二代後鳥羽院尊成、文治五年至今年、明應辛酉、三百十三年也、

一大明二代、太宗永樂十三年乙未、四書五經大全獻之、日本三百二代稱光院寶仁二年、應永二十三年元和本作二、今年明應辛酉八十七年也元和本云、自乙未、至元和十年甲子、二百十年也、

和點終

慶長十六年、九月八日、於山川湊書之書當作寫

一桂菴和尚入唐時、問學校之先生三曰、日本儒書讀漢音二、佛書可讀吳音三有法度、其義如何、先生曰何決吳音漢音乎、只因便可讀

云々、此以四書新註之和訓不從、日本之法三而、從大明之法、故

二不讀大學而讀大學、不讀論語、而讀論語也、江夏環溪先生之弟子、黃二閑之和訓亦如レ此、桂菴和尚入唐傳授之例多シ、今略之述其一端而已、

一新註和訓者本、岐陽和尚之所作、而中桂菴入唐之后、少改之後至文之和尚、又少改之、然舉世謂文之和尚點也者、文之和尚之時、漸達世故而已、

四書新註和訓達洛陽之說

我如竹老師謂、甲斐信玄公之鳴鶴惺窓先生者、天下之英才也、甲斐亡國季安接、櫻窓集播州赤松廣道、善遇櫻窓、慶長五年廣道自殺、其國遂滅、誤傳聞、此云、甲斐信玄ト、之後卒落シテ、于洛陽而愁四書新註無和訓、自到于中華之地、欲於新註之奧義點和訓、故西欲下房津即薩州坊津赴中華、隔風泊船、于山川津於是寄宿、于正童寺留滯數日、有僧誦讀論語者、即取其書見之、新註和訓珎其意、一唱三嘆シテ問曰、此和訓何人之所點哉、僧答曰、大隅止興寺之住僧、文之和尚之點也、先生拍手而驚、然日我欲中華者八無他、一爲點新註和訓、而已今幸有此書、則何赴于中華乎、乃尤得其書、以達洛陽、先生講新註曰、洛陽之書生聽者、不知幾千人ト云事、于時予也滯在于本能寺、而勤法華宗門之學、同志之僧倡聞新註講說、予思新註和訓之藍編者、予之生國也、何不尋其源乎、忽辭洛陽到薩陽遊學、于文之和

尚之門下者八年矣愚也、雖不不敏至於章句、訓話之末頗解其義矣

中文

略此

貞享二年丙寅正月望日、菡萏峰松下老人

小野季定、八十二歳記焉、

三、戦国英雄集録抄

戦国英雄集録抄

知能類

桂菴和尚

桂菴和尚初東福寺ノ禪僧也、儒書ヲ学ヒ、不熟古註ヲ讀、疑ヲ持スル事年アリ、後新註ノ四書ヲ見、欽然トシテ心ニ合ス、遂ニ大明ニ入儒ヲ傳ント欲シ、傳奏ニ寄テ勅許ヲ請、帝以奇才トシ許之、既ニシテ西海萬里ニ航シ、數年ニシテ儒ヲ傳ヘ来ル、先舟ヲ薩州ニ着ク、太守貴久聞テ招之、儒寺ヲ建テ居師トス、桂菴ハシメ道行天下セント欲ス、然レトモ義晴及管晴元等、無道ニシテ與議スヘカラス、故ニ薩州ニ留リ再ヒ帝京ヲ不顧也季安接 義晴生於永正八年、而桂菴坂自明爲元明五年、然則此云義晴誤義尚事、晴文亦政長・政丸等之誤乎、抑又承勝元命使於明國、文明五年五月、勝元卒、桂菴又自明也、蓋在其卒後、故就薩聘亦未可知也、島津貴

四、鳩巣不亡（志）鈔卷第一抄

鳩巣不亡鈔卷第一抄

一抑學の由來する所を考るに、伏羲の河圖（志）起る、文武周公に傳はり、孔子・孟子に達し、程子を歴て朱子晩年の工夫ニ至る。古傳を考るに、伏羲氏の天下にわたる時、就馬河圖より出、背ニ奇文あり、伏羲圖して、後世に傳ふ所謂河圖也、文ハ則天地陰陽の教也、今接するに、天地も道より生し、万物も道より生し、一物を生ること、実ニ一天地を生ずるか如し、故ニ天地に万物の教あり、万物に天地の教あり、就馬獨然にあらずたり、其文の掲焉なるのみ、聖人是を以て、後世に傳らる事ハ、天地も本道より生し、万物も本道より生る故に、道に成長し道に老衰して、道ノ外ニ進退すへからざる義を示す、道といふハ陰陽也、陰陽ハ相はなからくことなく、其得源を語るときハ、外陰にして内陽也、其道添を語るときハ、外陽にして内陰也、陰陽のはなれざる事を見よ、故ニ陰陽ハ天下に満て、万物を不残今天地ニ考れハ、天ハ陽にして地の爲

久与島津武久和音相以、故傳聞誤益不、此誤耳、

此誤耳、

ニ生し、地ハ陸にして天の爲ニ生すを、海陸と考ふれハ、陸湯にして海の爲ニ生し、海ハ陰ニして陸の爲に生すを、草木ニ考ふれハ、根ハ陰にして、枝葉の爲ニ生し、枝葉陽にして根の爲ニ生すを、文躰ニ考れハ、手足ハ陽にして、躰の躰の爲ニ生し、躰は陰にして手足の爲ニ生す、今人倫ニ考ふれハ、君ハ陰にして、臣の爲ニ生し、臣は陽にして陰の爲に生す、実ニ天下の万物、内外なき事あたわす、内外ハ陰陽也、実ニ天下の萬物四方なき事あたわす、八方なき事あたわす、四方も陰陽也、八方も陰陽也、陰陽一道也、故ニ天下の万物ニ、道ニ生すといふ事なく、道ニ不成長といふ事なし、聖人ハ是を知て是を能す、愚人ハ是を知らすして是ニ從ふ、故ニ聖人ハ就馬の数を知りたり、其心奇ニ逢ふか如し、是を圖して以て後世ニ傳へ、是ニ則て是を作るハ、孔子の堯舜を祖述し、武文を憲章するか如し、皆後世の疑を定めて、億兆の信を生せんか爲也、代かはり時移りて、道學をとなへたり、周の文王ひとり、河圖を傳候て、能易道を弁ふ、殷の紂か爲に羑里ニ苦し与、文王老さを見て、易ニ辞を繫道を後世ニ傳へんとす、既ニしてゆるされ候て周ニ帰り、武王周公ニ道を傳ふ、武王ニ至て殷滅す、善其道を天下ニ行ふ、武王崩して周公執政す、成王の長成して、周公讒を蒙り、國て僕を辞して、山境ニ趣き、危難ニ及事三年也、終ニ道の恥傳其を患て、易に筆作す、周世おどろへて、

孔子出弘く往聖の道を学て、最易を貴婦静淵初道を傳ふ、孔子ニ先立ツて卒す、孔子患て詩事を刪り、禮樂の端をひらき、三庵ニ繼て易を明にし、道を後世ニ傳へんとす、晩年曾子一貫の道を傳ふ、年少して道未長、孔子不安麟を感じ、春秋を作り、孔子卒して道曾子にあり、三省の切を積ミ、戰兢の實を致しめて、終ニ聖人の心情を継ぎ、人修るに忠恕を以てし、子思を得て道を傳ふ、子思の時孔子門弟の學、天下に遍しといへとも、悉く其道を失して、功利を貴む、子思ひとり天下性道を弁て、學者聖人ニいたるべき事をしる。終ニ中庸を作りて、孔子の道を傳ふ、子思卒して後、孟子出中庸をみて、逆を曉り、歷代の書を破、學して赤子の心ニ立帰り、大人の道を安し、浩然の氣を養ひ得たり、孟子の後久しく道不明、宋ニ至て周張邵の學、天下に美たりといへとも、猶大道をしらず、河南の程伯子出るに至て、終ニ孟子の心法を継ぎ、故に周張邵の學、後來却て程子を爲宗、大道に趣き向ふ、是に於て天下の學孔孟を貴て、諸子不可聞其をしる、然レトモ程伯子卒するに及んて、道を傳ふもの多からず、たゞ第程叔子の學、諸儒に冠たり、易の不知易ニ、を學ひて、終ニ傳を作る、年を経て新安ニ朱子出、二程にたより、孔孟ニ本つき、歷代の高を學ひて、往雪の道を明にせんとす、終ニ大學・論語・孟子・中庸を以て四書とし、毛詩・尚書・周易・禮記・春秋をもつて五經とし、

普く書理を講談す、堂々重んする所、四書と毛詩と周易とにあり、故ニ其註解を作て、聖學を後世ニ傳ふ、晩年頻りニ徳ニすゝむ、其註解を顧て、於本經不合ことを患ふ、忽争をなしてこれをあらたむ、大學トはしめて、論語關雎の章ニ至る、不幸にして卒す、本朝に傳はる事、仁徳天皇の御宇にハシマリ、南家・江家其名を蒙るといへとも、皆漢儒の説ニ迷ひ、唐賢の學ニ落人、調章記誦の外心ニ傳ふる所なく、近代東福寺の桂菴、是を學て頻ニその説を疑ふ、既ニして朱子の四書を見る、快然として心ニ合事あり、終ニ大明ニ入て、儒を傳て先薩州ニ至る、島津貴久宗ト學ニ志は、禮を卑し幣を厚くして、桂庵を招き、師弟の儀を以て交る、桂庵謂、我大明ニ入るとき、只儒を傳へん事をおもふ、儒を傳へて後、朝ニ帰て儒を弘めん事をおもふ、然者今朝に帰て、儒を不可弘、貴久独り儒を可傳我、是を去て又何國にか行んやと、終ニ薩州ニ止る、戦國間政教分離す、故ニ其學帝都ニ聞ふる事遲し、たゞ妙壽院藤歛夫多年、儒書を學て、古註の本經に合はすことをして、後新註の大全等を見て、朱子の學ニ本つきて、惣明の儒法に趣て、九州ニ至る、不幸にして病を発し、帝都に帰り、備出候諸子の傳説を見て、既ニ儒學の大意をさとる所、按るに本朝道を聞こと、唯百有餘年、中國道學事なし、五十餘年儒學を以、外典とし、孔子を以て小賢とする事久し、桂庵妙壽院の類、猶蓋染の

汚れを不去、勤勞の間に憂死し終る、故ニ其學世に傳ると不得、皆一代にして滅却す、所詮道は天地万物の儀で、生長する所、陰陽不相離もの也、河圖ニあらはれ、周易ニ述作せらる、是を學ふを學問とし、是を知るを得道とす、若能河圖を弁へハ、伏羲に倣らずして易を作、文王・周公に不倣して辭を繋、孔子ニ不倣して大傳を作るへし、たゞ河圖を不得、故ニ文王・周公の辭を學び、文王・周公の辭を不得、故ニ孔子之大傳を學び、孔子の大傳を得、故ニ程朱の傳を學び、程朱の傳義を不得、故ニ諸子百家の書を學び、流に隨て源を怠り、終ニ流連の迷ひを蒙る、聖賢人をして、流連の迷ひを蒙らしめんとにあらす、只愚人の道源を尋ざられる爲也、早く流に從て、帰路を忘ほくの迷ひを知、常々其道源を立去事なられ、諸聖賢之筆作、悉其源を知らしめん可爲也、其源を知らしむる事ハ、其源ニ帰らしめん可爲也、諸儒百家の書ハ、程朱の論を知らしめんか、程朱の傳義ハ孔子之大傳をしらしめんが、孔子の大傳ハ文王・周公の辭を、しらしめんか爲也、文王・周公の辭ハ、伏羲の易をしらしめんか爲也、伏羲の易ハ河圖の理を知らしめんか爲也、河圖ハ又、其源をしらしめんか爲也、故ニ其源をしる時は、河圖も學ふに足らす、天地も法とするにたらす、陰陽も弁るに足らす、只學者その源を知るべし、源ハ道也、道ハ陰陽也、陰陽ハ一仁心也、一仁心ハ赤子の心也、赤子の心ハ大人

の心也、故大人ハ不恕の感、不言の信無爲の事あり、後世謹而誤る事なら禮、

五、論語集註卷之三云云

論語集註卷之二 府士本田親章藏本也、聞諸親章、嘗得府市唯存此冊、餘無由求惜哉、

公治長第五

此篇八、皆古今人物賢否得失、蓋格物窮理之一端也、凡二十七章、胡氏以爲疑多子貢之徒所記云、

子謂、公治長可妻也、雖在縲絏之中、非其罪也、以其子妻之、

公治長、孔子弟子、妻爲之妻也、繅黑索也、綫轡也、古者獄中以黑

索拘繫罪人長^カ爲人無所考、而夫子稱其可妻、其必有以取之矣、又言其人雖嘗陷、於縲絏之中、而非其罪、則固無害於可妻也、夫有罪無罪、在我而已、豈以自外至者爲榮辱哉、

子謂南容、邦有道、不廢、邦無道免於刑戮、以其兄之子妻之、

南容孔子弟、居南宮、名^{紹音}、又名适字子容、諱敬叔、孟懿子之兄也、不廢、言必見用也、以其謹於言行、故能見用於治朝、免

禍於亂世也、事又見第十一篇、○或曰、公治長之賢不及南容、故聖人以其子妻長、而以兄子妻容、蓋於厚兄而薄於己也、程子曰、此以己之私心窺聖人也、凡人ノ避嫌者、皆內不足也、聖人自至公何避嫌之有、況嫁女必量其才而求配、尤不当有所避也、若孔子之事、則其年之長幼、時之先後皆不知、惟以爲避嫌則大不可、避嫌之事、賢者且不爲、况聖人乎、

子謂、子賤君子哉、若人魯無君子者、斯焉取斯、

子賤孔子弟子、姓^ハ、名^{不齊}、上ノ斯此德、子^達能尊賢取友以成其德者、故夫子既^嗟其賢、而又言、王若魯無君子、則此人何所取以成此德乎、因以見魯之多賢也、○蘇氏曰稱

人之善必本其父兄師友、厚之至也、詳說且称人之善^{シテ}可言厚、又推本其父兄師友之善、則是厚之又厚、故曰厚之、佗不載、此卷末如左、

元龜四季癸酉四月十日、春水書之^{紙數四十五}、

新註論語全部一筆

季安按、相屬系圖如竹翁日、聞諸文之、桂菴在明講曹氏詳說等、今此點本亦將其說如旁註、則其爲桂菴所改正者明^上矣、愛甲喜春云、聞諸如竹新註、和訓岐陽所既創、而迨桂菴反自明、又問正誤至文之、亦少改正以授弟子、而洛陽藤惺窩悼四書新註、未有^{シテ}和訓欲遊學於明^二、註之倭訓西寓山川久矣、時聞僧等既讀新註論語、於正童寺假而見之、熟味其義無所僂點、不称其意、乃問曰誰作之

乎、僧等日我文之和尚所點本也、於是惺窩絕歎伏日、今將入明亦惟無佗求之而已、幸既得見焉、又何遠航乃躋而還、下惟授徒、洛

陽書生就入門者若干人、時會如竹學法華教萬本能寺、而其徒或勸共學之、如竹以爲此學也、出於薩藩挹流乎、遠則不如歸國近尋其源、乃辭洛陽還、就文之受業八年、頗通其義云、按惺窩播州人、自幼爲僧名舜首坐號、妙壽院雖讀佛書、志在儒學、播州赤松廣通左、善遇待之、故從游洛、文祿元年如名護屋始謁、
神祖自肥之豐遊觀西海、是年太閤使細川幽斎使、於薩
門尉、
二年夏如江戸謁、
三年夏如江戸謁、
四年夏如江戸謁、

五年夏如江戸謁、

六年夏如江戸謁、

七年夏如江戸謁、

八年夏如江戸謁、

九年夏如江戸謁、

十年夏如江戸謁、

十一夏如江戸謁、

十二夏如江戸謁、

十三夏如江戸謁、

十四夏如江戸謁、

十五夏如江戸謁、

十六夏如江戸謁、

十七夏如江戸謁、

十八夏如江戸謁、

十九夏如江戸謁、

二十夏如江戸謁、

廿一夏如江戸謁、

廿二夏如江戸謁、

廿三夏如江戸謁、

廿四夏如江戸謁、

廿五夏如江戸謁、

廿六夏如江戸謁、

廿七夏如江戸謁、

廿八夏如江戸謁、

廿九夏如江戸謁、

三十夏如江戸謁、

卅一夏如江戸謁、

卅二夏如江戸謁、

卅三夏如江戸謁、

卅四夏如江戸謁、

卅五夏如江戸謁、

卅六夏如江戸謁、

卅七夏如江戸謁、

卅八夏如江戸謁、

卅九夏如江戸謁、

四十夏如江戸謁、

四十一夏如江戸謁、

四十二夏如江戸謁、

四十三夏如江戸謁、

四十四夏如江戸謁、

四十五夏如江戸謁、

四十六夏如江戸謁、

四十七夏如江戸謁、

四十八夏如江戸謁、

四十九夏如江戸謁、

五十夏如江戸謁、

五十一夏如江戸謁、

五十二夏如江戸謁、

五十三夏如江戸謁、

五十四夏如江戸謁、

五十五夏如江戸謁、

五十六夏如江戸謁、

五十七夏如江戸謁、

五十八夏如江戸謁、

五十九夏如江戸謁、

六十夏如江戸謁、

六十一夏如江戸謁、

六十二夏如江戸謁、

六十三夏如江戸謁、

六十四夏如江戸謁、

六十五夏如江戸謁、

六十六夏如江戸謁、

六十七夏如江戸謁、

見よいかに、雲路の鳥ハとひ消へて、かへるゆふへの、山もありけり、
山河季安いへらく、こはさつま国、山川にもさたかならねど、海路の題のまへ
にのせ、如竹のいへる惺窩山河に、走れるとの事ニも、あひぬれは、か、
る時の音ならしと、こゝに
載せて、うんりんに備へぬ、
世をもすて、世にすてらる、身なればや、さしてハうとき、山
川の水、

〔頭書〕「そつまかた、雲にはえん犬もはや、桜さ

く庭の冬の明ほの」

風標着鬼界島、時有詩歌云、

台徳廟秋飯洛、讀性理書悼世、無善師忽欲入明、既發筑陽船遭暴

風標着鬼界島、時有詩歌云、

もうこしへ、わたり侍らんとて、つくしまでくたりし時、しれ

る人のもとへ、よミてつかはしける、

なれてうし、人の心を月にはなに、おもひいくへの、山のおもか

やまと歌の、あはれかけり、目に見へぬ、鬼の嶋ねの月

け、

いつしかに、行とも見へぬ奥つぶね、あとなき波の末のしら雲、
欲渡大明國遇疾風、而到鬼界島

三人此地謫生涯、二士賜環一士嗟、若是浮遊天外去、波問鬼界即
神植、季安接、本朝通記、治承元年六月、平相國清盛流成経、康頼、俊寛、於鬼

界島、詩云三人此地謫、即謂此而明年十一月大敵、成経・康頼遇敵、俊寛不与焉、

即詩云、二十賜環、二十曉此也、又按東鑑、正嘉二年九月、幕府宗尊流平内左エ門
尉俊職、於硫黃島云、昔治承中、祖父康頼流於此島、今也其孫俊職亦同、於此又元

徳二年七月流僧文觀、於硫黃島見太平記、且成経等之新帰也、約熊野於硫黃島、明
應八年、我、圓室公命新其廟、桂葉爲之記云、成経等帰、然後世皆知有硫黃之島、
なし、

おなしき時

薩摩かた、八重のしほ風告やらん、あはれうき身は、おやたじも

なし、

載在雜著據此所謂、鬼界島不異、今臺界島同、即爲今硫黃島明矣、今硫黃隸薩州川
辺郡舊名沖、小島地產硫黃、硫黃色黃、故方言日、伎比御志麻、因後稍轉作鬼界字、
然至成經等得教帰世遂謂之、硫黃島可以考也、今臺界島者、上古同今德島、永良部
等屬大島久矣、大島舊名天見日紀、天武帝十一年、阿麻赤人等賜祿有差、又讀日本
紀文武帝二年、希美人等未貢蓋此也、僧文之詠琉球詩、有天水渡語、謂永良部至大
島洋中云、而今大島等利縣節田村、有地名天見嶽、亦其遺名爾、蓋南島相距多、互
遇望唯大島否其涉之也、天水渺茫不見一票、因名天見平、

文永三年始貢琉球、後日山北亦此等地也、嘉吉元年及琉球、蓋附庸於薩州薩摩府
琉球爲見文龜二年、桂庵所著文義雜著、至慶長十四年、始遣代官鑑大島等時鬼界尚屬焉、元祿六年遂答其請、別置代官是ヲ、爲今臺界島。

又甲午文祿二年三月、其母歿於京、時遊關左、不及看病客舍、聞計
悔遠遊久而、有詩云事見其自序、及古今醫案序等、今此取大意爾

歸養計遲情已空、參商千里隔西東、吾生不幸處丘子、慟哭無端樹夕
風、

其志雖慕中華、欲往見文物不遂、而歸以爲聖人無常、師求之六經
足矣、未幾與朝鮮差沉書曰、赤松公即子左工門尉廣通此也、令予言、於足下
日本言儒者唯傳漢儒之學、而未知宋儒之理、四百年來不能改之、
予自幼無師而獨讀書、自謂漢唐儒者、不過記誦詞章耳、決無聖學
之見識矣、唯韓子有卓立、亦非無失也、若無宋儒豈後世誰紹其絕
緒哉、然卜于日本國、今既如此、而一人不得回狂瀾、於既到故

赤松公、今新書四書、五經之經文、使予以宋儒之意、如僕訓于字
傍、以便後學、日本唱宋學之義者、以此冊爲原本、足下計之事、證
其實、跋諸冊後是公之素志、而予至幸也、足下計之事、見惺窩集、
及其行狀而不言、嘗予至山川購文之等、所僕點註事、然又祿中、
其至鬼界則行狀毛亦言、其事且本集載、其時所作詩歌、而所謂鬼
界即爲今硫黃島如、既所引證焉、而皈自南島、必皆入薩山川、古
今爲常今山川福元村、有正竜寺、明德元年、恕翁公命僧虎森所
創云、而山川港爲海船所輻湊、故世、儒僧掌書簡事、因其二世案虎森以應永十年、七月廿九日化指宿大圓寺、名郁芳者、學於桂菴親受其業事、
此云郁芳二世、疑當三四世誤、詳見郁芳下、上云桂菴虎森親受其業事、
見漁唱六世月溪受學郁芳、見亂道集七世問得、文祿元年、大閣遣
細川幽斎未巡三州、省寺社田時特命問得、仍掌書簡事賜之、寺田
如故事見幽斎書、及由來記等、

正竜寺藏

當國寺社領、悉勘落候、雖然當所之事、唐船以下還之伴候、一ヶ
寺退轉不可然之條、寺領之事如前申調候、全領知可被勤行事、
肝要二候、恐々謹言、

八世文岳亦、以此文鳴於慶元間、見他記載、問得、文岳皆疑月溪
弟子、因其寺世傳所註僕點本者、固有謂焉、如竹云惺窩於正竜寺、
購此等點本、則當其文祿中七世間得特講儒學、時而惺窩皈自硫磺
島事、而赤松廣通使惺窩、新加和訓於四書等、請姜沉跋其卷末、

則當慶長三・四年間、何者姜沅、慶長二年始末日本、寓廣通家、而廣通死於其五年、可以知也、又按林羅山年譜等、慶長五年羅山年十八、當時清原氏儒者講四書也、唯學庸依朱子章句、而如論孟猶讀古註、未見集註、於是惺窩雖爲儒宗、避世不接人、是歲羅山初讀四書新註、以教徒文明十年ヨリ、桂菴未テ唱朱學於薩藩、至此二百一十二年、至羅山時所以盛行、世考見上文明十一年註、但塚田多門曰、程朱學渡於神祖世、惺窩道春學得其教云々、其所由未故也。

愈慕惺窩之風、九年秋遂入其門、觀此則羅山所始讀、亦爲惺窩所新購本明矣、而亦不言其出未事、抑文之八生於弘治元年、惺窩生

於永祿四年、而少文之五年、如竹生元龜二年、少文之十五年、羅山生於天正十一年、少文之二十七年、於前所載元龜四年、則文之年十八、惺窩年十三、如竹年三、而羅山時未生、據此元龜本非彼等點、亦以可證也、況如桂菴所倭訓大學既刊行、於永正以前、今其板本尚有存者、其新註倭訓之行於薩藩如此其久也、羅山年譜云、清原氏等所讀學庸章句、亦當此板本也、而惺窩自以所倭訓爲日本書、宋ノ學始焉、則余不信之、雖姜沅跋以證其事、本朝鮮人方未、未文豈能識故實乎、若當其時使文之等、讀惺窩與姜沅書、應必規其言屬妄誕也、惜乎僻遠不及時規之遂至、使其以前、西藩奉宋學者無獨聞世、但時之言儒者尚多、禪僧然至惺窩、始逃其佛遂歸儒道、乃有妻子於其僚童卓識、後世尚稱儒者中興矣、雖然若其倭訓新註、則如竹与彼竝、時所識而言、既如載前稽諸彼集、亦

足可徵、以是觀之實私淑於桂庵之傳、而有剽竊者也、匪但惺窩世俗所謂羅山等之各點四書云、非草創之、亦仍舊點隨意改正、脩飾之爾何者、前自桂菴倭人之點書者、其用國字也、多子作木、作レ爾類至、桂菴始慮其嫌本文、而不亦簡約、易之用子ニ等字、又於顛倒涉數十字句古人點之多用雁金、桂菴之教其徒也、必用一二上下甲乙等字、是歲遂以國字著書言、倭點法如上所載、爾未倭儒莫不取、爲法焉、惟窩羅山等皆英材、而博識多通、雖固絕倫亦於此等法不能、必免其軌範、可以觀焉也、

又按西藩野史曰、惺窩將入明學儒、而到筑前洋中遭風、着鬼界島又入坊津、當此時桂菴版明國、講朱註於一乘院、惺窩大悅曰、是我所求道也、乃徒桂菴受其朱學、悉寫四書五經大全、程朱書、以帰洛陽首講說之云、蓋得能通昭取諸口碑、故有傳聞誤所謂、桂菴則其末徒間得之誤、一乘院亦正龍寺之誤也爾、註備異聞、蒙甲喜春云、在伊
寺今基、則影東帰菴開山、故ニ姑々從基ニ、正月會其徒、有新軒聽管詩、亦採載此題、然レトモ、諸所屬多眞鏡ノ作、故採備後ノ考ニ爾、

梅花院落小西湖、鶯向華軒求友子、住處適心新築好、人同此鳥止丘隅、

花構照山塵外春、拳鄉今賀一軒新綿、蠻声裡遷喬嶽、雲路飛騰

學主人、

又

門人巢松

新軒賀客醉如泥、雅席催詩黃鳥啼、故向欄前蹴花落、金衣影映

玉東四自註玉東
西酒杯名

是歲五月、天眞夫人夢其母、多多良氏、

豐前後、筑後三州太守大友政親大人也、以應仁元年生、天眞夫人其婦、我公事見下鳥取政秀傳、文明十三年註、

樹樹院遇禱其會也、三年癸亥正月、歲旦爲詩賀、方丈新兼謝檀恩記齒例也、

丈室修營今一新、老禪七十七青春、寺門興盛檀家刀、花下焚香祝大人、

是年春、使龍源寺鈞雪代已領安國寺主席、而自老於島陰、永正元年甲子十月序、巢松集應其需也、

夫山之秀也水之清也、豈白鳴其勝哉、必歎詩人文士之播詠、而善鳴者也、巢松以安老人遠辭洛之惠山、而留滯蘿陽之地、茲歲孟夏僧侶坐夏之初日、作唐律一章、鳴玉龜山之勝景、爾未無日、

而不言詩、凡公府四方之山、官城三面之水一入、公之品題則水

益清焉、山益秀焉、寧不爲榮乎、遂逮夷則初吉一百餘首錄之、

神之并平生所作之詩文同持、而就予徵序、予素昧乎、詩文實倍聽於聲、問道於盲者也耶、然而不得已、則如何贊成矣、吁熟顧

叢林全盛之昔、碩師耆老厥德望層聳者、昭乎、心目之際當是時天下之縕徒、一登五岳之巔、而謁諸老之門、則人咸稱之、蓋

以麗水昉生無非金之沙、崑山之昉出、無匪玉之石、特若南禪蘭坡禪師、心宗洞達外學兼全、每詣闕下朝講經夕留詩、是以王臣之敬崇重、恰如璉三生之於仁宗、又似蘇八州之於惠林、此翁既逝矣、續者克鮮哉、以安曾親炙于蘭坡十有八年、聞禮聞詩豈徒乎、家語曰、與善人居如入芝蘭之室、久而知其芳公之才、何翅蘭室之薰染而已、惠山者玉之崑岡也、洛涯者金之麓水也、予雖不解詩文、竊考其出處美、則其言非琢金玉耶、其辭非吐芬芳乎、矧亦集中儘有感今思舊者耶、由是觀之予之與公老壯雖異、升沈粗相似焉、語葦寺則公翫臥雲橋上月、而撫千松之翠、予醉鎮春亭畔花、而嗽合洞之流、其興不淺、今復共爲羈旅之客、彼葦下之遊邈然也、行入山林則共鹿豕成群、坐對滄浪則除鷗鷺無友、吾衰矣、不忍其寥闌、公能甘其閑靜而樂以詩文、耽樂不亦大乎、所謂不移心、則窮達而克樂天者、君子之性情也、是詩文既本乎性情、則匪敢可議者、仍爲序、

時永正元年甲子、蜡月初吉

前建仁桂菴玄樹七十八歲、書于桂樹丈室、

三年丙寅 謂大醫師外郎杏林園桂菴
虎溪流水市橋東、紅杏成林色映、空結子綠知家產足、飛花那忍五更風、

六、京五岳諸老詩

老拙任皇明入貢之節、留滯泉南、杏林遺書求屬和、顧往日既有識荊之雅、而同好宜減於陳公哉、初應其請後篇寫、區老懷一粲於千里之外、

京五岳諸老詩

京五岳諸老詩

學鑑今時、郝翁、名聲籍々播閥中、杏林交義辱支許、海外九州曾向風、長安遠近日過翁、輦輶曾遊在眼中、桂子天香我同稱、梅檀簷菊一家風、

愚夫嘗從公事、薩州淹留也、按文明十三年辛丑秋、來而十月辭歸、日州安國堂上大

和尚、慈憐寬旅懷、惟夥矣、帰洛之日辱賜佳事、以壯行色、仍求和篇於洛下諸老、而奉呈金貌座下、十四年壬寅春承聞昨失海南、今

見求其遺稟、諸老存亡相半矣、雖覓於各所不獲之、愚夫亦連書佳篇於一紙、藏于篋笥日久矣、八人奪而成烏有、彼是可憾矣、

弗顧醜拙、謹賦短章呈上貌側、式矢區々萬一者焉來便刪潤尤展老眉、

陳員外郎杏林祖田九拜

曾傳雪曲洛翁々、萬里海山瞻望中、聞說追香難掩處、一枝丹桂紫宵風、

日州安國堂上桂庵大和尚、乃瑞龍遺局南遊東帰以未、道價被于九州、王道尚化、以故不屈駕、而拳視於名利東山之篆焉、頃有陳氏外郎京師、所居號杏林、西阻脩鴻鮮音耗、今茲夏末安國僧徒往來夕候、杏林製^{シナ}抒離索之懷、仍請雜下諸名繩、令同于韻

章奉寄、

陳郎和寂說禪翁、置我諸山唱和中、世事紛々心在彼、葵花向日繫因風、

景徐名周贊号宣軒
宜竹々隱子周麟

桂翁先友是蘭坡翁、聞昔龍山會坐中、前輩凋零苦老矣、洛陽寺々見秋風、

〔頭書〕「积桂悟号了庵、年八十三、奉使入明明帝詔住

育王山、賜金網衣、公鄉緝崇德末、謁正德八年、當永正十年、解印東帰、諸儒贈言、王陽

明序曰、母之惡奔競、而厭煩攀攀者多避、而之
就焉、爲积有道不日清乎、撓而不濁不日潔乎、
抑而不染、故必息慮以苟不如是、則雖皓亦逃
租縣而已、其所道如何耶、今有日本正使推雲、

國王之命奉貢、珍於大明舟抵鄭江之齋寓館、

前龍峰松蔭景脩稿

於觀予嘗過焉、見其法容潔脩律行堅潔坐一室、

〔頭書〕「文龜元年ハ六年、明応九年ハ六年也」

左右經書鉢木自陶皆、楚々可規愛非清然乎、
与之辨空則出所謂預修、諸殿院之文論吾教異

壯遊如昨向衰翁、五十餘年離索中、不識此情傳得否、海南萬里

同以竝吾聖人、遂性閑情安不謙、以肆揮然平、

且未得名山水、而遊賢士大夫、而徒靡曼三色

謾同陳外郎寄桂菴和尚芳押

不接、于目滯畦之鑒、不入于焉、而奇之行

不作于身、故其心日益清、志日益淨、偶不期

海西珍重桂菴翁、赫々聲名屬月中、莫道遺賢今在野、德香吹滿

九天風、

與之文字交者、若大寧公及諸縉紳輩、皆文儒
之擇也、咸惜其去各爲詩章、以詭飲追躅固非
貨、而溢者吾安得不序憶還國、入內帝敕住南

禪寺悟、以應永三十一年甲辰生、」

洛下陳氏外郎詩、以奉呈日州安國桂菴禪師、予久願識荊唯
事說頂、是以舉於曩時、梅子佳偈頗拙和、助焉耳、電覽幸甚、
誰圖遇裔有茲翁、才譽蚤タダモロコ稠廣中、吐出大梅々子偈、至今禪
味慕禪風、

依陳員外郎韵、奉簡日州桂庵老師、一咲惟當

雲頂野納集樹此字欠
疑樹也

桂菴和尚大禪師、迺吾龍山才望也、蚤還紫陽之閭里、其齡幾
乎越於古稀矣、孰無來暮之歎也耶、先是六七年榮領於東山玉
府之鈞帖、雪樵蘭坡翁製駢儻抒質、寔九峰疏也、繇是吾山故
舊相議曰、如禪師本是宗匠也、出而董席則不亦盛哉、然而欲
往勸之、則鯨浪阻海狼烽填山、比年矯首而候視慈航之來帰
而已、今幸依陳公外郎詩韵奇至一絕、述眷卑廳云、指教惟求、

授引有松蔭稿

陳公杏林主盟作詩、寄日之安國堂上老師、洛社耆英賡其韵
者、有金聲有玉振矣、如余難措一辭於其間、雖然適于谷主之

命賦者二篇、呈上安國堂上、伏求一粲、

南山無價軒主守擇

九州不啻誦吾翁、禪道文章聞洛中、心鏡高懸無隔礙、看來千里
是同風、杏林亭上主人翁、心在詩歌吟詠中、遙就老禪王見解、
天香莫隱桂華風、

猥依陳公外郎、嚴韻伏三嘆求於桂菴大和尚、

寓忠峰令偉拜

支許論交此兩翁、遠傳餘韻到山中、何時變化五峰上、虎嘯龍吟
雲與風、

日州安國堂頭禪翁、蚤辭龍峰遠踏鯨浪而南遊矣、敲名寺搜師

家有年于茲、帰楫之後、薩州太守欽其高風、仰止法幢、猶如

王半山創保寧、而延真淨蘇內翰開天平、而薦錄公化之被遐裔、

如斯而已、談者紫陽一邦私吾善知識甚不公也、出蒞大方、則

天下必承其陽誠矣、雒之陳公外郎於禪翁、方外支許也、適投

一詩奉問尊安、雒社諸老宿輒有利、余亦瀆韵末、於戲桑漢畦

姪、豈可並諸老陽白乎、匪不知其非、然而 禪翁之舊、難忘

陳郎之需、難拒之謂也、今也、海內叢林凋零秋晚、在者殘月

長庚耳、所以御前南禪寺也、龍峰虛席以俟、所希禪翁同象轍

於孰路、而與龍吟警鶯寂、則吾山之光華也、櫛之談者論果合

矣、諸老云陳郎亦云伏乞慈削、

南禪栖院宗勢拜

留滯經年霜鬢翁、紫陽萬里海雲中、龍峰舊院少人住、黃葉滿

廊達順風、

日州安國堂上老師、才識兩大、名實兼全、昨在龍門驂譽江湖
之間、可謂一時奇納也、遂歸閩西、不出殆五十年矣、丙寅秋
季安云當水正三年員外郎陳公寄之以小律一篇、余之於老師、雖無一日
之雅、而望道風尚矣、因依陳氏詩韻、作一絕呈上侍机右、聊

寓慕蘭之意云、

訥永璉、号雪嶺別號識盧、嗣九峰成公以華藻鳴叢林、永正戊
辰春、住建仁出于高僧傳四十四、

有雪嶺禪師語錄

玉府永璉載拜

洛下聞人說阿翁、名章俊語品題中、九州皆識有坡老、出類松聲

十里風、

次韵陳外郎見寄、海南桂菴大禪師、

琴臺建孝拜

聲名耳稔海南翁、留在龍峰千衆中、夢中掬道香猶郁、篇前

陳本犀風、

四年丁卯隨例賦、歲旦詩巢松、

奉依桂庵和尚、年頭之尊韻滿、

九夕年華春、有光老禪喚筆賀三陽祖門、多子曉得黃鸝一曲黃、

五年戊辰六月十五日卒於東帰庵、年八十二即葬其地、栽杉爲塚。後二十五年、享祿五年三月十五日供佛齋、僧行之祭儀、巢松爲詩云、

享祿五年三月十五日、前建仁後南禪、柱菴和尚大禪師廿五年之忌辰也、預於三月斯日、營辦供僧齋僧之儀。按桂菴死、墓作六月五日、不知孰是但云預三月、此云三月十五日、此云三月十則五年三月誤六月亦未可知也。昔僕侍和尚之禪室者歲矣、以故述一偈以奉報法恩云、東坡遼南禪寺詩、南禪芳華七子集云、

五々光陰殘夢頃、靈山久遠州郡辰花開、芍藥七千朵、今見南禪一色春、

桂菴歿後、百七八十年至大玄公時、府下ノ耆老無能識其學者、於是國老島津國書久竹、島津主計久年等、深慕其德尋訪竭心、乃聞志布志愛甲喜春獨能識之、屢通書問遂得其處、既而老杉又、經歲枯至リ、享保七年壬寅朽根僅存、亦將泯滅、故十一月大竈寺六世荆山宗王、一乘院主僧克周、妙谷寺主僧通岸、及府下志士錄田醒雲、町田權兵衛、本田与市右門、四本正藏、越山茂右工門、鳥居如見、笛山慶賀、木村探見、田原武左門、仁禮正膳五等、相與圖不傳翕然辨工料、是月十日就塋樹址斫石建之

▲誌、其狀前面題曰、正興三十九世、前南禪柱菴玄樹大和尚禪師墓案島陰集等、未見桂庵正興寺、但文明十年、始應鑿碑八月與竈雲寺王洞俱二達日闕、則有詩焉、而翌年春、公創桂樹院爲之主僧、然レトモ私新寺開州正興寺分自建仁、既二列甲刹、故二尊和尚使私ノ主席、身居新寺教授也、府下永正十七年六月、大翁公任修理太夫、夫時樹桂院玄章首坐、使於京師事古書、

乃チ桂菴弟子、而未至和尚者也、猶領其主席可以考也。土人相傳呼、其墓畔尚謂御庵、亦以可觀其遺愛及遠也、明人洪子經營評品之曰、倭人遊華廣幾乎、華

人者於唐則栗品受經於趙玄默、於宋奮然善屬文、又善隸書出宋元亨、今也柱菴内外究心共可亦謂亞焉、亦愈澤詩稱墨名儒行繙

流第一、又嚴克正謂、尤長於書經、今稽諸漁唱、能亦通詩其觸感所賦清麗、珠璣音韻朗暢匪徒盡、無詩非教曰、孔孟何人在用情、又云壯年業在惜光陰莫怪書、纂庵卷心又云、除却十年灯火讀胸中、自在不傳書、又云思至無邪都是詩、又云人有正心寧愧、天又云积門學在敬心君、又云仁則吾儒所宗、而我佛之大意也、

又云賢者心在救時之類、一、二採載于左、

終日終宵十二時讀書講武、又論詩故是賢賢誠實意樽前、豈敢醉蛾眉、

作在聖人寧及賢吹燈細讀述、而篇師門輕薄書生、僭誰使斯人如レ古然、

曾子橫身孔聖門那知、唯涉多言寥々默坐、夜堂靜堵下無人月有痕、

如何記得伏羲心默坐、寥々至夜深、敏手鑿開混添見、先天一氣後夫今、

〔頭書〕「栗田仲謙是男兒某、慕華風者好々矣、本朝之

古遺唐使之名字燎矣、青史栗田仲謙其尤也、

故反此云、桂菴大和尚示寂之日賦野詩、以奉

師恩云、文之憶昔吾師、挑法灯無心渡、海道能弘德、風凜々百年、後赴者爭先六月冰」

右蓋爲教誨而所作者也、今其真像藏大菴寺、乃秋月所写云、秋月薩人

姓ハ高城氏、游至周防師養谷翁舟學畫、究其妙、作島陰集共二冊明應元年、還隱寓玉菴山中、桂菴和其詩見漁唱、愚謂靜坐一室、對像

吟之玩味其風致、則可足亦概知其氣象、洒落以清吾鄙吝也、

然未果焉、所著有島陰漁唱明ノ賜進士洪子経序、島陰雜著一冊、家法和點一冊等皆傳于世、其遊明也、蓋有南遊集、若文集等、愚未見

之、語在文明五年註桂菴之遊諸州也、無所至而不受教焉、於筑

後則源東谷、於筑前僧書中、於肥後隈部總州・白石兵部・僧舟・僧玄叢等粗見本集、迨其至本藩亦不惟三州諸士受業、雲蹤萍跡之徒不遠、千里負笈求學者接踵不絕、桂菴雖居寺事佛常講宋學、罕及私說以授、邦君圓室公及國夫人以下、諸公族島津達

州勝久大岳公第四子、島津蘿州國久、島津匠作忠廉、忠廉之子

島津忠朝・新納刑部忠親・國老鳥取播州政秀・柳間野辺左門

克盛・市来龍雲寺玉潤・串木野冠岳寺宗壽・伊集院廣瀧寺湖月

大岳公・妙圓寺愚丘・加世田保泉寺舜田・山川正龍寺郁芳・桂

樹院玄章・飫肥之安國寺月渚・隅州安國寺雲夢・吉田長隆寺耕

月・了諭寺即今興化寺此也、悅翁・肥前僧白坂・筑前僧大

年・長門僧睡等加之、洛陽僧果松・僧天用・美濃僧玄勤・越後

華族長尾某・近江貴姓左々木永春等之属、亦皆出於其門、頗於

漁唱等有所見焉、而月渚・郁芳・舜田・祐田・玄章等能得其宗

云、他則未知其各果執弟子之禮也、然皆擁採姑載チクダツ諸下シテ、疾ツク未哲有ルラスヲシキ正焉已、

題大醫陳外郎杏林園

桂菴

虎溪流水市橋東、紅杏成林色映空、結子縱知家產足、飛花那忍五更風、

送大醫陳祖田詩

桂菴

古方靈藥舊家傳、赫々皇華碧海天、祇爲上醫元治國、細論太守近安邊太守督言我圓室公、九夷鬼界三千里、一夢龍山二十年、兄是高僧吾欲故友、至梁落月曉猶懸、洛陽使者到天涯、東筭帰程路轉賾、落葉千山五更雨、早梅十月一枝花、

客中送客堪爲客、家外尋家來到家、故舊周南若相問、衰殘白首命如紗、

薩陽桂菴老人賦四韻二篇、送皇華陳外郎帰京、師拙與老人有

平日之雅素、雖阻天涯萬里、而喜暮齡各無恙、漫依元押奉和情

見于詞也、

喜見佳篇雄社傳、薩陽猶共沈寥天、雲埋鬼窟黑山暮、地隔鯨波海邊、亂後故人成蝶夢、生前再會付驢年、祖翁舊業今休問、磽水松

風夜雨懸、

海角孤雲天一涯、經年故舊夢魂賒、仲靈書折歐韓論、學範筆遷

固家、燈雨三千餘丈髮、春風二十四番花、傳聞華屋陪連師、蘄竹

瑠璃映蜀紗、

茲春當文明十
四年、薩之桂菴禪師、作四韻二章、贈別皇華陳外郎耆英、

在洛皆和之、予

亦次其韻、聊述舊懷、轉以於薩、則可無交友星殘之嘆乎、

蘭坡叟景庭

新詩偶自九夷傳、也識星河共一天、草蠟塞垣雪消地、花濃野館雨
殘邊、我無遠夢堪娛夜、君似故交俱忘年、繙想離亭風笛暮、斜陽
西落月東懸、

學業傳聞至聖涯、行將相問驛程賒、瘦於詩者鬢光雪、老矣自然心
不花、但爲與君住潛邸、幾回和夢宿漁家、衰殘強欲廣高韻、卷舒
翦前四景紗、

太醫陳外郎、上都風流佳士也、文明辛丑之秋當十
三年、準三宮鈞旨
當近江政
家所使也如薩之地、淹留者累月、太守當地內
室公亦推之、是故一國之

士靡弗誦其名、龍峯桂菴禪師居是邦者、幾乎二十年、禪師迺吾

山名勝、而聰明睿知選出乎流輩之百、詩亦熟者也、陳郎與禪師
一往一來殆乎無虛日、或携衣而宿花、或開樽而醉月、其交可謂
不瀆焉、壬寅春還于當文明
四年、都下舊業、桂菴餞之以川八句兩篇、

吾山 泉南利涉老、西枝謙村翁相繼而兄和、顧吾老懷衰墮、然

於禪師有素者尤篤、故攀高韻索一笑於千里外云、

兩首新詩一日傳、上都不隔鬼門天、行々准度塞雲外、泛々鷗眼野
水邊、陳氏即官卜夜、薩州太守話忘年、以南以北盡圖境、三百疊

山春雨懸是即我
丹室公

青衫白首破生涯、一別心知入夢賒、孤角吹殘千里月、疎鐘敲落半
巖花、曾陪洛下耆英社、今問安西都護家、秋楓林冬對雪、憶題聯

句倚窗紗、

薩州桂庵老人、贈別皇華陳外郎之歸京、以八句二章、吾山 彥

賡其韻、予亦備韻、聊述下情伏希刪潤、

別來書信幾回傳、望斷孤雲落日天、早得佳名吾峯上、今橫老氣九州邊、一場法戰已驚世、萬里壯懷空歷年、舊社秋深帰去晚、也知
陳榻爲君懸、

漢使寄蹤蠻水涯、過君日慰客途賒、枯賜稅盡一瓶茗、雙鬢燒殘半
蓋花、燕足懸詩幾處、蝶翎載夢到誰家、想看太守亦當言
論文地、
丹室公

啼鳥畫閣垂絳紗、

辛丑秋、陳外郎承大相國鈞命、暫如九州薩州之名邦、洛東龍嶠
之佳衲、桂菴禪師時寓居其州、偶然相遇、和章若干首、足以慰
籍旅況焉、今茲之春帰船泊泉州、步口訪予於市南小院之次、持
華軸而見授披覽之、專壯國使帰程之詩文也、公告其來意在督拙

和而已、顧我垂八表衰殘時甚、然吟翫有餘、不獲敢然攀高韻者

二章、前篇式擬皇々者華調、後篇寓意於桂翁、文雅之席所謂珠

玉在側、覺我形穢者歟、

泉南隱衲祇齋守湊

數篇唱和遠相傳、莫道鬼門關外天、引客清香疑、寢、愛僧閑假坐
鶯邊、使輶萬里東歸日、孤棹幾程西去年、軟脚局前遙想像、洛園

春月杏梢縣、東洛英豪西海涯、何圖再會歷年賒、別時憶折新亭柳、
亂後撫看舊院花、羊嶺千尋連祖塔、鴨川一帶少人家、交遊回首皆
星散、誰把君詩箋碧紗、

薩州桂菴老人 皇華陳外郎、尊韻謹和之、一一削而正之不亦

幸乎、

曾無別後一封傳、兩地迢々隔海天、紫禁城中舊遊處、赤間關外苦
吟邊、沙鷗爲伴消閑日、塞雁投音慰暮年、雙鬢秋寒燈火底、落梧
吹雨夜闌懸、

紫陽万里浩無涯、久寄高蹤歲月賒、聞說沾幾要擊竹、也知徵笑有
括花、晨參暮請雲中寺、水宿霜眠海外家、爲報早催歸駕去、秋風
影裡岸烏紗、

奉和薩陽桂庵老人、作四韻二章、贈別皇華陳外郎之芳押、慈斤
惟求、久無別後信書傳、忽憶秋風過天涯、鬢帶詩斑此員外、夢
牽情素只君邊、消魂驛路一千里、落手江湖四十年、何日帰來嚴除
寺、楓林紅處夕陽懸、

陽關西望渺無涯、唯有交情路不賅、想像牀頭詩束稿、見未墨跡

筆生花、灑瀾千偈非吾漢、掣電一觀知孰家、他夜相逢又相語、

上窓月色薄於紗、

亂道集拔書

巢松以安 建著

次桂菴和尚三詩之嚴韻并序

僕自幼年、居城南惠阜、而困雪案螢窓者、于茲有歲矣、常侍龍山

蘭坡翁之簷室焉、一日翁謂僕曰雖云、諸史百家之學、猶不東坡一
集也、故老僧竭一生之學斯文焉、僕逐就于翁學之者十數年矣、講

以終其卷而後翁所傳之端岩也九潤也、坡本諸說并批語尽俾僕与之、
剩二跋其後以一語矣、或時翁講何晏集解之魯論、則僕亦陪于其席、

翁日凡叢林於經傳學也、未見原晦菴朱生先註釋也、吾亦未詳其說
也、昔者惠峰不二和尚獨能解焉、蓋入其門受講義者、數人有之、
季弘老人亦其一也、吁斯老今世則凶、未聞傳之、而在洛者竊聞、

叶惠峰不二

桂菴獨寓隱而開講筵焉、菴亦吾故人也、子往以質諸菴則可乎、僕
是歲十月之望以事到於藝之浦、屢次有一客、乃薩之居人也、僕告
之日、薩有桂庵子寧識之平哉、師實名師也、僕所崇敬者久、曾見
師於石見州、於是大內道頓公入師、於軍幕問道加之用師、爲霖雨
用師爲舟楫、猶如高宗之於伝說、又似肅宗之參國師也、然而蠻觸
之爭猶未已既迨乎、國家喪亂則繩索或投閑、或投散焉、自尔以未
師倡道、於薩陽夫薩之爲治也、乃西海佳境而人傑地靈也、自開闢

其地隣大唐也、故有文者益文、有武者益武也、以可尚矣、僕日願于客舟、而將到于薩客日諾、僕忻然而乘一葉、數日而達於州、則其翌日謁樹桂閣下師曰、子何爲乎不遠、千里而來耶對日久抱志於四書之新義也、今ヤ師幸齊此撰若應、僕求則要聞其一・二焉、師許以春、及向之所謂蘭翁之言有謂哉、何幸加焉、頃者以師之命移居於洗竹之室、戲作詩奇、一僧師忝賜和以三絕句、西清詩話云、杜少陵詩如九天雲下垂四海之水、皆立忽翳曰、而翻萬象却浮空、而留六龍萬舞凌亂云々、嗚呼於師之詩文、可謂潤色於少陵者矣、僕一介士復何和哉、廢贊恐有減師之佳德焉、仍賡尊韻以錄呈法坐下云、憶昔春遊芳事、搖梨花夕与綠揚朝、禪翁詩句滿天下、伏聽恭悲改正千載佳名磨不消、石城、曾聽鼓轂搖二十年前似、昨朝百變奧凶唯一夢、再遊看有客遊清、風吹優鉢一花搖、彩鳳啣書北闕朝鈕兮、他年重龍阜黃金、百萬應消

龍阜八、瑞電山南禪寺也。

桂庵和尚、住東山建仁之賀詞、并記柱樹島陰之勝概、

桂菴和尚曾掛錫、於五山之上瑞童峯頂焉、擅其方名者、凡三十年矣、兒童走卒無不誦其價聲也、叢林稱之以遠大焉、從爾天下當兵亂、而禪林盡作焦土矣、以故緇徒分散、於是師又倡道、於海西者茲有歲矣、遂創一院於薩陽之鹿兒島、屬而日、桂樹乃島中之一勝概也、又丈室号島陰蘭若夫島陰之爲治也、前海牆與滄溟相會舟之藏、相霧者不異明石之浦、然中有一島便岸乎海之山、而或如蓬

島、或似浮山院又面之水光瀲灩、而滿山色兮山光空濛、而映水光朝暉、夕陰一日之景千變萬化者、主人詩中之高奧也、萬棟枕涯桂氣鬱々、然者主人仁者之所及也、萬頃蒼波月、即釣虹即繙主人招客之設也、皆是江上之多景、而島陰之壯觀也、苟非主人靖德之所施、則豈得此境乎、吁可嘉尚而已、昔蕭梁之初達磨、西來無一法爲人、武帝親問惜矣、不能受廓然之一失、故乘芦往魏以止、于少林蓋應二株嫩桂之識也、而後五葉分芳爲南北之兩枝、月中散清影雲外飄天香、今也桂菴師以桂樹爲扁、由是觀之曰尊稱曰、院号号名實相備矣、可謂應二株嫩桂之識也、然則孫枝子葉靡弗繁茂也、以祝以讚伏承師戊午之歲欽

既刊史料名

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	2	1	集	史 料 名	
薩藩舊土文 章	鹿兒島縣縣地 誌	鹿兒島縣縣地 誌(上)	鹿兒島縣縣地 誌(下)	鹿兒島縣縣地 誌	薩摩國新田神社文 書	薩摩國新田神社文 書	丁丑日誌(下)	丁丑日誌(上)	薩藩政要錄	薩藩政要錄											
明治元年戊辰戰役關係史料	伊能忠敬の鹿兒島測量	管窺思考・雲遊雜記傳	川上忠塞一家譜	備久公御養子御願	鹿兒島縣縣地 誌	薩摩職掌大紀原阿多郡史	薩摩職掌大紀原阿多郡史	一向宗禁制關係史料	一向宗禁制關係史料	薩藩先公貴翰(乾)	薩藩先公貴翰(坤)										
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
薩藩範學事 校	薩藩天保改革關係史料	譯司其加錄・漂流民關係史料	薩藩天保改革關係史料	島津世記	桂久武書	桂久武書	桂久武書	桂久武書	小松帶刀傳・履歷・記事	小松帶刀傳・履歷・記事											
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
尾口義男	唐鑑祐祥	芳即正	五味克夫	晋哲哉	下堂園純治	芳即正	五味克夫	晋哲哉	下堂園純治	芳即正	五味克夫	晋哲哉	下堂園純治	芳即正	五味克夫	晋哲哉	下堂園純治	芳即正	五味克夫	晋哲哉	下堂園純治
鹿兒島純心女子短期大學	鹿兒島國際大學	鹿兒島勤講師	鹿兒島大學名譽教授	蒲生町長	蒲生町長	蒲生町長	蒲生町長	蒲生町長	蒲生町長	蒲生町長											

平成十三年度
鹿兒島縣史料刊行委員會委員

(五十音順)

吉元正幸	宮下溝郎	前床重治	原口泉	島中彬	堂満幸子	島中原	島嶼	島嶼													
鹿兒島西高等學校長	鹿兒島市文化財審議會委員	鹿兒島高等學校長																			
鹿兒島西高等學校長	鹿兒島市文化財審議會委員	鹿兒島高等學校長																			
鹿兒島西高等學校長	鹿兒島市文化財審議會委員	鹿兒島高等學校長																			
鹿兒島西高等學校長	鹿兒島市文化財審議會委員	鹿兒島高等學校長																			

薩藩学事二・薩藩学事三

(鹿児島県史料集 第四十一集)

平成十四年三月

発行 鹿児島市城山町七一
鹿児島県史料刊行会

電話 ○九九一二二四一九五一
FAX ○九九一三三四一五八二四

鹿児島市中央町二十七一十六
かわち印刷有限公司
電話 ○九九一三五四一五〇五四

印 刷

